
さくらヶ丘恋物語 1 桜

くまのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらヶ丘恋物語 1 桜

【コード】

N90801

【作者名】

くまのすけ

【あらすじ】

寅さんみたいな話を書きたいなというので、書き上げた作品です。中年男ではなく、とびきり美少女・神宮寺つかさが、みんなの恋を応援します！

ひよんなことから、同級生の学級委員長の恋心に気づいたつかさ。様々の人との出会い、共同活動の末に、学級委員長の恋が成就するのか？

神宮寺つかさが学級委員長の恋を応援します！

私、私立神宮寺高校1年、神宮寺つかさ。

自分で言うのもなんだけど、美少女！ それも、とびつきり！

毎朝、身支度をするときに、鏡を覗き込むんだけど、そのたびにうっとり見とれちゃう。

つかさちゃん、今日もカンペキ！ かわいい！

つかさちゃんが姿を現すだけで、街の男どもは、今日も私の前にひれふしちゃうわ！

ふっ、私って、罪な女。

私立の神宮寺高校で、名字が神宮寺だから、まるで、私、理事長の娘かなにかみたいだけど、全然そんなことはない。

パパは、普通のサラリーマンだし、ママもパートで働いているけど普通の主婦。

もちろん、神宮寺高校の理事長も、名字が神宮寺で、私と同じ。神宮寺って全国的には、珍しい名字らしいけど、私の住んでるこの市では、結構ありふれてるんだよねえ。

もともと神宮寺っていう、由緒あるお寺の住職の名字なんだけど、何代も何代も分家が独立したんで、市の100軒に1軒ぐらいの割合で、みんな神宮寺。

大体、私のお友達にも、神宮寺なんて名字の子、いっぱいいるし・・・

そもそも私が通っている神宮寺高校って、この冬、入学試験を受けたときは、私立さくらヶ丘女子高等 学校っていう、もつとずつとかわいらしい、お嬢様学校って感じの高校だった。

なのに、なのに・・・

最近の金融危機のせいで、学校の運営母体の財団が破綻したとか

で、近くの私立高校に吸収合併されちゃって、今の最悪な名前の高校になっちゃった。

ほんと、ヤになっちゃう！

さく女のあのミニスカート制服、すごく、かわいかったのに・・・

ああゝあ

今じゃ、こんなクリーム色と紫のヤボった制服！

ああ、ヤダヤダ！

今日も、私、最悪な制服つまれ、憂鬱な気分で、通学路を歩いていた。

入学式から、もう1週間。

私の家から、学校まで、徒歩10分。住宅街を抜けると、国道を横断して、両側に桜並木がつづく坂道を上りきった先に学校がある。元さくらヶ丘女子高校のあった現神宮寺高校第二キャンパス。今は私たち神宮寺高校の一年生だけが通っていて、上級生たちは、麓の神宮寺高校第一キャンパスへ通っている。

国道をまたぐ歩道橋の階段をトントんと上る。

今日も、国道は朝のラッシュで大渋滞。動けない車が撒き散らす排ガスで空気がわるい！

息を止めながら、歩道橋の上を走り、反対側の階段を駆け下りた。そして、歩道橋の下の学校へつづく横道に飛び込み・・・

「おっす！つかさ！」

最初の交差点の角で待っていた同じA組の同級生が手を振ってくる。

同じ中学からさく女へ通うはずだった、ありさちゃん。斉藤ありさ。私より、美人度では、かなり劣るけど、世間様的には、美少女で通用するんじゃないのかな？背が高くて、引き締まった体のスレンダー系モデル体型の美少女。これでも、剣道3段、柔道4段、合気道5段の格闘好き。

「ありさちゃん、おはよう」

美少女にふさわしく、かわいらしい笑顔を浮かべて、さわやかに挨拶をかえす。ついでに、ちよっと胸の前で手を振って見せたりとか。

「きゃあ……」

ちょうどタイミングよく、風が吹いて、私の肩までの髪をそよがせ、両脇の満開の桜から、花びらがふりそそぐ。慌てたふりで、髪を押さえて、ゴミが目に入らないように、風下へ顔をむけ、ぎゅつと目をつむってみせる。

そして、ゆっくりとはにかんだような微笑を浮かべながら、まぶたを開いてみせると……

うふふ、今一瞬、眼があつたその君、瞬間的に、恋に落ちたわね。

ほんと、私って、罪な女。

それも仕方ないことなのよ。だって、神宮寺高一と噂される美の女神、つかさ様なんだもん！

ゆりていロー 1 (後書き)

もともとブログで掲載している作品です。
加筆・訂正の上で、こちらへ移植します。

くまのすけの小説ブログ『恋とか、愛とか、その他もろもろ・・・』
： <http://loveetc.seesaa.net/>

作品ページ『さくらヶ丘恋物語1 桜 目次』：<http://loveetc.seesaa.net/article/130104736.html>

「すっごい、きれいだねえ〜 さくら」

ありさちゃんは胸の前で手を組んで、うつとりと満開の桜を見上げてた。

「そうだねえ。きれいだねえ」

ちよつと投げやりな感じで思わず返事しちゃったかな？ だって、けっ！ そんな桜なんかより、私の方が百倍もきれいだって思っちゃったんだもん！ だいたい、それは事実だし……

「うつとりしちゃうよねえ。世界がすべてピンク一色に包まれて、夢の中に浮かんでいるみたい、ステキ〜」

ありさちゃんは、夢見る少女のポーズのまま、桜を鑑賞している。

「うんうん」

「私ね、『さく女』に入りたかったの、この桜の坂をこうやって歩いてみたかったからなんだあ〜」

「へえ。そうなんだ。よかったね、ちゃんとこの道を通れたじゃない」

「うん。私、今、すごく幸せ！」

へえへえ、そりやどうも、お幸せなこつて。

私は、心の中をうかがわせないように、うふふとかわいらしい微笑を顔に貼り付けたまま、ありさちゃんの隣に立っていた。

「ねえ〜？ つかさは、なんで『さく女』だったの？」

「え？」

いきなり、ありさちゃんも、なに訊いて来るかなあ。私が、さく女に入りたかったのは、清貴さんのお母様の三木先生がこの学校に勤めてるからなのに…… それと……

ちよつとダークサイドに落ち込みそんな思考をなんとか、踏みとどまらせ、無邪気な表情を装って。

「うんとね。私、さく女の制服、憧れてたんだあ」

あのほんのり桜色の上着。モスグリーンのミニのスカート。すごくステキだったのに……

でも、これは3番目ぐらいに重要な理由。

「ああ、残念！　じゃ、つかさ的には、あんなことなければよかったのね」

「うん！　さ・い・あ・く！」

今日も元気なつかさちゃん！　ふぁいとぉ〜！！

私とありさちゃんは、ゆっくりと桜並木の道を登り始めた。

私たちの前を歩く男子二人連れは、チラチラと後ろを歩く私たちの方をうかがい、コソコソとなにか話し合っている。

たぶん、思い切って、私たちに声をかけ、友達になろうとかなんとか、相談しているんだろうなあ。

でも、同じクラスでもないし、学校で一番と二番の美少女コンビから発する美少女オーラは圧倒的だし、この子たち、気おされて、声をかける勇氣なんて、でてこなさそう。

ほんと、かわいい男心。

でも、実際、こんな汗臭いガキたちには、私もありさちゃんも興味なんて、持てないんだけど……

やがて、坂道の途中、まだ『さくらヶ丘女子高等学校前』ってなっているバス停が見えてきた。そろそろ、あいつが飛びついてくる頃。心の準備をして、おこなくちや！

深呼吸をひとつ。

よし、準備はOK！

その途端、バス停の影から、男の子が……

「つかさあ〜　おっはよ〜！」

「きゃあっ！！」

いつものことだし、心づもりもOK。しっかり音程と音量を調整して、聞いている周りの男の子たちがうっとりしちゃうような、かわいらしい悲鳴をあげたりなんかして。

そいつは、いつものように私に抱きついてきて、私の肩を抱く。中学のときから、こいつはいつもこう。毎朝、登校途中で、私たちを待ち伏せて、いつも私に飛びついてくる。本当は、ありさちゃんに飛びつきたいくせに！

でも、いくら、いとこ同士だからって、毎日、毎日……うつつうつしいヤツ！

「でたな！ ヘンタイ男！」

で、今日もありさちゃんの怒鳴り声が響いて……

「……うわっ！！」

そのヘンタイ男は宙を舞い、ありさちゃんの足元に叩きつけられると……これもいつものことだけだ。

「いいかげんにしなさいよ！ 毎日毎日。つかさが迷惑してるの、わかんないの！」

見事に決まった一本背負いに、思わず周りの高校生たちが拍手している中、腰まである長い髪をかき上げて、ありさちゃんは、そいつを冷たい視線でひとにらみ。

フンツと鼻を鳴らして、一人で先いつちゃった。

そいつは、道路に伸びたままで、へらへらと笑い出し……って、別に打ちどころが悪かったわけじゃない。

「今日は水色だった。うへへ」

私は、その場へしやがみこんで、ツンツンとそいつのほっぺたをつつ突いたりして。

「まなぶ君、いいかげん、ありさちゃんに告白したらどう？ 毎朝、投げとばされてたりしないですか？」

そいつ、神宮寺学は視線だけを私の方へ動かして、軽くウィンクしてみせる。ありさちゃんの一本背負い、傍から見れば、きれいに決まったみただけで、学君も、剣道4段、柔道5段、空手は6段。しっかり受身をとっていて、ダメージなんて、ほとんどないんだよねえ。ほんと、不死身の学君！

「ちっ、ちっ、ちっ、毎朝、投げ飛ばしてくれないと、ありさちゃん

んのパンティ見れないじゃん！」

「まったく！ これだから、さかりのついた男ってヤツは！」

私、立ち上がって、さっさと先をいくありさちゃんを追いかける。
ふげえっ………

なにか足元で断末魔のような声が聞こえた気がするけど、きっと
空耳、空耳だよな。

校門の前で、ありさちゃんに追いつき、グラウンドの脇を通って、玄關へ。

顔見知りの同級生たちと『おはよう』って言い合って、華やかな笑顔をあたりに振りまいて、私たちはガラス戸が全開になっている玄關の中へ。

A組女子の下駄箱ゾーンへ歩いていく私たちを、追いかけてくる足音が……

「さ、斉藤、神宮寺、おはよう」

サッカー部の島崎君。麓の神宮寺高校へスポーツ推薦で入学した一年生。ボールは友達！ 噂では、お風呂のとき以外、常に足元にサッカーボールがあるらしい。

「島崎君、おはよう」

「おはよう、島崎」

私たちは、島崎君の方を振り返って、にっこりと微笑んであげた。「さ、斉藤、今日、放課後ヒマ？ 映画のチケットが手に入ったんだけど、一緒に見に行かない？」

「まったく！ デートの誘いか。まただよ……」

「ごめんね、島崎君、私、好きな人が……って、え？ えええ！？」

「さ、さいとう……？ 斉藤……？ ありさちゃん？ なんじゃそりゃ！？ 私じゃないの？」

「ありさちゃんなんかより、私の方が、何倍も可愛いんだぞ！ 絶対、ありさちゃんではなく、私、神宮寺つかさ様をデートに誘うべきじゃないの！」

島崎、お前の目は節穴か？ その目ん玉は、腐り果ててるのか？ さあ、まだ遅くはない！ 私の前に虫けらのようにはいつくばって、神をあがめるように、そのチケットをささげもて！ そして、

私に、そのチケットを貢ぎなさい！

私の抗議の視線に気づくことなく、虫けら・島崎は期待を込めて、ありさちゃんを見つめている。

つと、そのとき下駄箱の奥のほうから、誰かがポツリとつぶやくのが聞こえた。

「……………島崎君……………」

私は、その声の方をチラッと見た。しょんぼりと背を丸めた少女がひとり校舎へと入っていく。あの後姿は……………めがね巨乳の学級委員長。

そっか、そうなんだあ〜

よそ見をしている私の横で、ありさちゃん、困ったような声で、

「あ、ごめん。今日はつかさと、シヨッピングに行く約束をしたんだあ〜 ごめんねえ〜 また、今度誘ってねえ〜」

とかなんとか……………

あらら、断られてやんの。ふん！ 美の女神つかさ様を無視したりなんかするからよ！

それから、つたく！ ありさちゃんも、勝手に私の名前もちださないでよ！

ありさちゃんは、話が終わったとでもいう感じで、軽く手を振って、とつとと自分の下駄箱へ歩いていくし、当然、美少女つかさちゃんとしては、その後をフォローするように、島崎君に笑顔を振りまいて、ありさちゃんの後を追った。

「そっかあ〜 じゃ、また、今度、誘うから！」

島崎君のめげない声を背にして……………

4時間目が終わり、すこし、涙声が交じったような『起立、礼』の掛け声のあと、お昼の時間。

私たち女の子組は集まってお弁当を広げてた。

私とありさちゃんの他に、名も無き女子4人。

ワイワイ、ガヤガヤにぎやかなお弁当の時間。

「ねえ？ 昨日のドラマ見た？」

「シユンくん、格好イイ！」

「え〜！？ ダイちゃんの方が、ずっといいよ！」

とかなんとか……

「私的には、ケイちゃんが後藤なんかと、くっついてほしくなかったなあ〜」

「ああ、それ同感！」

「でしょ？ でしょでしょ！」

意味のない会話で盛り上がりつつ、お母さんが作ってくれたタコさんウインナーをパクツ。

「ねえ、後藤って、いったら、なんか、島崎に似てない？」

部屋の隅で、別のクラスの仲良しのショートカットの女の子とランチしている学級委員長の背がピクリと動いたのを、目の隅で確認しつつ……

「ええ？ 似てないよあ〜」

「そうかなあ、日に焼け具合とか、口調とかさあ〜」

「あ、それ分かるかも」

「でしょでしょ。絶対、島崎に似てるよ！」

フンフンとその名もなき女子が一人うなずいている。

「ねえ、島崎っていったら、昨日、さくら館の窓口でチケット買ってるのみたよ」

「へえ〜 どんな映画あ〜」

「ほら、レオナルド・チャンドラーが出てるアレ！」

みんなの頭の中に、この春封切られたばかりで、泣ける映画として人気がある純愛モノがうかんだ。

「……プツ！」

で、おもわず、一斉に吹き出す。

「あの島崎があ あははは」

「きゃははははははは」

「ははははは」

島崎君には悪いけど、あのサッカーバカ、脳みそ筋肉男に純愛映画は似あわねえ〜！！

ありさちゃんの方をチラ見しながら、私も笑い声をあげていた。

「ねえねえ？ 島崎がああの映画のチケットを買ってたってことは、もしかして、島崎って彼女いるの？」

「え？ あつ、そうかあ〜 いくらなんでも、あの映画、男の子一人でみるわけないもんねえ〜 島崎一人だったら、アニメ見るだろうし」

「えええ！？ あの筋肉バカに彼女あ〜」

「絶対、ないよ！ ありえな〜い！」

「妹か誰か家族のために買ったんじゃないの？」

「でも、あいつ一人っ子とか言ってたよ？」

「じゃあ、お母さんのため？」

「マザコン！」

「チヨーキモ！！」

「もし、彼女のためだったとしたら、島崎の彼女ってだれ？ クラスの子？」

女子6人組はキョロキョロと周囲を見回していた。若干、2名ほど、わざとらしくそのマネをしていたけど……

私たちがキョロキョロしている間に、お弁当を食べ終わったのか、学級委員長は、静かに立ち上がって、ランチしていた友達と一緒に、

教室を出て行った。私たちの声が聞こえないところへ行きたいんだねえ〜 きつと。うん、わかるよ。その気持ち。

「島崎って、文香ちゃんとイイ仲だったんじゃないの？」

「ええ〜？ 文香ちゃんって、藤原本命じゃん！」

「じゃあ、しーちゃん？」

「しーちゃんは、中川君」

「う〜ん、だれだろう？」

「あ、そういえば、昨日、国語の時間、あいつ、ありさちゃんのことずっと見ていなかった？」

その一言で、一斉に4対の視線が、デカ口をあけて、卵焼きをほおぼろうとしていた女のもとへ集まる。

「ぐふ。おいしい〜 しあわせ〜」

なんて、卵焼きをほおぼりながら、わざとらしく、つぶやいて見せやがって、この女は！

「ないない！ 絶対ないよ〜！」

ありさちゃんは、胸の前で手のひらを広げて、力いっぱい振ってみせた。

「だって、私には、清貴さんがいるんだもん！」

ポツと頬を染め、両手で隠そうとするし……

言っに事欠いて、なんてこと言うんだか。この発情ムスメは！

清貴さんは、私のものなんだから！

大昔、清貴さんのお母様の三木先生から、冗談でお嫁さんにどうって、言われたからって、調子に乗ってるんじゃない！

「そっか、そうだよねえ〜 ありさちゃんが島崎と付き合うはずないよねえ〜」

女子連中、妙に納得。

「あの清貴さんがいるんだしね。島崎なんかに乗り換えるわけないか……」

って、それはちよっと、私的には、不愉快な言い草だぞ！

島崎君がどうのこうのではなくて、『清貴さんがいるんだし』ってところが……

「ありさちゃんでないとするとお……」

全員の視線がゆっくりと私の方へ移動してくる。

「定番だよねえ」

「ふつつそつだよねえ」

「ねえ」

口々に、言い合いながら。ありさちゃんまで、ウンウンとうなずきながら、私を楽しそうに見ている。

なんかちよつと悔しい。なんで、島崎君、ありさちゃんなんだろう？ こいつらがいうように、普通、わたしでしょ！

この学校で、一番の美人なんだから。

そんな心の中のもやもやを吹き飛ばして、つとめて明るく、ここの一番の笑顔でにっこり微笑んで、

「でも、私じゃないんだ！」

てへつと可愛く舌だし。

「ええ〜！ つかさちゃんじゃないの！」

「うつそお〜！」

「えええ〜〜！」

「ええ！ うそ〜！」

なんだか、その名もなき女子4人組、やけにうれしそうじゃん！ ええ、そうよ！ 私じゃなく、その薄笑い女よ！

「じゃ、だれ？ 島崎の彼女って、だれ？」

ワイワイ騒ぐ女たちに、口の端を引きつらせた笑い顔を向けて、私は、最後のおにぎりを口の中に放り込んだ。

おええ〜〜

私の大っ嫌いな梅干しのおにぎりだった……

大嫌いな梅干しおにぎりを苦勞して飲み込んで、お口直しに、お茶を一杯。

ほっと一息ついて、ワイワイ盛り上がり上ってる女の子たちから視線を外す。

教室の中は、3分の1ほど席が埋まっているだけで、ほとんどガラガラ。

私たちお弁当組以外は、購買部でパンを買ったり、食堂でランチしたりしているみたい。購買組も、いちいち教室にもどってきたりしないで、食堂や中庭のベンチで食べている。

教室の中、グルッと視線をめぐらすと、何人かの男の子は、慌ててそっぽを向く。で、私の視線が通り過ぎた頃、恐る恐る私に視線を戻すんだよねえ。

ホント、うつつうしい。

そんなに、私のことを見つめても、あなたたちでは、私の恋人役として力不足なのよ。

視線が教室を半周すると、廊下側の席で、中川っていうテニス部の男の子が、私の視線を避けたりせずに、しっかりと受け止める。彫りの深い、男くさい顔立ちの男の子。女装させたら相当な美少女になりそうな繊細な顔立ちの学君とは、好対照。いかにも、女の子になれた、プレーボーイ的な雰囲気。実際、何人か、彼にぞっこんの女の子がいるし。

中川君、目が合った途端、軽く手を振ってくる。いかにも女の子慣れした仕草。様になっていて、格好イイかも。

それに対して、私の方からは、必殺エンジェルスマイルが炸裂。勝負はあつけなくついちゃった。

彼、手に持っている箸をポロリと取り落す……………私の圧勝ね。

で、その中川君と一緒に男子同士でむさくるしくお弁当を食べているのが、副学級委員長の佐野君。

でも、なんか感じ悪い！

私が、エンジェルスマイルで中川君のハートをがっちり虜にしたのを見て、薄笑い浮かべてる。顔の表情は緩んではいるけど、目は鋭いまま。冷静に、私たちのことを観察している。なんのつもりなんだろう？

えい！ こうなったら、佐野君もエンジェルスマイルで悩殺だ！

そんなときに限って、気の利かない女子って邪魔してくれるんだよねえ〜。

「ねえねえ。つかさちゃんのパテトサラダ、おいしそう。私のきんぴらとトレードしよ」

ポテトサラダ対きんぴら。圧倒的に、私の方が損してるような気が……。

ともかく、無事交換がすんで、再び廊下の方をみると、佐野君、私に背を向けて、他の男子とお話中。

運のいいヤツめ！ 今日のところは見逃してやる！ 次回は、必ず、この美と愛の女神つかさ様のエンジェルスマイルで、かなわぬ恋に身を焦がさせてやるんだから！

女子だけのお昼が終わった頃、教室にもどってきたのは、学君たち。

入ってくるのを見つけた私、早速学君に声をかけた。

「学君、今日もいい？ 放課後、二人なんだけど？」

「ああ、了解」

指二本を細い眉毛に当てて、格好をつけて、ウィンク。それを見てた、周りの女子たち、わあくだとか、きゃあくだとか黄色い声を上げたりして。

でも、その中に、一人だけ、うへっだなんて、いやそうな変な声。ありさちゃん、顔までしかめちゃって……。

そんなありさちゃんの様子をチラ見しながら、学君、少し離れた自分の席へもどっていつちゃった。ちよつと複雑な表情を浮かべて、女子たち早速島崎君のことなんか忘れて、学君を話題におしやべり開始。

「ねえねえ、つかさちゃんとまなピーって、どういう関係？」

女子たちの視線がまた私に……

「いとこ同士だっけ？ つきあってるの？」

「いとこだけど、つきあってはいない」

私は事実をいうだけ。それでも、目を輝かせて、根掘り葉掘りききだそうとするのが、女の子。

「えええ！ でも、いつも一緒じゃん！」

「そうそう、学校来るときも、毎朝二人して、抱き合ってるし！」

「ほんと、怪しいよねえ」

「って、私、だれとも抱き合ってません！ あいつが勝手に、くっついてくるだけよ！」

「ほら、まなピーのことになると、すぐにムキになる」

「なってるわいよ！」

「ほら、なってるよねえ？」

「たたく！ なんだかしつこい女が一匹いるような……」

「それに昨日も、放課後、学君と体育倉庫の裏へ入っていかなかった？」

「ええ〜二人、そんな仲だったの！」

「たのしそうに、おしゃべりしてさあ〜 あそこ、滅多に人がこないところだよねえ〜」

「ええ〜！！ すご〜い！ 二人、そんな関係だったんだあ〜！」

「って、どんな関係だつてえの！」

「ハア〜 私ひとつため息。」

「私たちが、体育倉庫の裏へ入っていくのを見たのなら、二人つきりじゃなかったのも、見えたでしょ？」

「ええ！？ 気づかなかった……」

「まったく！ この子も目は節穴なの？」

「あ、そうか、他の人もいたんだあ〜 とかなんとか、つぶやいてるし。おや、一瞬、顔がほころんだような……」

「もしかして、この子、学君のことが……」

「だいたい、学君って、いとこだし、近所に住んでたし、子供のときからも知ってるしで、仲のよい幼馴染みだけど、いまさら彼氏とかがって感じじゃないんだよねえ。なんていうか、最初から圏外っていうかあ。男性として見れないというか。そう、あれよ！ あれ！

兄弟。私の弟って感じ？」

「それに、学君がすきなのは、私じゃなく、そこで我関せずって感じで、鏡のぞいてる女なんだし……」

「学君も、私のこと女兄妹ぐらいにしか、思っていないみたいだしね」「そ、かあ〜 そうなんだあ〜」

「妙に安心したような表情を浮かべて、ひとりうなずいているさっきの女が一匹。なんか、楽しげな未来を思い浮かべていそうな様子だけど、私、あなたが不快なほどしつこかったこと、忘れてたりなんてしないのよ！ 妙な夢を思い描いて、幸せな妄想にひたっている今こそチャンス！ ここで、切り札を一枚切って、その夢をずたぼろに引き裂いてあげるわ！ そう、さっきのお返しよ！！」

「それに、小さいときから、一緒にお風呂とかに入ってたから、お互いのこと全部知りすぎてて、全然意識できないんだよねえ」

「なんて、指に前髪をくるくる巻きつけたりして……」

「とたん、目の前のその女、視線を落として、自分の膝を見つめた。ふふ、唇をかんでるよ。ざまあ、みる！」

「って、学君、そんなところで、のみかけのコーヒー牛乳を全部嘔き出しちゃって、どうしたの？」

「それに、なんだか、クラスの男の子たち、学君のこと、すごい目でにらんでる！」

「おまえな」

放課後、私と学君は、体育館の裏手へ向かって並んで歩いていた。ありさちゃんは、剣道部の部活に参加するために、一人で部室の方へいつちやった。

「ごめん、なさい……」

「お前があんなこというから、午後ずっと、他の男子に無視されっぱなしだぞ！」

「ったく！」

「ごめん、なさい……」

さつきから、私、謝ってばかりだ。大体、本当のことを言ったまでだし、なにも間違ったことを言ったわけじゃない。どうして、私が謝んなきゃいけないのよ！

ちよつとむくれた私の頭を軽く殴るみたいな真似をして、学君、話題を変えた。

「で、今日はどんなヤツ？」

スカートのポケットから、手紙を二枚取り出して、学君に渡した。受け取った手紙を裏返して、差出人を確認する。

「えーと、C組の脇田に、D組の熊坂つと……」

そう、今朝、私の下駄箱に入っていた手紙二通……
いわゆる恋の呼び出しレターってやつだ。

「ほんと、お前つてもてるなあ」 毎日毎日……」

いまさらのように、学君も感心する。そう、入学式の翌日から、私の下駄箱には、毎朝ラブレターだとか、男の子からの呼び出しレターが入っていたのだ。それも、毎回違う男子から……
「大変だよな。お前も」

「うん……」

こういう古典的な告白の形だけでなく、どこで調べるのか、私の

携帯に電話やらメールで告ってきたのも含めれば、すでに30人に告白されているってことに……

30人……

考えてみればすごい数。30人の男子っていえば、クラス1つ半だよ。一週間でコレだけの数になるんだったら、これからの一年でどれぐらいの人数になるんだか……
ちよつと恐ろしい数になっちゃいそう。

でも、私は美少女戦士つかさちゃんだから、コレぐらいのこと当然といえば当然。この程度のことと、驚いたりしてはダメ！ 美少女に生まれついた私への、こんな神様のいじわるな試練ぐらい、見事に乗り越えて見せるわ！

むぎゅっ！

力を入れて、こぶしをにぎり、あさつての方角をにらんで、きめポーズしたりして。

学君の冷たい視線を感じる気がするけど、無視よ、無視！ つかさガンバレ！

本当なら、脇田くんとかいう子の待つ体育館裏へ、私一人で行くべきなんだけど。

……相手も一人なんだしね。

でも、私、いつも学君か、ありさちゃんについてきてもらってる。だって、一人で男の子が待つ場所へ行くなんて、まして、男子と二人きりになるなんて、かなり怖いんだもん！

経験上、告白してきた男子に、ごめんなさいすれば、大抵は、その場所から素直に立ち去らせてくれるんだけど、中には、そうでない卑怯な男子もいるんだよねえ。

もともと、人気のない場所に、私と男子の二人きり。

私は、どうみても、非力でかわいいだけの女の子。相手は未成年だといつても、男。

想いがかかわないって、知った途端、力づくで何とかしようとする

るヤツがたまにいるんだなあ。そこで、格闘技全般が得意な学君やありさちゃんの登場。毎回、そういう力任せの卑怯なヤツなんか、コテンパンにやっつけて、私を救い出してくれる。

あれは、小学校4年生のとき。

私に、生涯で5番目に告白してきたのが、2つ年上の6年生。下校途中にあるマンションの駐車場へ呼び出されて、ごめんなさい、あなたと付き合えませんかって言ったとたん、あいつ私を押し倒して唇を奪おうとしてきた。

私、必死に抵抗して、悲鳴をあげたんだ。

そしたら、たまたま、そのマンションから出てきて、私を助けて出してくれたのが、清貴さん。私、初めて、男の人に恋をした。

だって、あの乱暴な6年男子を大声でしかりつけて、追っ払い、やさしくケガはないって、手を差し伸べて、助け起こしてくれたんだもん！

あの手、頼りがいがあって、がっしりしていて。それなのに、指が繊細で、白くて……

王子様の手。私の、私だけのプリンス。

まぶしい笑顔の清貴さんの背後に、純白の羽が見えた気がする。

清貴さんは、そのマンションに住んでいて、そのときは高校3年生。ってことは、8つ年上。コンビニへ買い物に行くために、駐車場の脇に止めてある自分の自転車を取りに行こうとしてたところだった。

でも、それから、私、すっかり怖くなっちゃった。

男の子から呼び出された場所へ、一人でのこのこ出むいたら、また、男の子に襲われるんじゃないか、今度は、清貴さんがいないから、唇を奪われるどころか、もっとひどい目にあっちゃうんじゃないかっておびえてた。

だから、ずっと、呼び出されても、出かけず無視してばかりだっ

た。

そしたら、私に無視された男の子たち、怒り始めちゃって、私をいじめようになつたんだ。男の子たちが私をいじめようになつたら、もともと私が可愛くて、男の子たちに人気があるのを妬んでいた女子たちも、一緒になつて私をいじめようになつた。

はつきり言つて、男の子たちからのいじめより、女の子たちからのいじめの方が、ひどかった。つらかった。

男の子たちがいじめるっていつても、私の持ち物を隠したり、スカートめくりをしたりとか、その場では、悔しかったり、はずかしかつたりするけど、それで怪我したりなんかしない程度のもの。だけど、女の子たちときたら……

体育の時間に私の服を持ち出して、裏のドブに捨てたり、かみそりを上履きにしこんだり、画鋏を椅子の上にまいたり……

ほんと、地獄のような毎日だった。

そんな、悲惨な小学校時代をすくってくれたのが、ありさちゃんと学君。

私が男の子恐怖症だつて気づいてくれて、呼び出しに一緒についでてくれるようになったし、他の子たちが、私を傷つけようとしていないか、それとなく目を光らせて、見張ってくれていた。

それだけでなく、私を守るために、二人とも、体を鍛えるようになったし……

ほんと、二人には、感謝しても、感謝しきれない。

ありさちゃん、学君、ほんとうに、ありがとう！

でも、だからといって、二人が通っていた道場の先輩の清貴さんに、ありさちゃんが恋しちゃったのは、許せないけどね！

体育館の角まできたら、私そつと首を伸ばして、裏手の様子を確認した。

いた！

体育館の裏手の日の当たらない、ひねくれた木を背にして、じつと立っている。

とりあえず……

デッキから、カードを2枚伏せて、ターン終了！

私は、元気よく、裏手へ足を踏み出した。

「えっと、脇川くん？」

つて、わざと名前を間違えて呼んであげる。ドジっ娘つかさちゃん登場！

「あ……わ、脇田です」

「あわわ。ごめんなさい」

慌てた様で、手をブンブン胸の前で振って、いつものように、私のかわいさを演出と。

これから何が起きるのか、何も気づいていないかの様な純真な表情で、かわいく、かわいく見つめてあげると、あらら、彼、耳まで真っ赤に染めちゃって。かわいい。うふ。

「脇田くん、なにか私に用？」

「……」

地面をもじもじ見つめて、なかなか用件を切り出せないみたい。たまに、こういうのいるんだよねえ。

呼び出しレターを私の下駄箱にいれるのに、もってる勇気を全部出し尽くしちゃって、肝心のときに、びっしときめきれないヤツ。

でも、大丈夫、この天使つかさちゃんは、辛抱強く、君がなければの勇気をかき集めなおすまで、待っていてあげるよ。

「……」

「ここにここに……」

「……」

「ここにここに……」

私、辛抱強く、にこやかに、待ってあげていた。

「……」

「ここにここに……」

「……」

「ここにここに……ピキッ！」

「ちょっと、脇田くん？ 私に用事があるから、呼び出したんじゃないの？」

「あ、あの……」

「ここにここに……」

血管がしだいに浮き上がってくる！

「用事ないんだったら、私、もう帰るね」

「あ、まって……」

脇田くん、私の手をつかんで、引きとめようとする。結構強い力。

「い、いったーい！」

「あ、わわわ、ごめんなさい、神宮寺さん、大丈夫？」

痛さで目の端に、うすく涙をうかべてみせたりして。

それを見て、脇田くん、さらに顔の赤みが増して……

突然。

「好きだ！！！ オレ、君のことが、好きです！」

くふ、大声上げちゃって。そんなに叫ばなくても、目の前にいるんだから、十分聞こえるってえの。

その後は、結構、すばやかだった。今までのもじもじした態度がウソみたい……

彼、私に向かって飛びついてきた。

思わず……

ばしっいいん！

私の平手が、脇田くんの顔に炸裂した。

「やめてよ！ なにするのよ！ 飛び掛ってきたりしないで！」

そんな私の抗議にはおかまいなく、抱きついた姿勢のまま、脇田くん、「好きだ！ 好きだ！ 好きだ！ 好きだ！」

「まったく、でたな、自己中、好きだ男！」

あなたは私のことが好きでも、私はあなたが好きではないの。

私は、なんとか脇田くんを押しつけようとしてみるけど、さすが男子、私の力ではびくともしない。

そうこうするうちに、脇田くんを押されるようにして、体育館の壁におしつけられた。

もう、やだ！ 背中がよごれちゃうよお！

と、脇田くん、私の顔を見た。

やばっ！ その視線からだ、ぷっくらとかわいい私の唇！ 私は必死に首を曲げて、脇田くんの視線から、唇を離そうとした。そして、

「助けて！ 学君！」

リバーズカード『伏兵』オープン！ もう一枚のリバーズカード『守護精霊マナブ』召還！

体育館の角から、「呼ばれて、飛び出て、じゃじゃじゃーん」なんて、なつかしのフレーズを口にしながら登場してきたのは学君。あつという間に、脇田くんを私から引っぺがした。

さすがに、今の醜態を他の人にみられ、恥ずかしくなったのか、脇田くん、逃げていっちゃった。

ふう~~~~

いつものこととはいえ、疲れちゃうよ。まったく！

思わず力が抜けて、しゃがみこんじゃった。

「ありがとう、学君」

学君、ナイトがプリンセスにするみたいにお辞儀をひとつ。ほんと、キザなんだから。

私まで、恋しちゃいそう。しないけど……

次は、図書館となりの休憩ベンチ。

相手は、D組熊坂くんと……

私たちは、気を取り直して、図書館へ向かって歩いていった。

学君によると、さっきの脇田くんは、柔道部の1年生。どおりで私が抵抗しようとしても、どうにもならなかったわけだ。

だけど、熊坂くんについては、学君も知らないみたい。

ともかく、この子が済めば、今日は終わり、晴れて、私は帰宅できる。

はやくすまそ！ って声をかけて、走り始めた。

慌てて、学君も追いかけてくる。

キャハハなんて、笑い声を上げて、追いかけて楽しむんだりして。

周りから見たら、私たち、恋人どうしに見えたりして。

それはそれで、ヤなんですけど……

図書館に到着すると、体育館でもそうしたように、そつと影からクビを伸ばして、様子を偵察。

一応、いることはいる。手前のベンチには、膝の上に本を広げて読んでいる女の子。ショートヘア。どこかで見ることがあるようなその向こうのベンチには、男の子が二人。なにか雑誌を広げて、バイトがどうか話しているみたいだから、彼らじゃないよね？ きつと。

でも、4つあるベンチのうち、誰かを待っているって感じの男の子はいないみたいだし……

もう、帰っちゃったのかな？

なんて、学君と相談して、とりあえずは、空いているベンチのひとつに座ってみる。

男の子たちの方から、あ、神宮寺つかさだ！　なんて、声が聞こえてきたけど、無視無視！

あんたたちに、気安く呼び捨てにされるいわれはないわ！
と、視界の隅に動くものが……

本を読んでいた女の子だ。

その本を小脇に抱えて、ゆっくりと私の方へ近づいてくる。そして、

「あの、神宮寺さん、およびだてしてしまっして申し訳ありません」
って、この子が熊坂さん。あの二通目の呼び出しレターの子。女の子だったなんて……

熊坂さん、私の隣に腰掛けて、話しかけてきた。

「あ、あの、わたし……D組の熊坂光つていいいます。えっと、その……入学式で、あなたのことをお見かけしたときから、ずっと心に面影が残ってしまっして……」

へっ!?

いま、この子、なんていった？　なんか、とんでもないことをいっただような……

って、おい、おーい！

なんで、そこで、ぽっと頬を染めて、うつむく！　よく考えてみなよ、私も君も女なんですけどぉ

熊坂さん、きつと目を上げて、私をひたと見つめる。なんか、すごい迫力……

私の逃げそびれた手をガシッとつかんで、身を乗り出して……

「す、好きです！　あなたが好きです！」

言っておった。言っておったで、この娘！

信じられない言葉、信じられない展開。

呆然として石化している私をよそに、次の瞬間には、頬に熱い唇の感触が……そして、熊坂さん、どっかへ走っ

っちゃった。な、な、なんだっただろう、いまの子は……
めまいがしてきた。

なんだか、後ろの方から、男の子たちが「すげー」とか騒いでいるような気がするけど……

私は茫然自失。

いつの間にか、学君、私の前に立っていて、

「つかさ？」

心配そうに私を見ている。大丈夫よという感じで、淡く微笑んで、返事の代わり。

それに対して、学君……

「ゆりデビュールおめでとう！」

さらに、力がぬけた……

学君、今日は空手部の部活に行くとかなんとか、行ってたけど、強引に捕まえて、商店街まで、強制連行！

ネクタイを思いつきり引っ張って、ほとんど引きずるようにしてまるで、セカイ系美少女が新しい部活を始めることでも思いついたかのように……

「もう、なんなの、あの子！」

ほんと、なんだっただろう？

「やんなっちゃう！ 学、カラオケいこ！ カラオケで歌いまくってやる！」

「ちよ、ちよつと、悪いけど、おれ、これから部活に……」
まだ春だというのに、汗をいっぱいかいて、何とか逃げ出そうとする学君。

「え？ なに！ アンタも思いつきり歌いたいのね？ いいわ、特別に私とデュエットしてあげるわ！」

「ひ、ひいいい……」

なんか、学君、白目をむいて失神しちゃったけど、そんなの気に

してらんない！

徹底的に、歌いまくらなくちゃ、この不快感すつきりしないよ！
今日は、歌うぞお〜！ 徹底的に歌ってやるぞお〜！

私は、気を失っている学君を引きずりながら、商店街の外れのカ
ラオケボックスへと向かった。その背を真っ赤な夕日に照らされな
がら。

名門・さく女生徒会！ 1

次の日、私はいつものように、ありさちゃんと連れ立って、桜並木の坂道を登っていった。

「ねえ、聞いた？」

「ん？ なに？」

「昨日、夕方、商店街でテロがあったんだってえ〜」
「え！？」

ビックリだ！

あつ、どおりで、昨日のカラオケからの帰り道、ヘリコプターが空を飛びまわったり、人が多く集まったりしてたわけだ。

「なんでも、どこからか高周波攻撃があつて、何百人も被害にあつたんだってえ〜」

「へえ、こんな静かで平和な街でも、そんな悪いことする人いるんだねえ。日本政府の治安対策って、どうなってるんだか……………」

「ほんと、心配だよね〜」

なんて、言い合いながら、バス停までくる。

私もありさちゃんもさりげなく身構えて、あいつが飛び出てくるのを待つんだけど……………」

ほら、きた！ ショートカットの小柄な……………」

「……………」

スカートはいたアイツが、飛び出してきた！

「つかさちゃん、おはよう！ 昨日は、お友達になってくれて、ありがとう！ これからもよろしくね？」

思わぬ攻撃に、一瞬で固まってしまった私に、ソイツは昨日のように、頬へ口付けしていった。

「ひっ、ひいひい……………！！！！」

そいつ、熊坂光は、くるっと私に背を向けると、足早に坂道をか

けて上つていく。そして、10メートルほど離れたところで、振り返り……

「つかさちゃん、また、学校でね」

バイバイってちいさく手を振って、去っていった。

「……………」

「……………」

ありさちゃんと目が合った。

「あのヘンタイ男いつから女に……………」

「ぎゃああ~~~~!!!!」

朝のホームルーム、担任が言うには、朝一に家族から連絡があり、学君は、昨日、学校の帰り道、不幸な事故にあつて、今日はお休みらしい。

なにがあつたんだろう？　ほんと心配。あの丈夫だけがとりえの学君なのに……………

けれど、学君になにがあつたのか知らないかつて、私に後で訊いてきたのは、数人の女子だけ。男子のほとんどは、なんだか、当然の報いだ！　とか　天罰じゃ！　とかなんとか、口々に言い合つてる。

あれ？　学君って、こんなに他の男の子たちから嫌われていたっけ？

それよりも問題なのは、私が校舎に入ったときから、みんなの様子が、なんだかへん。

男子も女子も、こそこそ私を指差して、ひそひそと噂話をしていく。

美少女に生まれついた私としては、学校であれこれと噂になるのには、慣れているけど。でも、今日のはいつもと違う。

いつもは、私をうっとりとして見て、いいなあ〜とか、かわいいなあ〜とか、口々に言い合っているのに、今日は、ええ〜！　だとか、うっそ〜！　だとか、驚きの表情で、私を見つめる。

ち、ちよつと、なんなのよ！ もう！ 私に、言いたいことがあるのなら、はつきりいいなさいよ！

でも、噂話をしている同級生たちに視線を向けると、気まずげな表情で、慌てて視線を避けようとするし……

そんな何がなんだか分からない、居心地の悪い私に、みんなの噂の内容を教えてくれたのは、やっぱりありさちゃんだった。

ほんと、頼りがいのあるいい子。清貴さんのこと以外なら、すごく大好き！

でも、ありさちゃんの第一声は……

「つかさ、あんた、レズなんだつてえ？」

「はあく！？」

一時間目が終わって、短い休憩時間。ざわつき始めた教室が一斉にしずかになった。

おい、おい！

そんなことを教室の真ん中で明るく大声で言うか普通……なんでも、昨日と今朝、私が熊坂さんに襲われている現場を目撃していた人たちがいて、その噂が学校中に流れたらしい。

そういえば、昨日、バイトを探していた男どもがふたりいたよう……

今朝も、登校途中で、何人が近くにいたし……
な、な、なんてこつたい！

午前中の授業、同級生たちはもちろん、先生たちまでも、いつもと違う。

私が見ていないところで、こそそと私を観察しているくせに、その視線に気づいて、そちらを向くと、みんな慌てて視線をそらす。そして、私がまた前を向くと、みんな隠れて私を見てるし……
なんか、うつつうしい！

気の小さい男の子たちが、そういう風にして、私を眺め満足しているのなら、いつものことだし、慣れっこだから、別に気にもしな

いんだけど。教室中の男子はもちろん、女子たちまで、同じようにされると、気が散って気が散って、授業の内容が全然頭に入っていないよ！

それに、あなたたちだって、そんなに私の方ばかり気にしてたら、勉強にならないでしょうに……

もう、ほんと、うっとうしいんだから！

でも、そんな風に授業に身が入らず、上の空なのは、私たち生徒ばかりでもなくて、先生たちも、やっぱりそう。なにか言いたそうに、私を見ているくせに、私と目が合った途端、狼狽して、教卓からチョークを落としちゃったり、黒板消しを取り損ねたり……
一体、なんだっていうのかしら？

私に関して、事実無根のヘンな噂が流れているからって、それが、あなたたちに何のかわりがあるっていうのだろうか？

すごく、ヘン！

うざい！　うざい！　うざい！

名門・さく女生徒会！ 2

で、四時間目も終わり、いつもの名もなき女子4人組と集まってお弁当を広げた。

ありさちゃんは、剣道部の用事があるとかで、ひとりお弁当をもつて部室の方へ。

そういえば、委員長も今日はどこかへいつてるみたいだし。

今日は、いつもよりみんな口数が少ない。それに、名も無き女子軍団、私をチラチラ盗み見してる……

気づかれてないつもりなのかなあ？

完全にバレバレなんですけど？

いつもよりも陰気な雰囲気の中、お弁当を食べ終え、水筒のお茶をすすっているときに、それは起きた。

突然、中川君、席を立つて、隣へやってきた。

「神宮寺、ちよつといいか？」

「え？」

いつものエンジェルスマイル。

「あのさ？ あの噂、本当か？」

一気に、教室の同級生の耳がダンボになる。

「……噂？」

すつとぼけても、意味ないんだけどね。とりあえず、間をとって、ちよつと考えるポーズ。

その間に、中川君の様子を観察。でも、なんかすごく真剣そう。これは、もしかして？

あ、でも、いくらなんでも、みんなの見てる、みんなが聞き耳立ててる教室の中で、告白だなんてねえ？

「ほら、神宮寺が女と、その……できてるっていつか……」

私は、かわいく頬を膨らませて、抗議の表情。自分でいうのもな

んだけど、かなりわざとらしい。ぶりっ子仮面。ちょっと私的にはキモイかも。

「もう、中川君まで、そんなこと、いうの！ 私、私……」

「ああ、ごめん。で、でも、本当に、神宮寺的には、そんな趣味ないんだね？」

うんとひとつ肯いて、もちろんとつぶやく。すこし、目の端をウルウルさせてあげると、この場合、中川君は満足してくれるのかな？ そんな私の様子に何を思ったのか、中川君。

「じ、じゃ、神宮寺、よかつたら、俺と付き合わないか？」

「えー！？」

きやあぁ〜とか、うおおお〜とか、周りの外野陣が『中川が神宮寺に告白した』って騒ぎだしたし……

「神宮寺は、女には、興味ないんだろう？ 男と一緒に方がいいんだろ？ だつたら、俺と付き合えよ」

「え、で、でも……」

「な、俺と付き合えば、大事にしてやるよ。絶対、幸せにしてやるからさ」

「え、えつと、えつと……」

「それに、もう、だれにも、お前のこと、ユリとか、レズとか、言わせたりしねえよ。絶対に！」

「……」

「な、いいだろ？」

そういいながら、中川君、私のあごを持ち上げた。そして、しゃがみこみ……

周りの女の子たちは、口元を両手で隠し、私たちのことをビツクリして、見ているし、男の子たちは、ヒュ〜〜〜って、口笛吹いて、はやし立てている。

そんな中、私の右手、無意識に動いた。

パシィィィ〜ン！

平手が見事に中川君の頬に決まった。

「やめて！ おねがい、こんなことしないで！」

でも、中川君、私の瞳を覗き込んだまま、頬を打った私の右手をつかんで、自由をさらに奪う。

「好きなんだよ！ おれ、お前にほれてんだよ！」

好きだから、恋してるからって、いやがる相手に無理やり何してもいいなんて理屈はない！

こんなの絶対イヤ！

私、精一杯抵抗した。

「イヤ！ こないで！ 触らないで！」

助けて、清貴さん！ 助けて、学君、ありさちゃん！

でも、3人ともその場にはいない……

まだ高校一年生とはいえ、男は男。私は女。どんなに抵抗しても、抗えない。押しのけられない。

絶望的な気分。

なんで、なんで、こんなヤツに、こんなひどいことされなきゃいけないの？ なんで、なんで？

小4のときのことが鮮明に思い出された。あの子も、こうやって、私の唇を奪おうとした。

あの子も、目の前の中川君も、同じ男。私、絶対イヤ！ こんな

こと、絶対にイヤ！

「イヤ、助けて！」

私の目に涙が浮かぶ。必死に身をよじって、助けを求めろ。

あと、1センチ。中川君の荒い息が、私の顔にも感じられる。

イヤ、こんな嫌な場面、目に入れたくないって思いつき強く目を閉じた途端、急に中川君の息が、顔から離れていくのに気がついた。それに、私の右手もいつの間にか自由になっている。

ガシャンッ！！

え？

何か大きな音が聞こえてきた。

慌てて、まぶたを開いてみると、中川君、頬を押さえ、うずくま
っている。そして、その中川君と私の間に、男の子の大きな背中が
.....

学君。学君、来てくれたのね。私がピンチのときに、やっぱり助
けに来てくれたのね。あのときの約束通りに！

中川君、顔を上げた。目をぎらつかせながら、間に立っている男
の子を見上げた。殴られた頬を押さえながら、復讐に燃える目で・
.....

そして、私もその背中を見上げる。

「中川、いいかげんにしろ！」

学君じゃなかった。その大きな背中には佐野君だった。

佐野君に一喝され、中川君はようやく自分を取り戻したみたい。
だまって、自分の席へもどっていった。でも、自分の指をポキポ
キ鳴らしながら、ずっと佐野君をにらみつけてる。注意深く、私の
方を見ないようにしているけど。

佐野君、そんな中川君を無視して、振り返って私にやさしく声を
掛けてくれた。でも、気のせいかしら、なんだか皮肉な調子がちよ
つぱり混じっている気がするんだけど？

「大丈夫？ 神宮寺さん？」

私、黙って、うなずくことしかできなかった。だって、ようやく、
さっきの恐怖がこみ上げてきて、体がガタガタ震えだしたんだもの。
「しばらく、保健室で、休んでいた方がいいんじゃない？」

う、うん。

「今日は神宮寺さん、あの噂のせいで、結構参ってたみたいだし、
午後の授業は休んで、保健室のベッドでゆっくり寝てな」

あ、ありがと.....

口の中だけで、小さくお礼をいった。たぶん、口がもごもごと動
いたのは、佐野君にも見えただろうけど、私が口の中で言ったこと
は聞こえなかったとおもっ。

クラスの保健委員の女の子に、震えている私を引き渡して、佐野君、自分の席へまっすぐ戻っていった。
私の方を、もう振り返ったりせずに……………

名門・さく女生徒会！ 3

結局、午後のホームルームが終わるまで、保健室で寝ていた。ホント、今日はヘンな一日だった。

朝から、ヘンな女の子に付きまとわれ、ヘンな噂を学校中にながされ、頭に血が上がったヘンな男の子に襲われて……………保健室のベッドの中で、思い出しちゃった。

私を力づくで押し倒した6年生の男の子。
小学校時代に、私をいじめた男の子たち、女の子たち……………
ドブ川に浮かぶ、私の服。上履きの中に入っていたかみそりで、血だらけになった私の足。座ろうとする寸前に気がついて、事なきを得た画鋏の針の鋭さ。

ヤな思い出がばかりが、私の脳裏を駆け回る。
闇の中で、もがいていただけの小学校生活……………
いつしか、私、声を上げずに泣いていた。
だれも、私に気づかない。本当の、本当の私に……………

午後のホームルーム終了のチャイムが鳴り響き、しばらくして、ありさちゃんが保健室にのぞきに来てくれた。

「つかさ、元気？ 大丈夫？」

「うん……………」

「ごめんね。肝心なときに、一緒にいてあげられなくて」

「ううん。いいの。大丈夫」

「私って、ダメね」

ペコツと自分の頭を叩く。って、ペコツどころか、バコツ！と思わず引いちゃうほど、大きな音立っただんですけど……………

頭大丈夫？

「ったあ〜〜！」

ありさちゃん、頭抱えてしゃがみこんじゃった。自分の頭ぐらい

大事にしようねえ」

でも、そんなありさちゃんの様子、なんだかおかしくて、おかしくて……

くふふ

笑い出したのは二人同時だった。ほんと、女友達つてすごくいい。これからもありさちゃんとの友情、大切にしたい。でも、清貴さんは私のものだけど……

しばらく、私たち、たわいもないことをおしゃべりしあっていた。昨日のドラマがどうだとか、剣道部の先輩たちの噂だとか、中学での友達がどこの学校へ進学しただとか……

大して、意味はない話だけど、ありさちゃんとかうして、あれこれおしゃべりしあつて、笑いあつていると、ヤなこと忘れて、すごく楽しい。

今日一番の楽しい時間が、ゆっくりと流れていった。

トントン

しばらくして、保健室のドアが控えめにノックされた。

そして、ドアが開き……

「神宮寺さん、具合どう？」

ドアの隙間から顔をのぞかせたのは、学級委員長。

委員長、私が横になっているベッドの脇に、ありさちゃんがいるのを見つけて、一瞬顔を引きつらせた。しばしうつむいて、唇を噛んでいる。

うんうん、委員長、アンタの気持ちわかるよお」

やがて、今見せた動揺をむりやり押さえ込み、いつもの冷静沈着な表情で顔を上げた。

メガネが夕日を反射して、きらりと光った。

「だいぶ、よくなったみたいね。廊下まで、たのしそうな笑い声聞こえていたわよ」

「うん、おかげさまで」

「というか、私より、委員長の方が、病気になってそうに見えるんだけど……」

顔が蒼白だし、やけに緊張しているみたいだし。かたくなに、ありさちゃんの方を見ないようにしている。

ベッドの横に立った委員長、そう、なら安心ねとかなんとか、つぶやいて、入り口の方を振り返った。

「ひかりん、はいつてらっしやい」

「どうやら、委員長には連れがいて、外の廊下で待機していたみたい。」

委員長の声に呼ばれて、ドアから入ってきたのは……ぶっ！

「つかさちゃん、大丈夫？ ごめんなさい！ 私のせいでヘンな噂広まつちやっみたいで……」

く、熊坂光……！？

な、なんでアンタがここに？

「ほら、ひかりん、ちゃんところち来て、神宮寺さんに謝りなさい。迷惑かけたんだから」

熊坂さん、ひどくしよんぼりした様子で、委員長の隣にくる。

あつ！ そうか！ 最初に会ったとき、どこかで見た覚えがあると思ったら、委員長がいつもお昼を一緒に食べていた女の子だ。いつもお昼時に見かけていたんだ。

熊坂さん、目をウルウルさせ、

「つかさちゃん、本当に、ごめんなさい！」

ショートの髪を振り乱し、勢いよく頭を下げる。

え〜と、この場合は、どうすればいいんだろう？

確かに、この娘のせいで、私、すごく迷惑な噂を流される羽目になったし、今日一日いやな思いもさせられた。

じゃ、だからといって、冷静に考えて、実際、声を荒げて、『あなたのせいで、今日は散々な一日だったのよ！』なんて、なじるほ

どこのことがあったのかっていうと……
うっん……

特に、直接の実害といえるようなこともなかったような……

ともかく、目の前に、こうして反省して、頭を下げているのだし、これ以上、とやかかきうまでもないわよね？

私、何かを飲み込むようにして、ひとつ大きくうなずいた。

「いいわ、熊坂さん。そんなに、謝らなくてもいいのよ。私、大丈夫だから」

うん、優等生的な回答。これで、好感度アップ間違いない。でも、あれ？ だれに愛想を振りまいてんだ、私って？

とたん、熊坂さん、顔を上げて、くしゃくしゃに表情を崩した。

そして、私に抱きついてきて、

「ありがとう、つかさちゃん。許してくれて。ほんとうに、ほんとうに、感謝するね。つかさちゃん大好き！ ありがとう！」

またまた、この娘、私の頬に唇を押し付け来てくれるし……

ちよつと、アンタ、調子に乗るんじゃないわよ！

つたく！

でも、まあ、今回は、今までの2回ほどには、イヤって感じじゃなかったな。きつと、なんとなく来るのが予想できたからかな？

はっ！

ってことは、このまま、私、キス魔・熊坂光の攻撃に慣らされて、いつかこのキスに喜びを感じるようになってしまふのでは……

・？

うっ！

そんなの絶対イヤだ！

私の内面の危機感をよそに、熊坂さん、瞳が妖しく光っているんですけど……

「うっぶ」

もしもーし、うぶって、アンタ。

「つかさちゃん、ほっぺって、やわらかくて、気持ちいい〜
せになっちゃうそう」

な、なるなそんなもの！

名門・さく女生徒会！ 4

「ひかりん、よかったね。神宮寺さんに許してもらって」
「うん」

最高の笑顔って、こういう顔をいうんだろうな。なんて、感想がそこはかたなく浮かんできそう……。などと、熊坂さんの顔をぼーっと眺めていると。

「そうそう、神宮寺さん、もう動いても大丈夫なら、ちょっとこれから付き合ってくれない？」

学級委員長が、委員長の顔をして、いう。言っていることは、要請なんだけど、その顔をして言われると、なんだか命令されてるみたいで、断れないじゃない。

「い、いいけど……。どこへ？」

「お姉ちゃんにあってほしいの」
これは熊坂さん。

「そ、これから生徒会室へ一緒に来てもらえる？」

お姉ちゃん？ 生徒会室？ ん？ んん？

私の頭の中のクエスチョンマークが顔に出ていたのが、委員長が説明してくれた。

「ひかりんのお姉さま、瞳さんが今年、生徒会長を勤めてらして、今日これから神宮寺さんに会いたいわっておっしゃられているの。会ってもらえる？」

へえ〜 ビックリ！ こんな娘にお姉さんがいて、しかも、生徒会長に選ばれるぐらい人望がある人だなんて……………

あつ、でも、熊坂さんのお姉さんってことは……………？

「ふふ、もちろん、ひかりんと違って、ノーマルな、感じのいい人よ」

委員長、私の先回りをしていう。って、じゃ、妹のこの娘はノーマルでないってことかよ。委員長、それは認めてるんだねえ。

ともかく、そういうことなら、別に構わない。私、コクンとうなずいた。

「じゃ、みんなで、一旦教室にもどって、荷物をとってきましょう」

私たち4人は、ゾロゾロと教室にもどり、カバンを提げて、生徒会室へ向かった。旧館2階、一番奥の部屋。

途中、ありさちゃん、私の袖をひっぱり小声で話しかける。

「ねえ、つかさ？ 学級委員長、なんか私のこと嫌ってる？」

ありさちゃんも気がついてみたい。

「う、うん。たぶん」

「どうしてだろう？ 私、委員長に嫌われるようなこと、なにかしたかしら？」

「うーん、たぶんしてないと思うけど………っていうか、ありさちゃんがどうこうじゃなくて、島崎君のせいだよ、きつと」

「島崎？ ん、ん？ なんで？」

「昨日、ありさちゃん、デート断ったでしょ。あのとき、途中まで委員長も近くにいたんだあ」

ありさちゃん、しばらく、クビをひねっていたけど、やがて、ポーンとひとつ手を打った。

「そ、そうかあ、そうだったんだあ」

ようやく、ありさちゃんも納得したようだった。

「早苗ちゃんってわけかあ」

ん？ ……早苗って、だれ？

「ねえ？ そういえば、ありさちゃん、今日は部活行かなくて大丈夫？」

「うん、今日は大丈夫、さっき保健室へ行く前に、剣道部の子に遅れるって、伝言頼んでおいたから」

「そう、ならいいけど」

やがて、私たちは、生徒会室の前までやってきた。

「つかさちゃん。ここ、はやくおいでえ」

熊坂さん、両手をブンブン振り回して、私を呼ぶし……
「あ、はいはい。ありがとうさん、はい」
「うん」

遅れて、私とありさちゃんはその部屋の前までやってきた。

旧館のどこにでもある普通のドア。

委員長は、全員がそろっているのを、今一度確認すると、ドアをノックした。

とたんに、ドアが開き、中から、女生徒が一人出てきた。そして、その後から、もう一人、さらに、もう一人、また、もう一人、まだまだ、もう一人……

ドアから、次から次へと、女生徒が廊下に飛び出し、私たちの横へ、後ろへ、前へ整列していく。

って、それって、私たちを取り囲むってことじゃ！

そう気づいた頃には、もう囲みは完成していた。すでに、私たちの逃げ場はどこにもなかった。

最後に、ドアからゆっくりと登場してきたのが……

「お姉ちゃん、つかさちゃん、連れてきたよ」

隣のマイペース娘が、周囲の状況をちつとも気にせず、最後に現れた髪の長い胸の大きな上級生に、そう声をかけたのだった。

しかし、この女生徒集団、ちよっとヘン！

全員、薄い桜色の上着に、モスグリーンのスカート……
今は亡きさくらヶ丘女子の制服姿。私の憧れていたかわいい制服たち……

熊坂さんの姉・熊坂瞳さんは、私たちを見回し、私を見て、ほうつと感歎の声を上げ、それから、私を守るようにして、身構えているありさちゃんに、にこつと笑いかけた。

芝居がかった仕事で、ポケットから、一枚の写真を取り出し、ありさちゃんに渡す。

「あなたが、斉藤さんね？ この写真見てちょうだい」

ありさちゃんの背後からクビを伸ばしてみると、何の変哲も

無い海辺のアベックの写真。

浜辺で男性と女性がカメラに向かって、並んで両手でVサインをしている。

「ほら、その写真の女性の右肩の方、手が見えるでしょう？」

確かに、女性の肩を抱くようにして、男性の右手が……

「さあ、問題です！ その写真、全部で手は何本あるでしょうか？
思わず、目で手の数を数えてしまった。

「5本……」

「正解！ では、人間の数は？」

「……」

その途端、ありさちゃん、顔の色が真っ青になり、貧血を起こしたかのように、その場にしゃがみこんだ……

「幽霊なんていない、お化けなんて存在しない！ 幽霊なんていない、お化けなんて存在しない！ 幽霊なんていない、お化けなんて存在しない！」

そうブツブツ唱え、ありさちゃん、両耳を押さえ、膝を抱えて、ガタガタ震えながら、おびえてる。

あ、ありさちゃん……

な、なんで、ありさちゃんの唯一（つて、まだあったような気もするけど……）の弱点がこの人たちに知られているの？

と、視界の端で、誰かが手を振っている……

えっ、えっ、えっ、大崎先輩！？

私たちより、ひとつ年上で、同じ中学に通っていた大崎先輩。しかし、中学のときの部活もありさちゃんと同じだったはず……

大崎先輩、ごめんねって感じで、私に両手を合わせた。ど、どおりで……

でも、こんな手でありさちゃんを戦闘不能にして、どうするつもりなんだろっ？

私、正面に向き直った。

熊坂さん（姉）、ありさちゃんのおびえている様子を、ふつと鼻で笑い。私の方を見た。

なんか、感じワル……

私に、ついてらっしゃいと合図して、部屋の中へ。

やれやれ、こういう状況では、ついていけないといけなさそう。

逃げ出そうにも、まわりをぐるりと取り囲まれているし……

これから、部屋の中で、私に、私たちに、何があるのかしら。

強い不安感を覚えながら、部屋の中へ足を踏み入れた。

名門・さく女生徒会！ 6

部屋の中には、長机が何台か設置さされていて、職員室で見かけるような、キャスター付の椅子がいくつも並んでいる。

熊坂さん（姉）、黒板の前の椅子に座り込んで、私に隣の席に着くように合図した。

「あなたが神宮寺つかささんね？」

「はい……………」

「噂は光から、いろいろ聞いているわ。うん、たしかに、美人ね」

「それはどうも……………」

「でも、胸は……………」

ちよつとそこで、なんで胸の大きさをなんて話が出てくるのよ！

その関係ない上級生、ふふふつて、ヘンな忍び笑いしない！

少なくとも、あなたなんかより、大きいんだから！

「そんなことは、まあいいわ」

つて、自分から話題ふつといて、『そんなこと』つてどんなこと

だよ！

「神宮寺さん、あなたは、3月の入試のとき、さく女に合格したんですってね？」

「え、ええ……………」

「ふふ、優秀ね」

「それはどうも……………」

「それはそうと、なぜ、さく女に入りたかったのかしら？ よかつ

たら、理由を聞かせてもらえるかしら？」

え、えーと…………… 彼女は、何を言いたいんだろう？ な

んだか、いまいち話が読めない……………

ともかく、正直にここは答えた方がいいのかな？

「えっと、あの、その…………… さく女の制服がかわいいなつて…………… ぞ、それと、男子がいない学校の方が、その、私的

には、いいかになっていうか……」

私の答えをきいて、熊坂さん（姉）笑い出した。

「あはははは！」

目の端に涙まで浮かべて…… なにも、そんなに笑わなくても……

よくみると、周りの女生徒たちも、くくくと笑っているようだ。

「えっ、なに！？ なんなんですか？」

笑っていないのは、私一人だった。ん？ でもないか、部屋の隅で、『本当にあった怖い話』なんて本を抱えた大崎先輩に、耳元で読み聞かせされているありさちゃんも笑ってなんかいなかったし……

「幽霊なんていない、お化けなんて存在しない！ 幽霊なんていない、お化けなんて存在しない！ 幽霊なんていない、お化けなんて存在しない！」

「いいわ、分かった。じゃ、今日から、あなた、私たちに協力しなさい！」

ようやく笑いをおさめた熊坂さん（姉）、ビシツと私を指差す。

「きよ、協力……？」

「そ、私たち、旧さくらヶ丘女子生徒会に協力して、さく女の伝統を守るのよ！」

「……え！？」

その一言で、気がついた。いまさらながら……

この高校、神宮寺高校はこの春さくらヶ丘女子高校を吸収合併した学校。生徒会っていったって元々あった神宮寺高校の生徒会が、旧さくらヶ丘の生徒たちも仕切るのが筋だし、こちらに生徒会も、生徒会のための生徒会室もあるはずないんだった。

じゃ、じゃあ、この人たち、生徒会って名乗っているけど、非公認の組織？

私の疑問に答えをくれる人はだれもおらず、熊坂さん（姉）は力

を込めて言いつのる。

「いい、さくらヶ丘女子は、今年で創立117年の歴史をほこる県下でも一番の伝統校なのよ！ しかも、偏差値で65以上ないと入学できないような進学校。つまり、我々のさく女は名門校なの」

うん、確かにそう。中3のときに、もらった資料だと、県下でもトップクラスの進学実績をもち、卒業生の中に、何人も全国的に有名な女性文化人がいた。

おかげで、中3の一年間、来る日も来る日もありさちゃんと一緒に猛勉強したっけ。

「なのに、なんで、神宮寺なのよ！ よりによって、あのおバカ神宮寺と合併なわけ？」

神宮寺高校、入試の資料では、偏差値が40にも届かない学校・
・
・

課外活動では、いくつか見るべきものがあるけど、こと進学実績で言うと、悲惨としかいいようがない。って、卒業生の半分は就職して、残り半分は専門学校へ通うってだけなんだけど。開校して以来23年、その間に、大学に進学したのは、課外活動が認められて推薦で入学した者だけなんだとか。

「今まで、さく女に通ってるってだけでも、周りから尊敬の目で見られていたのに……それが、神宮寺だなんて、だれにも言えないし、恥ずかしくて外も歩けないわ！」

なんか、ひどい言われよう。同じ名前をもつものとして、ちょっと複雑な気分。

「それに、それに、なんで、私が、アイツの下なのよ！」

熊坂さん（姉）、心底いやそうに吐き捨てた。

えっ、アイツ？ アイツって？

タンツと大きな音を立てて、熊坂さん（姉）私に迫ってくる。

「あなたも、そうでしょ？ いまさら、神宮寺だなんて、絶対にイヤでしょ？ さく女に入学するために一生懸命勉強したのに、あんなバカ学校のやつらと一緒にされるなんて、最悪でしょ？」

「・・・・・・・・え、え・・・・・・・・」

熊坂さん（姉）の迫力に押されてしまって、思わず同意してしま
った。

「でしょ。でしょ。だから、私たち、旧さくらヶ丘女子生徒会、決
意したの。さくらヶ丘の伝統を守るって。たとえ、さくらヶ丘女子
高校の名前が消えたとしても、神宮寺のやつらになんかにいいよう
にはさせない！ って」

周りのさく女制服の女生徒たち、パチパチと手を叩いて、賛同の
しるしにさかんにうなずいているし・・・・・・・・

「だから、神宮寺つかささん。あなたも私たちに、協力しなさい！
いいわね？」

完全に、命令口調・・・・・・・・ うむは言わせないって感じ。

え、えーと・・・・・・・・

私がすぐにならずかなかったのをどう見たのか、ビシツと、部屋
の隅のありさちゃんを指差す。

「さもないと、あの子、斉藤さん、どうなってもしらないわよ！」

思わず、指差された方をみると、ありさちゃん、もうそろそろ限
界みたい。

怖い話をたつぷりと聞かされ、今にも失神しそうな、真っ青な血
の気のない表情で、うつろな目をして、幽霊はいない。お化けなん
て存在しないって呪文を・・・・・・・・あれ？

「幽霊はある。お化けだって存在する・・・・・・・・」

これは、相当やばいかも・・・・・・・・

一瞬、私、考えてしまった。このまま、ありさちゃんが廃人同然
になってしまえば、清貴さんをめぐるライバルが、一人いなくなる
ってことに・・・・・・・・

ありさちゃんが、脱落すれば、私と清貴さんとの間に、何の障害
も・・・・・・・・って、まだまだあるんだけど・・・・・・・・

でも、すごく魅力的な考え。

「それに、私たちの力、甘く見ない方がいいわよ。こちらのキャン

パスはもちろん、来年から、あなたが通う麓の神宮寺の方にも、私たちの同士がたくさんいるのだから」

周りの女子たちも、それを肯定するかのようになり、うなずいている。「私たちに逆らったら、どうなるか……」

熊坂さん（姉）、ニヤツと悪代官よろしく笑ってくれるし……

・

脳裏に、ドブ川に浮かぶ私の服の画像が、血だらけになった私の足が、光を受けてきらりとひかる画鋏の針が……ブルルと震えた。おびえが目に浮かんだと思う。

「わかってくれたみたいね。なら、これにサインしなさい」

熊坂さん（姉）が机の上に取り出したのは、入部届けだった。

よく確かめもせず、熊坂さん（姉）が指し示した箇所、1 - Aと私の名前を書き込んだ。

「OK じゃ、これから、あなたも、私たちの仲間よ。よろしくね」

とうとう、私は、旧さくらヶ丘女子生徒会に入会させられた。名門さく女の伝統を守るために、おバカ神宮寺の悪しき影響を排除するために。そして、アイツさんから、熊坂さん（姉）を守るために

(?)

でも、しかし、熊坂さん（姉）のいうアイツってだれなんだろう？

うーん……ナゾだ。

お花見しましょ？ 1

次の日、なんだか、いつもより元気がないありさちゃんと桜並木の道を学校へ。

ありさちゃん、すっかりやつれちゃって、やせこけちゃって、今にも死にそうなくらい顔色が悪い……………

いつものように、周囲の桜並木を鑑賞することもせず、とぼとぼと二人で、坂道を上る。

そして、いつものように、バス停に影、影……………

影二つ？

その二人、なんだかちよつと様子が……………

「あつ、ごめんなさい。あなたも誰かを待っていらっしやるんですか？」

「え？ あ、ごめんなさい。ぶつかっちゃいましたね。どこか痛めませんでしたか？ えっと、あれ？ 一昨日の……………」

「全然大丈夫です。ん？ どこかでお会いしましたっけ？」

「あ、そっか。オレはあの時、図書館の陰で隠れてたんだっけ……………」

「え、えっと、その……………」

「俺、A組の神宮寺学です。たしか、えーと、D組の熊坂さんだっただっけ？」

「……………」

もうひとつの影、何歩か後ずさりしたりなんかして。

そうだよねえ。隠れて見てたなんて告白されたり、見ず知らずなのに、いきなり自分の名前を呼ばれたりだもの。だれかさんみたいな女でもかなり気味悪いのに、男がそんなことを言ってくるなんて。うんうん、熊坂さん、あなたの気持ち分かるわよ。

「ほら、そこ！ なに、朝からやつてるのよ？」

学君も、熊坂さんもハツと私たちの方を振り返り、私の背後を見

てのけぞった。

「ありさ、ど、どうした？」

「斉藤さん、大丈夫？」

ありさちゃん、そんな二人にも気がない様子で、口の中でもごもごと『おはよう』ってつぶやいて、バス停を通り過ぎる。

ホント、昨日の恐怖の話、よっぽど強烈だったんだねえ。

はあくともかく、今日は、ありさちゃんと一緒にいて、元気付けてあげなくちゃ。それに、昨日、一瞬でも、いつも助けてくれるありさちゃんを、本気で見捨てようかと考えてしまったの、申し訳ない気がするし……

慌てて、ありさちゃんを追いかけようとした私を、引き止めた二つの手。

「おい！ つかさ、ありさのやつ、どうした？ なにかあったのか？ もしかして、ついに清貴さんに振られたか？」

「つかさちゃん、なんかコイツ、ヘンだよ！ もしかして、ストーカー？」

学君、妙に期待を込めて私を見つめてくれるし、私の背後に隠れながら、熊坂さんそれ以上近づくななどでもいうように、その学君をにらんでる。

「残念ね。まだ振られてないみたいよ」

そして、学君を指差して。

「こいつ、神宮寺学君、私のいとこ。ストーキングしてるけど、狙いはあなたじゃないから安心して」

「そっか……でも、なんで、あいつあんなつまってんだ？」

「え、ええ！ こいつやつぱりストーカー！！ 気持ちワルー！」

って、アンタも立派に私をストーキングしてんじゃない！

学君が気持悪いのなら、アンタはなんなんだっ！

ともかく、いいたいことはたくさんあるけど、ぐっと飲み込んで

……

「昨日ね。生徒会室に呼ばれてね……」

学君に、昨日の放課後にあったことを洗いざらい話してあげた。

「ひでえなあ〜 お前の姉ちゃんって、すんげえ、感じ悪い女だな」
さつきから、ストーリーカー、ストーリーカーって何度も言われてたの、
少しは傷ついてたのね。学君。

「な、なによ！ アンタなんか、お姉ちゃんの何が分かるっていうのよ！」

「何がさく女の伝統だよ、つたく！ ただのエリート主義で、傲慢なだけじゃねえか！」

「ふん。おバカ神宮寺がなに言ってるの！ 脳みその腐ったアンタなんかには、分からないでしょうけど、さく女の方が、はるかに頭いいんだから！」

「はあ？ なにいつてんだ、バカかおまえは。神宮寺だろうが、さくらヶ丘だろうが、別にどうだっていいことだろうが？ 結局、同じように勉強して、同じように三年間すごすだけなんだしょ！ 入ったときの成績がどうこうじゃなくて、卒業したあとが重要なんじゃないのか？」

「ふん、アンタたちおバカが私たちさく女と対等な人間なわけないでしょ！ 百万年早いつつもの！」

「なんだと！」「なによ！」

二人がいがみ合っているのをほっといて、私はありさちゃんを追いかけていった。

まあ、学君なら、喧嘩になっても、女の子に暴力をふるったりしないだろうし、ほっといても大丈夫だろう。

お花見しましょ？ 2

いつものように、玄関で上履きにはきかえる。

昨日、そういえば、保健室で寝ているとき、熊坂さんがあやまつてくれて、特に実害がなかったから、寛大な心持ちになって、許してあげただけど……

失敗だった。

校舎に入った途端、いきなり実害が……

玄関であった同じクラスの女生徒・時田さん、おはようって、挨拶したら、いきなりかけてきて、私の胸にラブレターを押し付けていつちゃった。

それに、下駄箱の中、いつも以上にラブレターと恋の呼び出し状が……

半分が1年生各組の男子から、残り半分、女子から。

こ、これからは、男子のラブレターに『あなたとは付き合えませんが、でも、いつまでもよいお友達でいてね』的な返事を書かないといけないだけでなく、女子の手紙にも返事を書かないといけないね……

はあ〜 つ、つかれそう。

ありさちゃんの方はというと、また、島崎君、再チャレンジするつもりで、入り口で待っていたみたいだけど、ありさちゃんの今朝の様子を見て、ビックリして声をかけられなかったみたい。そして、その島崎君を学級委員長が柱の影からじっと見ていたことに、私は気づいていた。

ほんと、いじらしいというか、なんというか……

世の男どもも、はずかしいって感情をもっとしつかりとをもって、委員長みたいに、私を柱の影から眺めるだけにしてくれるといいのに……

勇気なんて、振り絞らなくてもいいのにね。

で、今日の一日の授業は、まったりと流れて、放課後。

今日は役に立ちそうにないありさちゃんを早々にあきらめて、用心棒役に学君を連れて、キャンパス中のあちこちへ駆け回り、『あなたの気持ちはうれしいけど、ごめんなさい。付き合えません』って言って回って、教室へ。

結構、時間がかかった。なにしろ、いつもの2倍だし……教室にもどると、学級委員長と熊坂さんが待っていた。

「あ、つかさちゃん、どこいったの？」

熊坂さん、私に手をふって、駆け寄ってきた。そして、ジャンプ。クビにかじりつくようにして、抱きつこうとしてきたんだけど……

さっと、私を後ろにかばい、身を挺して、熊坂さんを止めたのは、学君。

「ちょ、ちょ、ちょっと、なにをするのよ！　なんで、アンタがここにいるのよ！　なんで、私の邪魔をするのよ！」

「フン！　つかさにヘンなことすんじゃねえ！　つかさが迷惑がつているだろうが！」

「だれも、ヘンなことなんかしてないでしょうが！　私とつかさちゃんの愛のスキンシップの邪魔しないでくれる。このストーカー野郎！」

あ、愛のスキンシップって……

「はいはい、愛があるなんて思ってるのは、お前だけだろう？　つかさは迷惑してんだよ！　自分の教室へもどりな！」

学君、乱暴に熊坂さんの体の向きを変え、つよく肩を押す。押された勢いで、熊坂さん、廊下にはじきだされた。

「きゃっ！」なんて、悲鳴を上げて。

四、五歩たたらをふみ、何とか踏みとどまって、憤然ともどつてくる。

「ちょっと、なんなのよ！　アンタ、何様のつもり！　たかが、お

バカ神宮寺のくせに！」

その目と鼻の先で、ドアをぴしゃりと閉じて見せるし……
ドスン！

なんか、いまドアに思いっきりぶつかった音が聞こえたんですけど……

思わず、学級委員長と一緒に目をぎゅっとつむって、体を縮めた。
い、いたそう〜

おそろおそろまぶたを開いた私たち、目が合って、思わず、苦笑
がこぼれた。

「ね、神宮寺さん、そろそろいきましょうか？」

「うん」

学君にバイバイって手をふって、カバンをさげ、後ろのドアから
廊下へ。

前のドアでは、相変わらず、学君と熊坂さんの騒々しい争いが行
われていた。

旧館二階一番奥の部屋。

『さくらヶ丘歴史伝統研究会』

私が昨日強制的に入部させられたのは、そういう名前の部活だっ
た。

本当は、旧さくらヶ丘女子高等学校生徒会なんだけど、さすがに、
それでは神宮寺高校当局に認可されるわけもなく。やむなく、『さ
くらヶ丘歴史伝統研究会』なんてものを名乗っているらしい。

もちろん、熊坂会長としては、いつか近いうちに、生徒会に名称
をもどすつもりみただけど……

公式には、神宮寺高校生徒会なるものが麓の二・三年生キャンパ
スにあり、生徒たちを取り仕切っている。

だけど、さくらヶ丘出身の方が頭がよいのは動かし難い事実。

そのせいか、ほとんどのクラスでは、さくらヶ丘出身の女生徒たち
が学級委員長をつとめ、神宮寺出身の男子生徒が副委員長を勤めて

いる。そして、それらさくらヶ丘系の学級委員長たちは、大抵、去年も学級委員長なり副委員長なりをやっていたし、さくらヶ丘女子の生徒会に属していた。

だから、神宮寺高校生徒会といっても、半数はさくらヶ丘出身の女生徒でしめられていた。

もちろん、それ以外の残り半分、現生徒会長を含め、神宮寺高校出身。熊坂会長はそれが気に入らないみたい。

自身は、副会長を務めているんだけどね。

ほんと、なにが不満なんだろう？

副会長も会長も大した差がないような気がするのだけど。いや、むしろ、会長は生徒会の顔で、あれこれと派手で目立つ役職だけど、特にだれがなっても、大過なくこなせるような気がするな。それより、副会長は会長を支え、実務面を一手に取り仕切り、生徒会を支障なく動くためには、なくてはならない職種。はつきり言って、副会長の方が能力の必要な重要なポストのような気がするのだけどなあ。

でも、熊坂会長は、生徒会長の方がいいみたいで……

去年は、さくらヶ丘女子の副生徒会長として、立派に会長をもち立て、すばらしい指導力を発揮していたらしいのに。

うーん……よくわかんない。

お花見しましょ？ 3

私たちが部室（旧生徒会室）に入ると、部屋の中は、もうすでに女生徒たちでいっぱいだった。

部屋の前方、黒板を背に、熊坂会長がなにやら演説をぶっている。「……………であるから、今年も、さく女の諸先輩方をお招きする観桜会、しっかりと我々、さく女生徒会が取り仕切り成功させましよう。みんな、しっかりと自分の持ち場をまもり、粗相のないように、がんばりましようね！」

部屋中が拍手で埋まった。

がんばりましようね。今年も、がんばろう。などと周りの上級生たちは口々に言い合ってもいる。

「ん？ なにかするのかなあ？ イベントかなにか？」

「うん。今度の週末、さく女のOGたちや近所の人、生徒の家族なんかを招いて、裏山で、伝統の観桜会、つまりお花見ね、するの」

「へえ〜 お花見かあ〜」

「そ、今日はそのお花見のためのミーティングをこれからするのよ」
入部したばかりで、何も分かっていない私に、委員長があれこれと、説明してくれる。

「お、神宮寺、来たな。あんたには、当日受付を勤めてもらうから、そのつもりでな」

早速、私を見つけた熊坂会長、相変わらずのうむをいわせない命令口調。

私の週末の予定なんて、関係ないみたい。って、予定なんてなんにもないけど。私が当日参加するのは当然だと思っているのかな……

熊坂会長、急に目を細め、針のような視線を私に。

「それより、神宮寺、今日は遅かったな？ 初日から遅刻なんてするなよ。それとも、先生にでもよばれて、居残り勉強か？」

「い、いえ」

ちよつと、だれが居残りなのよ！ 私、そんなに頭悪くない。つていうか、クラスで委員長の下ぐらいに入学試験の成績がよかったはずなのよ！

「ちよつと、友達に呼び出されて」

「ほお。友達ね。そのわりに、男を連れて、あっちへいたり、こっちへいたりしていたみたいだけど……」

ひょいっと親指立てて、窓の外を差す。

そういえば、さつき学君と何度かこの窓の下を通ったっけ……
・ ちよつと頬が赤くなる。

「おさかなのはいいけど、さく女の品位を汚す行動だけはしてく
れるな！ いいな、神宮寺」

「は、はあ……」

つて、おさかんってどういう意味よ！ ったく、このいけず女が
あゝ！

私が遅刻したのって、私のせいじゃないっていうの！

そういう文句なら、私に呼び出しをかけてきた男子や女子たちに
言つてよね！

ともかく、熊坂会長に解放され、私、委員長の隣の席へ座り込ん
だ。

「ふう〜 やれやれだわ」

「怒られちゃったね」

「うん。でも、遅刻したのは私のせいじゃないんだけどなあ〜」

「そうなの？」

隣の席の人から、資料の束が渡された。一部とって、委員長へ渡
す……

ハツと、その隣の人を確認しなおした。大崎先輩だった。

「神宮寺、さつき一緒に歩いてた男子だれ？ 彼氏？」

「え、いや、その……」

「すぐく仲良さそうに、話しながら、下通つていったからさ」

「学君は、彼氏とかそういうのじゃなくて」

「へえ〜 マナブっていうんだ。繊細で優しい格好イイ男子じゃん」
男にしておくのがもったいない格好イイ男子じゃん」

「なんか、目がハートになっている気がする……」

「女装させたら、かわいいだろうなあ〜」

うっん……

うっとりとあさつての方を見つめてる。もしかして、やっぱり、この人も熊坂さん（妹）と同類？　なんか、頭痛くなりそう。

「で、二人はどこまでいってんの？　告白された？　キスした？　それとも……」

私、思いつきり胸の前で手を振って、

「ち、違います！　私たちそんな関係じゃ。学君と私、いとこ同士なだけで、特に恋愛感情とかそんなことは……」

「え〜！？　そうなの？　でも、向こうの滅多に人が来ない倉庫の裏へ、二人してコソコソ入っていったじゃん」

もうバレてるんだぞって感じで、ウインクをひとつ。

あ、見られてたんだ……

よく見たら、私たちの周りの上級生たち、みんなニヤニヤして、私たちの会話を聞いているし……

本当に、頭痛くなりそう。

「私たち、本当に、何でもありません」

「ほら、隠してないで、もうみんなバレてるのだし、ちゃっちゃんと白状しちゃいなさい！　で、どこまで進んでるの？」

「だ・か・ら〜　本当に何もありませんってば！」

大崎先輩、私に向き直り、肩に手を置いてきた。

「まあまあ、そう恥ずかしながらに、洗いざらい、ここにいるお姉さま方にしゃべってご覧。きつと、すっきりして、モヤモヤした気分がふつとぶわよ」

う、うう……

この人たち、まったく聞く耳持っていない。

「と、ともかく、私、学君なんかとは、付き合ったりとかしてませんから」

うん………

ここは、一発、ガツンとショックを与えてあげた方がよさそうね。私は美の女神つかさちゃん、あなたたち下賤な人たちとは、違うのよって。

そしたら、少しはこのしつこい邪推、マシになるかな？

「はあ、今日倉庫の裏へいったのは、C組の男子に呼び出されたので、告白を聞いてあげてただけです」

たちまち、きゃあああ~~~~！！ って周りの上級生たち黄色い声を上げる。

「え、神宮寺、告白されちゃったの？ それでそれで、どんな子だったの？ 神宮寺はなんて答えたの？」

大崎先輩、興奮して迫ってくるし。目がランランと輝いている。

「確か、うちの野球部の浅黒くて背の高い人。でも、私、付き合う気がなかったから『ごめんなさい、私、他に好きな人いるので、付き合えません。でも、いいお友達でいきましょうね』って」

ええええ！？ 振っちゃったの？

周りの上級生から一斉に声が上がった。

うん………ポリウムがあがって、うるさい！ まあ、どうひいき目に見ても彼女たちには絶対に縁のないような話だろうから、信じられないんだろうなあ」

告白された上に、即座に、その相手を振るなんて………

「ええ、だって、付き合う気がなかったから」

私はさも当然って顔でしらっと答えるだけ。実際に、このところ毎日の日課になっていることをしただけだし。

「もちろん、今日もそれだけじゃなくて、その後も、他の場所で、何人かの告白を聞いてあげて、お付き合いを断っていたので、今日は遅くなったんです」

仕上げにうふっと笑ってみせる。

周りの上級生たち、呆然と私を見つめるだけ。なんて、もつたいないことをつて表情。

「たぶんこれからも、私、告白を聞かされに呼び出されたりするの
で、遅くなると思いますよ」

そして、エンジェル・スマイル　カンペキな勝利の笑顔！
どう、私は、あなたたちとは違う人種なの。わかった？

急にしずかになった上級生たち。なにかそれぞれの物思いにふけり始めた。

それぞれに、胸に秘めた人のこと思っているのかな？

それとも、比較的仲のいい男子たちのこと。

そんな男子たちが、ある日、彼女たちを呼び出して……

なんか、上級生たち、一斉に頬を染めてるし……

彼女たちをほって置いて、私、優雅に、手元の資料に覗き込む。

今度の週末、開催される観桜会（お花見）のプログラムや、当日のメンバーの配置表。

私たち、旧さくらヶ丘女子生徒会だけが参加するのじゃなくて、

旧さく女系の様々な部活も日ごころの練習の成果を発揮し、発表を行うみたい。

ちよつとした文化祭って感じかな？

会場も、裏山だけでなく、グラウンドや校舎内などいろんな場所に分散している。

で、それらの会場の設営や案内板の設置などを、私たちが手分けして金曜日にまとめて行うと。

当日のメンバーの配置を確認してみると、『受付』の欄に、私の名前。その隣……

「あ、委員長も一緒なんだあ」

うれしげな声と笑顔で、話しかける。

「うん、よろしくね」

「私、初めてで、よく分からないから、いろいろ教えてね？　って、

委員長も初めてか」

「ふふふ、今度の週末楽しみだね」

「うん、機会があったら、いろいろ見てまわりたいね」

「晴れるといいなあ」

「大丈夫、きっと土日は晴れるよ」

「え？ どうして？」

「だって、私、晴れ女だし」

そう、私、晴れ女。私が家の外へ出れば、たちまち雨が上がって、太陽の光が燦々と。

小学校のときから、私が参加した遠足、運動会、工場見学は全部快晴だった。でも、風邪で寝込んだ小3の遠足。天気予報では、とびきりの快晴だったのに、現地は、大嵐。遭難騒ぎまでおきちゃった。

ホント、美の女神だけでなく、天氣の神様にまで愛されちゃってる美少女つかさちゃん、なんかすごい！

お花見しましょ？ 4

で、そんなこんなで、金曜日。

私はいつものように、ありさちゃんとの待ち合わせ場所へ駆けていく。

でも、あれ？

いつもありさちゃんが一人で私を待っているのに、今日はありさちゃんの隣に……

「ありさちゃん、おはよう。……学君も、おはよう？」

「おはよう」

「よう」

なんか、学君照れたように、私に手を上げる。

「今日は学君も一緒？ めずらしいね？」

「そ、そっか？」

「だって、いつもバス停で…… あっそっか、熊坂さんにバス停取られちゃったからかな？」

でも、学君、イヤっと手を振る。違うみたい。じゃ、なんなんだろう？ なんて、いつものバス停でなく、ありさちゃんと一緒なの？ ヘンなの！

「じゃ、おれ、先行くわ。後でな」

私が、なにごとかと探るようにジロジロみるのに、耐え切れなくなったのか、学君、さっさと私たちに背を向けて、坂道を上った。

「うん、教室でね」

「……うん」

え！？ 私の聞き間違い？ いつも、あのヘンタイ男とか散々のしっていたのに、今日はなんか大人しいというか、しおらしいというか、はじらっているような。

なんだか、乙女って感じの声。

おもわず、私、ありさちゃんをジロジロ見つめちゃった。

な、なにがあつたの？ ここ数日の二人の間に……？

ありさちゃん、私の方を急に振り返って、私の手をつかんできた。

「え、え！？ な、なに？」

驚いている私に返事をせずに、ありさちゃん、

「さ、つかさちゃん、私たちも行こ？」

「う、うん……」

一体、この二人に、なにがあつたのだろうか？

ありさちゃんが道々話してくれたところでは、先日の出来事です
っかり生氣すらなかったありさちゃん。

放課後の部活もいつもの道場での稽古も精彩を欠いて、しばらく
散々だった。

でも、そんなありさちゃんを心配してか、学君が部活の帰り、道
場からの帰り、毎日待っていてくれたらしい。

あんな風におびえさせられて、暗い道を一人で帰るのって、とて
も勇気のいること。かといって、学校や道場に一人きりで取り残さ
れるのなんて、もっとイヤ。だから、ずっと帰り道、学君と一緒に
帰っていたんだって。

でも、あの学君とありさちゃんのこと、一緒に帰ってたっていても
きつと何も話題もなくて、会話とかせず、ただ黙々と二人で歩いて
いただけなんだろうなあ

ちよつと想像するだけで、わらっちゃう。

それでも、頼れる人間がそばにいるなんて、ありさちゃんには新
鮮なことだった。だって、いつも私に頼られて、私を守ってばかり
いたのだから。それがちよつと恥ずかしいけど、うれしかったんだ
ってえ。

なんか、頬の辺りを染めながら、そんなことを言ってた。

GJだ！ 学君！

よくやった。それこそ男子だ！ すごく格好いいぞ！

その調子で、二人の仲をもっと進展させて、恋人同士になつてく
れると、いとこのお姉さんとして、すごくうれしいのだけど・・・
・
・
そして、ライバルがひとりいなくなつて、私と清貴さんの距離が
・
・
・
・
うふ。

お花見しましょ？ 5

「って、今、心の中で褒めてあげていたところだったのに……」

「なんで、あんた、またそこにいるのよ！」

私、思わずこけてしまいそうになった。

いつものバス停の影、いつものように隠れている影二つ、そして、このところ恒例になっている言い争う声……

「はあ〜」

「もう、つかさちゃんに見つかったじゃない！ アンタのせいだからね！」

「はあ？ なんで、オレのせいだよ。大体、こんなところに隠れて、なにしてんだよ！」

「そんなこと、アンタには関係ないでしょ！」

「どうせ、また、つかさにヘンなことでもしようっていうんだろう？ これだから、ヘンタイ女ってやつは……」

「って、アンタも、つい最近まで、そのヘンタイ行為を私にしているたくせに！」

「はいはい、二人とも、ヤメ！ 喧嘩はそこまで、ストップ！」

「はあ〜 毎朝毎朝、なんで私が仲裁に入らなきゃいけないのよ。」

「つかさちゃん、このストーリーカー野郎、私のこと、ヘンタイ女って言った。信じらんない！ こんな可憐な美少女を捕まえて、ヘンタイだなんて。きっと、コイツ、私たちの純粋で清純な愛にやきもちを焼いているんだわ。こんなストーリーカー男の醜い嫉妬になんか、私たち負けない！ ね、つかさちゃん、いつまでもお互いへのひたむきな愛を大事にしていこうね」

熊坂さん、私の手を胸にしっかりと抱いて、悲劇のヒロインよろしく、あさっての方へ叫んでいるし……

「はあ〜」

って、こらそこ、私を置いて、二人で並んで勝手に先に行くな！
助けてよ！ 学君、ありさちゃん！

そう、学君とありさちゃん、二人で笑みを交わし、あきれたように肩をすくめると、とつとと並んで坂道を上っていった。

「ふっ、ようやく、あのストーカー男にも、私たちの愛の尊さが分かったみたいね」

私の隣で勝利のピースをして仁王立ちしている女生徒がひとり・
・

そんな私たちを登校中のほかの生徒たちは、遠巻きにして通り過ぎていった。

こ、この人は、私の友達なんかじゃありません！ 私、このひととは、まったく無関係なんです！

そんな悲痛な私の心の叫びに、耳を傾けてくれる人はだれもいなかった。

「ねえ、つかさちゃん？」

「え、なに？」

「あの二人、いつからあんなに仲良くなっちゃったの？ こないだまでは、お互い避けあっていたみたいだったのに……」

先を歩く、ありさちゃんと学君の後を、熊坂さんと私ついて歩く私としては、右腕をとられて、歩きにくいんだけど、全然放してくれる気はないみたい。

「あの二人って、付き合ってるの？」

「ん？ まだ、そこまでは言ってないとは思っけど」

「ふん……でも、なんか、さっきから二人とも全然何もしゃべらないね」

「うん。そうだねえ」

「じゃ、まだ、そんなに進んでないんだね。結構、お似合いなのに。ね、つかさちゃん？」

「え、ええ、そうね」

確かに、こうして、あらためてみると、この二人って結構お似合いのカップルなのかも。二人とも、私には劣るけど、美男と美女だし。それなりに、品があつて、武道の達人としてのたたずまいにはさすがつてもものがあるし……

「この二人がくつついてくれたら、私たち毎日こうして一緒にいられるのよね？」

ゾクツと寒気が背中を走った。

「よし、私がんばって、応援してあげよ」

な、なにかとんでもないことを口走ってくれたぞ、この娘。でも、まあ、私もこの二人を応援するのは、大賛成だけど。

熊坂さんが右腕を放してくれたのは、玄関に入ってからだった。

大きくバイバイって手を振って、D組女子の下駄箱コーナーへ駆けっていく。

入れ違いに、飛び込んできたのは島崎君だった。

「斉藤、ちよつといい？」

下駄箱の前で、上履きに履き替えているありさちゃんに声をかけた。

しかし、島崎君、しつこいというか、根性があるってというか……

ありさちゃんに相手にされなくても、相手にされなくて、毎朝毎朝、映画へ誘いにくるなんてねえ〜

でも、島崎君、もうそろそろ気づきなよ。ありさちゃん、島崎君のこと眼中にもないし、興味もないよ。それよりも、向こうの柱の影で、君の事、ジツと見ている女の子のこと、そろそろ気づいてあげなよ。

そして、今日も島崎君玉砕。

ありさちゃん、後ろも見ずにとつとと教室の方へ向かって行っちゃった。

島崎君、しょんぼりしちゃって……

思わず、私、島崎君に声をかけてしまった。余計なおせっかいの
ような気が、すごくしたんだけどねえ。

「ねえ？ 島崎君」

「え？ あ、ああ、神宮寺さん、おはよう」

精一杯の笑顔で私に振り返る。でも、いまにも顔が泣きそうに引
きつっているし……

「おはよう。ねえ、島崎君？ ありさちゃんって、今、付き合っ
ている人がいるって、知ってた？」

正確には、まだ付き合ってもいないし、恋心を抱いているかどう
かすら、自分では理解していないみたいだけど。私はそうなってほ
しいし、なってもらわないと困るといっか……

ともかく、こういうとき、こういう男にはストレートに言っ
てあげ方がいい。頭に血が上って、なにも見えていないだろうから。

「えっ……」

「だから、たぶん、ムダだと思うよ。島崎君がいくらがんばっても」

島崎君の顔から血の気が……

「あきらめな。すっぱり男らしく。ありさちゃんが本当に好きなら、
彼女が幸せにいられるように、彼女の幸せを邪魔しないように、遠
くから見守ってあげるのも、男子の格好よさだと思っな、私は」

「……」

「相手にされていないなら、きちんとあきらめて、女の子の幸せを
遠くから祈ってるって男の子の方が、いつまでもしつこく付きまとう
男の子よりも、私は好きだなあ」

実感だ。しみじみ……

「……」

「じゃ、そういうことだね」

私、そういって、島崎君の背中をドンと押してあげた。島崎君、
その反動で一步よろめいた。今は、シヨックでどうしようもないか
もしれないけど、この一步分の歩みから、島崎君が立ち直ってくれ
ることを祈って。

お花見しましょ？ 6

1 時間目の英語の時間。

島崎君、ずっと顔を両手で抱え込んだまま、何かを考えていたみたい。

2 時間目の国語の時間には、今度は、教室の中の男子の顔を一人じつくりと観察していた。

そして、2 時間目の後の短い休み時間。

たまたま私と学君が廊下の隅の自動販売機で、ジュースを買って並んで教室へもどつてくると、教室のドアのところで、島崎君が突進してきた。

「神宮寺、ちよつといいか？」

「なんだか、真剣な表情だ。」

「お、おう」

「う、うん」

私と学君、同時に返事をした。でも、この場合、島崎君が呼びかけたのは、学君の方だった。

島崎君、学君をつれて、階段を上り、今は使われていない3階の廊下の奥へ歩いていった。

私、物陰に隠れるようにして、そんな二人の後を追いかけた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

島崎君と学君、向かい合ったまま、黙ってにらみ合っている。やばっ この二人喧嘩をしちゃうの？ 二人からは死角になる場所に隠れている私。知らない人が見たら、これじゃまるで、私をめぐって、決闘を始める男たちふたりつて図だなあ。喧嘩は、やめてえ。二人をとめてえ。私のためにあらそわないで。

でも、この二人が争うのは、私ではなく、ありさちゃん。

なんで、なんで、ありさちゃんなのよ！

恋の決闘をするなら、普通、この美の女神つかさちゃんを賭けて
でしょうに！

世の中、間違ってる！ 絶対ヘン！

とはいえ、もし、本当にこのまま喧嘩になつたとしても、島崎君
がいくらスポーツマンだからといって、私を守って、実戦経験が豊
富な学君に勝てるはずはないだろうし……

やがて、島崎君から口を開いた。

「なあ、神宮寺。お前、斉藤さんと付き合ってるのか？」
相変わらず視線はするどいまま。

「ああ、オレはそのつもりだ」

学君、ためらわずに返事をした。

「そか……」

とたんに島崎君、うつむいちゃったし……

泣いちゃったのかな？ なんか、肩の辺りがピクピク動いてる。

「なあ、彼女、ステキな人だよな。優しく、格好良くて、がんば
つてて」

「ああ、そうだな」

「オレ、この学校に入ってすぐのころ、サッカー部のヤツが神宮寺
に告白するっていうんで、応援するつもりで、隠れて見にいった
んだ」

ん？ サッカー部？ だれのことだろう？ 何人かサッカー部の
男子から告白されたからなあ？

「そしたら、アイツ、あっさり振られてやんの。なんかかわいそう
だけど、おかしくて、隠れながら、ついつい大笑いしてた。それに
気づいた、ヤツ、急に怒り出して、神宮寺を追いかけていったんだ。
オレ、これはやばいってんで、慌てて、ヤツを止めに隠れ場所から
出て、追いかけていったんだけど」

ああ、サッカー部で私を追いかけてきたっていったら、B組の子
だったっけ？ 名前忘れちゃったけど。

「ヤツ、神宮寺に追いついて、抵抗している神宮寺を無理やり押し

倒そうとしやがった。オレ、すんげえあわてて、やめる！って大声だして、止めに入ろうとしたんだけど、その前に、たまたま近くを通りがかった斉藤が、間に入って、ヤツを投げ飛ばしちまいやがった。ヤツは、そのまま失神して、のびてたけど。投げ飛ばした斉藤、すげえ、様になってよ。すげえ、格好よくってよお」

とうとう、島崎君泣き出した。

「それ以来、気づいたら、オレ、斉藤のことばかり見てた。斉藤の声を聞きたびに、心臓がドキドキしてたし、斉藤の笑顔を見るたびに、頭がしびれてた。オレ、自分でもおかしいって思うぐらい、いつもいつも斉藤のことを考えていてよ。あんなに好きだったサッカーがちつとも楽しくなくなってるよ。部活がつまなくなってるよ」腕で涙をぬぐう。それでも、涙は次から次へあふれ出る。

「そんなときには、ああ、斉藤が応援に来てくれていたら、斉藤が『がんばれ』って言うってくれたらって、そんなことばかり考えていてよ。オレ、バカだよ」

学君、硬い表情で黙ってその場に立つたまま。

「そしたら、オレ、気づいちまった。オレ、あの一瞬だけで、斉藤に恋しちまったんだよ」

むせび泣きながら、島崎君告白を続ける。

「笑ってくれよ。高校生にもなって、一目ぼれなんて。オレ、みっともねえ。格好わるう。オレ、自分でもなさけねえよ。でも、オレ、斉藤が好きなんだよ。大好きなんだよ。どんなに格好の悪い恋だつて、アイツが、アイツが好きなんだよ」

学君、なにも言わず、真剣な表情のまま、島崎君の告白を聞き続けていた。

私、なんだか急に、これ以上、盗み聞きしているのが悪いような気がしてきた。男の子が、こんな風に自分の気持ちをはっきりと出すなんて。照れも恥も外聞もなんもかんも、全部忘れて。そういえば、私に告白してくれた男の子たちって、振られた後でも、なんとなく、スッキリしたような表情をしている子が多かったような。

私の頭の中で、最近、告白してきた何人かの男の子たちの顔がうかんだ。キチンと、思いを言葉にすることで、すっきりした気分になるのだろうなあ。それがどんな結果に終わったとしても。

心の中に抱え込んで、いつまでも吐き出さないのって、もしかすると一番不幸せなことなのかもしれない。

そして、島崎君、目の端に涙の粒をうかべてはいるけど、妙にすっきりした様子で。

「だからって、もう、オレ、斉藤に付き合ってくれって言ったりしない。アイツが俺よりも、神宮寺の方を選んだのなら、オレは、潔く身を引く。そして、斉藤が幸せでいてくれるのを影で見ていることにする。だから、神宮寺、斉藤のこと、よろしく頼むな」

おうとか、学君、口の中で答えたみたいだけど、返事は聞こえなかった。

「絶対に、絶対に、斉藤を幸せにしてやってくれよな！ 絶対泣かせるようなことはするな！ そのときは、オレが、お前を殴りにいくからな！」

島崎君、こぶしを固めて、軽く学君の胸を叩いた。

「ああ、まかせとけ」

島崎君、にっこりと人懐っこい笑顔で笑いかけていた。

「なあ、神宮寺」

「ん？」

「コレ、もうオレには必要がないものだから、お前にやるよ」

そういって、島崎君がポケットの中から引っ張り出したのは、映画のチケットだった。でも、学君、そのチケットを受け取りもせず、自分もポケットの中をゴソゴソかき回す。

やがて……

「それは、もらえねえよ。ホレ、オレもコレ」

同じチケットが学君の手に……

「そ、そうか…… やっぱ、オレって、みっともないな……」

「……」

二人とも、チケットをポケットの中にしまいなおし、苦笑いを浮かべあっている。

「でも、それ、捨てたりしない方がいいぞ！」

「……」

「お前以上に、みつともなく、お前に恋しているヤツだっているのだから……」

学君、ボソリとつぶやくように言った。

それから島崎君の手がかなり長いこと、止まったままだった。

「授業中とか、休み時間とか、お前のことずっと見てる女の子がいるの、お前気づいてないだろう？」

「えっ!?!? えっ!?!?」

「まったく。まあ、ありさにはかり意識がいつてて、周りがみえてなかったんだな。仕方がないといえば、ないか」

「だ、だれのことだよ？」

島崎君、狼狽している。さっき、ありさちゃんの幸せをずっと見守ってるとか、なんとかいっていたのに……

「まったく！ これだから、男ってヤツは……」

「とにかく、だれだとは教えてやらないけど、かわいそうだから、早くその子見つけてやれよ！ その子が見つからなくて、このまま不幸になったら、オレが、お前を殴りにいってやるからな！」

学君、こぶしを島崎君の胸に押し付ける。

「お、おう」

お花見しましょ？ 7

3時間目、島崎君、今度は、私たち女子の顔をひとりひとり観察しまくっていた。

島崎君を見てるって女の子を探しているのだねえ。

で、何人かの女の子と目が合って、照れたようにほっぺを掻いてごまかそうとしているし……

もちろん、私とも、何度も目が合った。

わざとらしく、声に出さずに、口の形で『なにか用？』って訊いてみたりして。

島崎君、そのたびに慌てて、視線を泳がせる。ふふふ。

まわりをよく見てみると、島崎君と目が合って、私のように、口の形だけで『何？』って訊いている女の子がいたり、気持悪そうに口をゆがめている子がいたり、完全に無視を決め込んで、無表情を通している子がいたり。女の子たちの反応は様々だった。

でも、一人だけ、まったく違う反応をしている子が。

その子は、島崎君に見つめられるたびに、緊張で、体を硬くして、スカートの端を凝視しているのだけど、島崎君の視線が外れるたびに、チラチラと目の隅で島崎君の様子をうかがっていた。で、島崎君の視線が自分の方に向いていないことを確認すると、落胆した表情を浮かべて、また、スカートの端を見つめてた。

うん、ほんと、けなげというか、なんというか……

4時間目も、島崎君の一人女子観察会はずぶく。

いい加減、私もくたびれてきたぞ！

事情を知っているだけに、それでも何とか、我慢してあげてるけど、他の女の子たちは、そんなこと知らないわけで……

とうとう、4時間目の授業が終わり、先生が職員室へもどっていった後で、何人かの女の子が、島崎君を詰問し始めた。

「さつきから、なに私たちのこと、みてるのよ！」

「気持ちわるいわね！」

「ヘンな視線で、私を見ないで！ ニヤニヤして、変な妄想しないで！」

って、それは絶対じゃないでしょ？ お相撲さんみたいな体型で、

それこそ、どんな妄想をしているのだから、彼女は……

島崎君、口の中でもごもご謝るばかりだった。

そして、そんな姿を遠くから見つめている女の子もいたりした。

その一方、4時間目の授業が終わると同時に、学君、ありさちゃんに話しかけて、二人で連れ立って、どこかへいつちゃった。

たぶん、想像するに、三階のさつきの場所へいったのだろうな。

で、しばらくして、ありさちゃん教室にもどってきた。

いつもの6人でのお弁当。

ありさちゃん、もうすっかり元気を回復して、いつものありさちゃんにもどっていた。

ううん。

いつも以上に、朗らかで、おしゃべりなありさちゃん。それに、頬をほんのり赤く染めている姿って、なんだか、かわいらしいし、色っぽいかも。

学君、きめるときはきめるねえ。

アンタは、男だ！ 男の中の男！

お花見しましょ？ 8

午後の授業も終わり、帰りのホームルームも終了。

いつものように、何人かの男子、女子を振って、生徒会室へ向かった。

「ったく！ほんと、面倒くさいんだから！」

「ヤになっちゃう！」

いつものように、生徒会室へ入ると会長にじろりとにらまれちゃったけど、もう、みんななんで私が毎日遅れるか知っているの、なんにも言わない。何人かの女生徒たちに、お疲れ様なんて、声をかけられ、部屋の隅、入り口から死角になる場所で、ジャージに着替えた。

今日はいよいよ観桜会前日。会場の準備をする日。

でも、カーテンで外からは見えないようにしてはあるのだけど、なんか私、部屋の中からじっとりと見られているような……

部屋の中にいるのは、全員が女生徒。男子生徒はひとりもないはずなのだけど、何人かのねっとり絡みつくような、舐めるような視線を感じる。

「ちょっと身震い。ヤな感じ。」

ともかく、さっさと着替えて、ださださジャージ姿の美少女完成。カバンの中から、愛用の手鏡を取り出して、格好を確認。

「うん。こんなだっさい格好をしていても、私ってきれい！」

それどころか、部屋の中の少女たちもみんな同じジャージ姿だから、私の美貌だけが引き立って見えてしまっわ。困ったわ、どうしましょ。うぶ。

やっぱり、モノが違うだけに、同じ格好になっちゃうと、違いが際立ってしまったて……。現実って、残酷よね。別に、私がいけないわけじゃないのよ。ただただ、神様に愛されて生まれた私の運命がそうさせるだけなの。ホント、私って、罪な女。

いやあ〜ん。

なんて、頬を押さえて、クネクネ腰を振ったりして。つて、なんか、みんな私から離れていっちゃったような。

そうね、私の美少女オーラが圧倒的で、物理的な力を持って、あなたたちを弾き飛ばしてしまったのね。

パフンツ。

そんな間抜けな音をたてて、会長が手元の書類の束で私を殴ったのは、この後だった。

「なに、神宮寺、もだえてんだよ！ 支度終わったんなら、さっさと、作業開始！」

「ほへっ？ は、はあ〜い」

私、慌てて、今日のそれぞれの持ち場へ散っていくみんなを追いかけた。

私の担当は、受付の設営。

長机を学校の倉庫から出してきて、校門の近くに並べる。そして、『受付』などと書かれた紙を机の前に貼り付ける。

非力で、可憐な女の子の私。何人か仲間がいるにしても、この作業だけでも、最初の見積もりでは一時間以上かかる計算だった。だけど……

私が玄関の外へ出た途端、グラウンドで部活動中の男子たち、帰宅部の生徒たち、みんな私のそばへ集まってきてくれて、手伝ってくれ、あつという間に受付の設営完了。

私、ほとんど働かなくて済んでしまった。

ぐふふ。コレだから、美少女つてやめられないかも。

その後も、私の即席ファンクラブ部隊が、私の指揮のもと、あちこちで活躍して、今日夕方までかかる予定だったすべての準備作業、ものの半時間ほどで終了。ホント、私つて、すごいかも。あ、いや、私の美女度つてとてつもなく、すごいのかも。知ってはいたけど、あらためて感心しちゃう。

うん、とりあえず、手伝ってくれたみんなに、お礼を言ってお
なくちゃね。

みんなでゾロゾロ、校門横へ移動して、私、手近かにあった椅子
に飛び乗って、みんなを見回して。

「みんな、今日は私たちのために手伝ってくれてありがとう」

ここで、必殺エンジェルスマイル。

うおおお〜〜〜！

なんて地鳴りみたいな騒音の中、あちこちから。

「つ・か・さ！ つ・か・さ！」

の声。なんだか、私、アイドルにでもなったみたい。みんな本当
にありがとうね！

アイドルなら、やっぱりここは、なにか一曲歌わないと、目の前
のファンたちは満足しないはずだわ。そう、私はこの学園のアイド
ル。ファンたちに、愛と幸せを運ぶ、エンジェルつかさちゃん！

いつの間にか、手元に握られていたマイク、そして、どこからか
聞こえる伴奏の音（吹奏楽部が練習していた）。

さっきまで、ざわざわしていた男子たち、急に静かになって、期
待のこもった目を向け、私が歌いだすのを待っている。

大きく息を吸い込んで、とびっきりの美声を出す準備をして・・・

・・・

そして、その瞬間、どこからともなく、飛んできた木の枝が私の
顔を直撃した。

「ぐへっ！」

だ、だれがこんなことを・・・

私はそのまま失神してしまった。だれか、私の暗殺を企てている
ものがあるのかしら。

そうね、この美貌だもの、嫉妬するひとは多いのかも知れないわ
ね。

でも、一瞬、ちらっと見えた、投げってきた人の背中、なんだか学
君に似ていたような気もするのだけど・・・

きつと、気のせいだよな？

私が保健室に担ぎこまれた後も、各クラブの部員たちの手で、明日の観桜会の準備、着々と進められていた。

さくらヶ丘歴史伝統研究会の主催で行われるこのイベント。前にも書いたとおり、私たち旧さくらヶ丘女子生徒会だけが参加するのではなく、旧さくらヶ丘女子高校にあった各クラブも参加する。

まず、茶道部が裏山の頂上付近で、野点をたて、訪問客へ無料でお茶をふるまってくれる予定だし、中腹の東屋では、美術部や手芸部の作品が飾られることになっている。裏山の入り口脇、管理棟からは、吹奏楽部・軽音楽部がこの日のために練習してきた琴や横笛なんかを演奏して、上品な花見の気分を盛り上げてくれるのだとか。また、裏山の途中にある池の周辺では、文芸部による自作詩・俳句・短歌の朗読会が開かれ、時間帯によって、あちこちを舞台に演劇部の野外劇が繰り広げられる。

学校の敷地内では、裏庭にしつらえた舞台上で合唱部や吹奏楽部、軽音楽部などなどのコンサートが行われ、体育会系のクラブを中心に、グラウンドで屋台の出店もある。

こんな感じで、一部で多少の例外はあるけど、概ね野外で行われるのが、この観桜会の特徴だ。

で、肝心のこの会の主役・桜。

ソメイヨシノは、さすがに私たちの入学式のころまでに、とうに散ってしまったているけど、今、裏山で満開を迎えているのは、八重桜。ぼつとりとした感じの大ぶりの花が鈴なりに咲いて、まるで、木の枝をピンクの真綿で包んだみたいに見える。

その八重桜が裏山一面に咲いていて、遠くから見ると、ピンクの雲がたなびいているかのよう……

すごく幻想的で、きれい。

一步、裏山に足を踏み入れると、やさしいピンクの雲の中に浮か

んでいるかのようなフワフワとした気分が味わえるんだよねえ。

だから、さく女のOGや招待のチラシが配られる近所の人たちみんな、この観桜会を心待ちにしているのだとか。

今年もあの幻想的で美しい世界を堪能できるって。ピンクの雲に つつまれるって。

でも、そこへ、今回の世界金融危機。

あっけなく、さく女が神宮寺高校へ吸収合併。OGや近所から、

一時期、急な合併に反対する署名活動が行われかけたのだとか・・・

その懐柔策として、神宮寺高校側が用意した策が例年通り観桜会の開催を認めるってこと。

旧さく女生徒会を中心に観桜会開くってというのは、神宮寺高校側にとっても、渡りに船の提案だったみたい。

まあ、大人の世界にいろいろあるにせよ、明日からの観桜会。十分に楽しみたいね。私たちとしては！

そして、週末の土曜日。

いよいよ観桜会の一日目の始まり。

私たちは、いつもより早めに家を出て、学校へ集合していた。

旧さく女生徒会メンバー一同と旧さく女系部活の代表者たち。グラウンドの朝礼台の前は人であふれていた。

「あ、つかさちゃん、おはよう！」

「おはよう！ ほら、委員長、お天気晴れたでしょ」

この時期、春霞がかかって、晴れたとしてもうすぼんやりとした天気にはならない。なのに、今日は快晴。雲ひとつない、抜けるような青空！

これは、気をつけないと、今日だけでも日焼けで真っ黒になっちゃいそう。

「うん、本当だね。つかさちゃんすごいねえ」

「へへへ。でしょう」

胸をはって、Vサイン　委員長、律儀にほめたたえて拍手してくれたりして。

でも、なんかまわりから人が半歩ぐらい離れていったような気もしないではない。

今日は委員長も私も、神宮寺高校のたださ制服を脱いで、この春の入学のため準備していたさく女の制服を着ている。

あんな急な合併さえなければ、毎日私、この制服をきて、学校へ通っていたはずなのに・・・・・・・・

ああ~~~~

まだちよっぴり防虫剤の匂が残っている薄い桜色の制服を、残念そうに見下ろした。

憧れだったのに・・・・・・・・

「わあ〜つかさちゃん、かわいい。ホント、なに着ても似合っちゃうねえ〜」

そんな私の憂いを帯びた思念に関係なく登場するのは、いつものマイペース女・熊坂光。

いつものように、私に飛びついてきて、頬へキス。
はあ〜

毎日毎日、うつつうしいんだから……

「ひかりん、今日はなにをするの？」

私たちと違って、熊坂さん、神宮寺のジャージ姿。ってことは、裏方組に配属になっているはずなんだけど……
なにするのだろう？

私、手元の資料を引つ張り出して、確認してみた。

えっと……小間使い係？

ん？ んん！？ 何するのだろう？

「えっとね。常時、生徒会室に詰めていて、みんなのお世話をあれこれする係らしいけど、よくわかんない」

う〜ん……本人もよく分かっていないみたいだし。

なんか、いまいちどこういう役なのか想像できないや。

結局なんなのだろうね？

私たち3人が、しきりに首を振って、どんな役なのだろうって考えている間に、会長がグラウンドへ現れた。

胸を張って、あたりに威厳を撒き散らしながら、朝礼台へ上がっていく。

「みんな、おはよう！」

グラウンドに集まった女生徒たちは、口々におはようという返事する。

「今日は、いよいよさくらヶ丘女子高校伝統の観桜会、初日です。

昨日までの天気予報では、今週末雨が断続的に降り続くという予報でしたが、幸い、その予報が外れたみたいで、今日はまさに、日本

晴れのよい天気となりました」

私、委員長とにつこり微笑み交わした。

「まさにお花見日和、観桜会日和です。今日いらっしやるゲストのみなさまには、心地よくお花見を楽しんでいただけるように、我々、気を抜くことなく、精一杯がんばりましょう。これぞ、さく女のもてなしというところを存分に味わっていただきましょう！」

生徒たちは、それぞれにうなずきあっている。折角、OGや外部の人たちを招いて、イベントを開くのだ。来てよかったと思ってもらえるような、そんなイベントにしたいよね。

「そして、伝統あるさく女に恥じない観桜会にいたしましょう！
神宮寺には到底真似できないようなすばらしい成功を成し遂げましょう！」

って、会長、その台の隣に立っている男子って、神宮寺の生徒会長でないの？ 入学式のとき見かけたし……

神宮寺の生徒会長、思いつき苦笑を浮かべてる。

「みんな、力を合わせて、がんばろう！」

そんな生徒会長を完全に無視して、熊坂会長、こぶしを固めて……

「エイッ！ エイッ！ オー！ 打倒、神宮寺！！！」

聴衆の女生徒も、エイエイオー！ なんて。ちよつと悪乗りでないの？

そして、パラパラと拍手。そのまま、みんな、開会の挨拶も終わらったって感じで、それぞれの持ち場へ散ろうとし始めちゃった。

神宮寺の会長かわいそうに、自分もなにか話すつもりだったのだから、台を熊坂会長が独り占めして、譲ってくれないものだから、全然口を開く機会を与えられなかった。

あらら。しょんぼりしちゃって。

なんだか、かわいそう。

ほんと、熊坂会長も大人げないんだから。って、高校3年生じゃ、まだ大人げもなにもないのかな？

ともあれ、朝礼台の上の熊坂会長、神宮寺の生徒会長がしょんぼりしているのを、ニヤニヤしながら見下ろすのだけは、やめたほうがいいと思うよ。

悪人顔だし、老けて見えるから。

私と委員長などの受付組は早速、校門脇に移動した。

まずは、日焼けしないように、しっかりと顔や手足に日焼け止めを塗っておき、受付時にゲストへ渡すパンフレットを準備する。

もちろん、今回の観桜会、高校のイベントなので、入場するのは無料なのだけど、寄付を募ったり、来年度受験生への学校案内をしたりなど、受付といっても結構仕事があるだよねえ。

開場前に最後のチェックを済ませ、私たちは待機に入った。

後は、神宮寺の理事長や生徒会長、熊坂会長などが到着するのを待つばかり・・・・・・・・・・

「私、大丈夫。失敗したりなんかしない！ 私、大丈夫、失敗したりなんかしない！」

急に隣で委員長、メガネの奥の瞳をぎゅっと閉じ、胸の前で腕を組んで、唱えだした。

私も、緊張で歯がガチガチ音を立てている状態。ホント、こんな状態で大丈夫なのかしら？

受付なんて、学校の顔のような場所に私がいて、場違いじゃないのかしら？ なんて、美少女戦士つかさちゃんにとって、場違いなわけなどないけど・・・・・・・・・・

「大丈夫、大丈夫、大丈夫！ 私、ミスしない！」

やがて、校舎の方から、小さな集団が近寄ってきた。

熊坂会長の顔が見えるし、神宮寺の生徒会長もいる。あの白髪の老人は神宮寺の理事長。校長先生のツルツル頭が今日も朝日を反射してる。

ゆっくりとした足取りで、その集団、私たちの目の前にやってきた。

すでに、校門外には、OGたちや近所の人たちが集まって、ざわ

ざわしている。

理事長一行の中から、教師たちが走り出て、門扉に取り付き、開いた。

「みなさん、おはようございます！」

校門の外のざわめきがしずまり、自然と理事長一人へと視線が集まった。

「神宮寺高校へようこそ」

熊坂会長が一瞬顔をしかめたのが見えた。

「本日はご覧のような快晴。すばらしい天気。実にいいお花見日和です。そして、今年も裏山では八重桜が見事に咲きほこっています。今年も、その格調高き美しさに感銘をうけること折り紙つきです。さあ、これより開場いたします伝統の観桜会。みなさん、今年もたくさん楽しみ、桜を満喫してください」

理事長を先頭に、全員、一列に並びなおした。

その前をゲストたちが、笑いさざめきながら通り過ぎる。

そして、いよいよゲストの一人目が、私の前に立ったのだった。

「こんにちは、おはようございます」

「お、おはようございます」

私の前に立ったゲスト一人目は、青年だった。明らかにOGではないよね。

なんだか呆然と私の顔を見つめて立っているその男性、私が爽やかな微笑を浮かべて、『こちらへご住所とご署名お願いいたします』なんて、ペンを渡すと、飛び掛るようにして、署名用紙に住所と名前を書き込んでいく。

この様子だと、こちらにクレジットカードの番号とか、各種暗証番号とかをお願いしますって言ったら、本当に書いてくれるかも。

ここで得た氏名と住所の情報は、後で整理しなおして、お礼状の発送だとか、次回イベントの案内、寄付の募集のための名簿作りに使われる。

ゲストが署名している間に、案内用のパンフレットを準備して、次の初老の女性に署名用紙を渡し、署名をお願いする。

さらに、その次の重力の影響をまともに受けている中年女性にも署名をお願いして。

最初の位置にもどるころに、一人目の男性は書き終わって、私をじっと見ているし・・・・・・・・

私の顔になにかついているのかしら？

ふふふ、そんなに見つめられたら、私の顔に穴が開いちゃいそうよ。

早速、準備していたパンフレットを渡して、『ごゆっくりどうぞ。観桜会、たのしんでいってくださいね。それと、もしよろしければ、あちらで高校施設充実のための寄付を募っておりますので、よろしくお願いいたします』なんて案内をする。

彼、なんだか壊れた人形みたいに、ウンウンって何度もうなずい

て、私が指した寄付の受付の方へ行っちゃった。しばらくして、寄付の方の受付の女の子、目を丸くして、ビックリしているけど、もしかして、相当多額の寄付をしちゃったのかな？

てへ、ホント、私って、罪な女。

二人目の初老の女性は、『はい、そうね。今年も小額だけど、寄付させてもらうわね』なんて、感じのいい微笑を浮かべて、寄付の方へいったけど、三人目の中年女性は、ちらりとそちらを見ただけで、さっさと先へいっちゃった。

それから、何十人も人の受付を済ませたころ、私の前に立ったのは……

「おっす！　つかさ」

「つかさ、おはよう！」

学君とありさちゃん。

二人で連れ立って、やってきた。って、土曜日の朝っぱらから、二人そろってくるなんて、なんか、なんか……

「おはよう！　学君、ありさちゃん。来てくれたんだあ」

他のゲストはほっぽりだして、二人の相手……

ありさちゃんの手をとって、キャツキヤと喜んで見せた。なんかすごいブリッ子。でも、周りにいる男性たち、私とありさちゃんのそんな楽しいげな様子をまぶしいものでも見るようにして、目を細めてるし。さすが、この学校一番と二番の美少女コンビ。まわりの男たちの視線、釘付けよ！

「あ、そうそう、ここに署名してね。ハイ、これパンフレット」

私、まとめて、署名用紙とパンフレットを二人に渡した。二人が住所と名前を書き込んでいる間に、一旦ほっぽり出していたゲストたちの相手。

手早く終えて、二人の前にもどってくると、

「くふふ。つかさ、結構きちんとしてるんだあ」　えらい、えらい！　「

ありさちゃん、私の頭をなでてくれた。

「えへ、すごいでしょう」

「うんうん、すごい！ いつの間に、こんなことをそつなくこなせるようになったのだろう。ありさお姉ちゃん、感動だよ！」

ありさちゃん、私の首を抱きしめてくれるし……

うれしいのだけど、ちよつと大げさ。

でも、いつか。なんか気持ちいいし。

「さて、ありさ、そろそろ行くこうぜ！ 空手部の先輩たち、向こうでたこ焼き焼いてるらしいから、挨拶にいかないと、剣道部もなにか屋台だしてるんだろう？」

「あ、そうね。じゃ、つかさ、がんばってね」

「うん来てくれて、ありがとう。私、がんばる」

二人は、私に手をふって、並んでグラウンドの方へ歩いていった。二人して楽しそうに話しながら……

でも、なんだろう、そんな二人の様子を眺めていると、ちよつと胸の中が冷えたような気がする。体の中に、そよと風が流れた。

それから一時間もしたころ、一人の女性が受付に来た。

細身の40代の女性。上品な着こなしが、素敵。

その女性、私の顔を見るなり……

「あなた一年生ぐらいかしら？ もしかして、あなたが斉藤さん？」

私は、きょとんとして、彼女の口元を見つめた。すぐにハツと気がついて、

「え？ いえ、違います。神宮寺です」

「あら、そう。とても素敵なお嬢さんだから、間違っちゃったわ。

ごめんなさいね？」

とても素敵なお嬢さんなのは、分かっているし、その通りだと思っけど、だからといって、なんで、私が斉藤さん（ありさちゃんのことかな？）と間違えられなきゃいけないのだろう？

「いえ、いえ」

「うちの息子の祐一が、学校で一番の美人がA組の斉藤ありささんっていう娘だつて言っていたから、てつきりあなただと思つたの」「な、なに！ な、なんで、学校一の美人が私じゃなくて、ありさちゃんなのよ！ あなたの息子の祐一ってどんな目してるのよ！ 目の玉が腐っているんじゃないの！ 目ヤニだらけになっているんじゃないの！ 一度取り出して、ようく、きれいに洗つてあげた方がいいことよ、お母様！」

「ったく！」

でも、ふつと、横を見ると、なぜか委員長固まつてるし……

「委員長、どうしたの？」

私の声が聞こえなかったのか、じつと私の前の女性を見つめてるだけ。

「委員長？ 大丈夫？」

ちよつとひじを突いてみると、ようやくスイッチが入つたみたい

……

「あ、うん、大丈夫……」

「あの、こちらへご署名とご住所をご記入いただけないでしょうか？」

私、署名用紙をその女性に渡した。

「あ、はいはい。あなたも大変ね。こんなに忙しいなんてね」

「いえ、そんなことは……」

確かに大変だ。開場してから、3時間近く、ひっきりなしにお客がやってきて、受付をしているわけだし……

「私たちの頃は、今日みたいに晴れてなくて、二日とも小雨まじりの天気だつた上に、開花が遅れ気味だつたから、お客さんが少なかったのよね」

「あ、卒業生の方でしたか」

「そう、もう卒業して20年以上になるのね。さくらヶ丘の名前が

消えちゃったのは、残念だけど、息子が今年神宮寺に入学してね。今、このキャンパスに通っているのよ。わたしたちが通っていた、この場所にね」

「へえ、すごい偶然ですね。まさに運命ですね」

「そう、運命なの。でも、素敵な運命だわ」

その女性、署名を終えて、私に署名用紙を渡してくれた。

交換に準備しておいたパンフレットを渡し、

「では、先輩、どうか、今年の観桜会楽しんでいってくださいね」

「ええ、そうさせてもらおうわ」

彼女、小さく手を振って、私が何も言わないのに、寄付の受付の方へ歩いていった。

私の手には、『島崎ゆり子』という名前が書かれている紙が残った。

ようやく、私たちが休憩を取ることができたのは、正午すぎになってから。

私たち午前の担当組は、午後担当の人たちに引き継ぎを済ませ、午前中の来場者の署名用紙を抱え、寄付金などを携えて、生徒会室へともどっていった。

生徒会室で、昼食のお弁当をとり、着替えを済ませ、書類の整理を済ませれば、今日はもうお役御免。後は自由時間。

私たち疲れて脚を引きずるようにして、生徒会室までやってきた。おしゃべりするだけの気力も湧かない。午前組の全員が、ぐーぐーお腹を鳴らしている。美少女戦士つかさちゃんとしては、だれにも見られたくない姿、聞かれたくないお腹の虫だけど、そんなことも気にしてられない・・・・・・・・・・

私、力なく、生徒会室のドアを開く。

すると、目の前に、作り笑いを浮かべ、だれかと話しをしている会長の姿が目に入った。

その誰かは、私たちに背を向けて、椅子に座っている。女性だった。50代ぐらいの押し付けがましい声音の女性。

「そうなのよ。さっき、うちの子が慌てて家に帰ってきてね。今日、こちらでお見かけした方に一目ぼれしたって言うのですよ」

会長の視線が、入り口の私たちをとらえる。

「あ、ご苦労様。あっちにお弁当用意してあるから」
その声につられ、会長と話している女性も振り返り、私たちをよく見もせず、気のない会釈。

ぺこりとお辞儀をして、会長の邪魔にならないように、そそくさと部屋の隅へ私たち移動した。

部屋の隅では、熊坂さん（妹）が一人一人にお弁当を配ってくれる。でも、私のときに、なにか目配せをしてくれたような・・・・

・
「でね。なんでも、受付のところいたお嬢さん、すごい美人で、一目で気に入ったのですって。もうあの子ったら、興奮しちゃうって。ボク、絶対あの娘をお嫁さんにするんだって、そりゃもう張り切っちゃって」

「は、はあ〜」

ちらりと、会長、私の方を見たような。

「私も、さっきこちらへうかがうときに、受付でちらりとお見かけしましたけど、確かに、うちの子がいうように、上品で感じのいいお嬢さんじゃございませんか。私もピンと来ましたわ。うちのお嫁に来ていただくのは、彼女しかないって。私の勘ってよく当たるのですのよ。だから、間違いなく、あのお嬢さん、私どもへ将来お嫁にこられるのは、間違いありませんわ」

「は、はあ〜 で、私どもに、どのようなご用件で、おいでになられたのでしょうか？」

会長、顔が引きつっているよ……

私たちは、かわいらしく『いただきます』をして、お弁当を食べ始めた。

「あ、そうそう、そうだったわね。私ども、ちょっとお願いありまして。あの受付のお嬢さんをご紹介いただけないかしら？ できれば、明日にでも、私どもの方へご招待申し上げたいところなのですけど」

「は、はあ〜」

「まあ、明日もこちらで観桜会ですか、イベントをやってらっしゃるようなので、ムリには申しませんが、ぜひ、ご都合がよろしいときにでも、我が家へ遊びに来ていただけるように、あなたの方から、お話を通していただけると、ありがたいのですわ」

会長、困って、鼻の頭をポリポリ掻いてるし……

「ちょっと申し上げにくいのですが、その、親御様からお預かりしている私どもの生徒のことですので、よそ様にこちらの勝手にご紹介

介したり、どこそこへお伺いしろ！　だなんて、命令するわけには
いかないんです。それで、もし万が一の間違いでも起こったら、私
どもでは責任を負いかねますので。一応、本人やご家族には、その
ようなお話しがあったこと、伝えてはおきますが、その、私どもと
しては、それ以上の対処は取りようがないことを、ご理解いただけ
るとありがたいのですが……」

すこし、考えるかのような間があつて……

「うん、まあそうね。では、えっと、熊坂さん、この件、あの受付
のお嬢さんにはくれぐれもよろしくお伝えくださいね」

「は、はい」

会長、ちよっぴりほつとしたような表情だ。面倒なことから解放
されて、心から、喜んでいゝって、風情。

「いそがしいのに、ながながとお引止めして、もうしわけなかつた
ですわね」

「いえいえ、お気になさらずに」

「では、失礼いたします」

そういつて、その女性深々とお辞儀し、部屋を出て行つたみたい。
ちよつどそのとき、熊坂さん（妹）が私の前に立って、お茶を淹れ
ていてくれたから、その女性が出て行く様子は見えなかつたけど。

その女性が消えてから、会長、舌打ちを連続3回。

「つたく！ なんだってんだ！ これで朝から4人目だぞ！」

くおおおおくく

なんて、吠えてるし。

「受付の女の子紹介しろ！ 受付の女の子紹介しろ！ って、そんなのできるわけねえっていうの！」

すごい目で、私をにらんでくれるし・・・・・・・・

やっぱり、そういうことなのね。

私、小さくぺこりと、頭を下げた。

だあくくく！！

会長の咆哮で、新館のガラスまで震えたという・・・・・・・・

つたく！

会長さつきから何度も何度も、舌打ちを繰り返していた。

「ほら、ひかり、おかわり！」

会長、弁当をがつつきながら、熊坂さん（妹）に空になったお茶碗を押し付ける。

「はい」

なんて、かわいい声で返事をして、茶碗にお茶を注いで、

「はい、お姉ちゃん、どうぞ」

「おっ、サンキュー、あちっ」

茶碗を見もせずを受け取った会長、私たちが持ち帰った署名用紙の束を眺めながら、ブツブツつぶやいていた。

「だいたい、午前中で、約400人ほどか。さすがに晴れてると違うな。去年は、初日、お昼になった段階で150人いくかどうかだったし・・・・・・・・」

去年は、くもりで、寒さがぶり返していた中での開催だったらし

い。

今年は、盛況なので、会長の口調もうれしげ。

「この調子だと、初日だけで、1000人越えるかな？ うんうん、今年は、大成功だな。昨日、アイツを作った甲斐があったってもん
だ」

生徒会室からグラウンド側の窓を見ると、最初に目に飛び込んでくるのが、そのアイツ。超デカデカてるてる坊主。

「晴れのお天気、万々歳だわ」

上機嫌に弁当の塩ジャケにかぶりつきつつ、鼻歌が飛び出したり。
.....

部屋の隅では、私たち、お弁当を食べ終わり、熊坂さん（妹）が入れてくれたお茶をすすって、のんびりまったり。

まだ署名用紙を整理して、パソコンで名簿を作成するって仕事が残っているけど、とりあえずは休憩。英気を養って、次のもつと地味で、根気のいる作業に取り組まなくちゃね。決して、面倒なことをこのままズルズル引き伸ばそうなんて、思っているわけでは.....

へんな誤解しないでね。

あくまでも、受付に立っていた疲れをとるために、ダラダラしているだけだよ。決して、怠けているわけではないんだよ！

本当だよ！

私たち、のんびりとくつろぎながら、今日あった出来事をおしゃべりしあう。

「あつ、ねえ〜 委員長。今日は島崎君のお母さん来てたね」

「う、うん。そうみたいだねえ〜」

「なんかすごく上品で、素敵な人だったねえ」

「そうだったねえ〜 あの桜の花びらのブローチすごくかわいかった」

「え？ ブローチなんてつけてた？」

「うん、つけてたよ。それに、バッグもブランド物だったし」

「ええ〜 委員長よくみてたねえ 私、緊張してて、そこまでこまかく観察している余裕なかったわ」

てへって舌だし。

「私、あの人が署名してくれるまで、全然、島崎君のお母さんなんて、気がつかなかったなあ。全然似てないし、雰囲気とか、しゃべり方とか、全然違うんだもんねえ」

って、委員長、耳まで赤くなっちゃった。あれ？ なにか、委員長を恥ずかしがらせるようなこと言ったっけ？

「そ、そうね……………」

「そういえば、島崎君って、祐一っていうんだねえ」

「うん……………」

あ、そうか、あの時、あの人が祐一って口にしたとたんに、委員長固まっていたんだっけ。ということは、その一言で、委員長は気がついていったんだね。

「あの島崎君だから、てつきり、翼とかいう名前なんだろうなって思ってた。それが、祐一だなんて……………」

これ見よがしに肩をすくめ、はあく息を吐く。

委員長の頬から、自然と笑みがこぼれた。

私も、同じ笑みを返す。

くふふ。

うふふふふ。

とうとう、二人とも楽しげに笑い声をあげた。

「ねっ、さっきの人、すごく感じの悪い人だったね」

「えっ？ そ、そうかな……………」

「そうだよ…………… だって、押し付けがましいって言うか、相手の迷惑なんて、どうでもいいって感じ……………」

「ふむふむ」

「それに、お子さんがつかさちゃんに一目ぼれしたからって、なん

で、母親のあの人がでしゃばってくる必要があるのかしら？」

「まあ、たしかに……」

「人を好きになるのって、本人の問題だし、親がでしゃばるなんて、ヘンなの！」

あれ？ 委員長が、他の人を悪く言うのって、はじめてみた。いつも、クラスみんなのフロアに回って、声を荒げるなんてことしないのに……

そういえば、島崎君のお母さんも、私のこと、ありさちゃんと間違ってたし。あれも、本人の恋愛に母親がでしゃばってきたのと一緒じゃないのかな？

もし、あの場にいたのがありさちゃんだったなら、彼女どうしていたのだろう？

『うちの祐一があなたのことを気に入ってるみたいなの。これからも、祐一のことよろしくね』とかなんとか、言い出していたのかな？

さっきは、すごく感じのいい人って気がしてたけど、それってやっぱり、やだな。やな感じ。

男の子の母親って、息子に好きな人ができると、どんな気分になるのだろう？

素直に、子供の恋愛を応援しようって気分になるのかな？ それとも、大切な自分の子供をよその女にとられちゃうって、嫉妬しちゃうのかな？

学君のお母さんは、今どんな気分なんだろう？

やっぱり、ありさちゃんの出現、よろこんでるのかな？ それとも、怒ってるのかな？

あの学君に甘いおばさん、今、どんな風になってるのだろう？ 今度、久しぶりに会いにいつてみようかしら……

でも、今は、こんなこと考えても無駄ね。私は、男の子のお母さんじゃないのだし。

この問題、私には、まだ答えが見つからないし、まだまだ、見つけられそうもない。でも、今はまだ、分からないことだらけだけど、

いつか、私にも関わってくるのだよね。いつか私にも、ちゃんと
彼氏ができて、その彼のお母様と・・・・・・・・
清貴さんのお母さんの三木先生と・・・・・・・・
きつといつかは・・・・・・・・

「ねっ、つかさちゃん。ねってば！」

思わず、考え込んだじゃった私。目の前で、誰かが手をひらひらと振っていた。

「え！？ あ、ごめんなさい。考え事してた」

「ふふふふ、つかさちゃん、ポーっとしちゃって、何、考え込んでいたの？」

「こら、ひかりん、そんなこと聞いちゃダメだよ！ あんなヘンな女の人の話で、つかさちゃん混乱してるんだから」

「えっ？ えっ？」

私、目の前の委員長と熊坂さん（妹）を交互に見ていた。

「ああ、つかさちゃんをお嫁さんにほしって話？」

「そう。ヘンな人だよねえ〜 息子さんの話なのに、母親がでしゃばってくるなんて・・・・・・・・」

「ふふふ。ヘンといえばヘンだよねえ〜 でも、今日は、あの人がけじゃなかったんだよ」

「え？ あ、そういえば、熊坂会長が4人目とか・・・・・・・・」

「そう、朝から、OGの人とか、近所の人とかやってきて、お姉ちゃんにつかさちゃん紹介しろ、連絡先を教えろって、大変だったんだから」

「そ、そうだったんだあ〜」

「お姉ちゃん、それを全部断るので、疲れ果てて、ほら、あんな状態なんだよ」

熊坂さん（妹）、あごで、机に突っ伏して寝ている会長を示した。お弁当を食べ終え、どっと疲れが出たのか、休憩中。

「こんなの初めてだって。こんなことするために、さくらヶ丘に入ったのじゃないぞって、さっきまでブーブー言いまくってたんだよ。おねえちゃん、機嫌が悪かったから、たいへんだったんだから」

まあ、私のせいで、余計な仕事が増え、気の毒には思うけど、でも、私の美貌を買って、受付に回すって決定したのは、会長自身なわけだし……

それに、周囲からこんなに好かれる、見初められるのは、私自身がどうこうじゃなくて、私の外見がなせるわざ。私がかしたわけでもない。

同情はするけど、申し訳ないなんて、絶対に思っただげないんだから！

私たちは、ようやく重い腰を上げ、署名用紙の整理に取り掛かった。

もちろん、熊坂さん（妹）も手伝ってくれている。思ったよりも作業がサクサクと進めているのは、熊坂さん（妹）のおかげ。やっぱり、あの会長の妹なんだねえ。手際がいいし、パソコンの入力作業も、ブラインドタッチ。私たちが人差し指一本で、ポチポチ打ち込んでいる間に、彼女の指がキーボードの上をすごい勢いで跳ね回り、踊りまわって、あっという間に一件分の入力が進んでしまう。ちよつと尊敬しちゃうかも……

「えつと、この人は、ご近所の人だね。そういえば、さつきも同じ名字の人があつたけど、もしかして、家族なのかな？」

「え？ ちよつと待って、さがして……あつた、えーと、そうだね、同じ住所になつてる」

「こういう場合は、どうすればいいの？ さつきの人のところへ、書き足すの？」

「うん、えつと……どうするのだろう？ ねえ、お姉ちゃん、家族の人が別々に署名してある場合、記録するときは、どうするの？」

熊坂さん（妹）、背後で、まだグターとなつてる会長に訊いた。会長。ピクリともしないけど、声だけは聞こえた。

「ああ、一緒にしておいても、しなくても、どちらでもいいぞ。ど

うせ、後で、重複とか確認して、整理しなおすわけだし」

「だって、つかさちゃん」

「りょうかい」

ビシツと、敬礼。これで、入力作業、一件分、楽になった。

私たちの隣のPCでも、委員長悪戦苦闘中だけど、これは私みために、PCに不慣れだからじゃなくて、署名用紙に書かれた文字が癖字だから。

「ひかりん、これ、なんて読む？」

「えつと、………帯水？」

「でも、近所に帯水町なんていう地名あったかしら？」

委員長、眉毛を八の字に寄せて、考え込んでるよ。

「それって、帚木町じゃないのか？」

私たちの背後から、会長が間髪いれず、突っ込んでくる。

「あ、なるほど。いわれてみれば確かに、帚木町であゝ ありがとうございます」

ようやく、委員長納得がいったみたい。眉毛を開いて、入力作業

再開。その隣で、手を休めることなく、熊坂さん（妹）、

「ほつき町？ 帚がたくさんある町なのかなあゝ」

「ばか！ 昔、帚をたくさん作っていた町だから、帚木町。自分が住んでいるところの隣近所の町ぐらい、由来とか、覚えておけよ！」

あらら、熊坂さん（妹）怒られちゃって………

って、隣町の名前の由来まで覚えておくのって、常識だったの？ 私、私の住んでいる町の由来すら知らないんだけど………

私たちが署名用紙と格闘している間に、寄付の受付担当だった先輩の方は、早くも寄付額の集計や、寄付者の名簿作り終了したみたい。

まあ、私たちの方とは違って、名前だけだし、PCへの入力作業はしなくていいわけだから、ラクといえはラクなのかな？ あとは、手提げ金庫の中のお金を数えれば終了だし。

「会長、初日の午前中の分の寄付金額です」

寄付の方の先輩、お金の入った金庫と、それを集計した帳簿、名簿などを置く。

「あ、ご苦労様。どうだった、今年は、たくさん集まった？」

会長、ようやく机から顔を上げた。やっぱり、お金の絡む話なだけに、いい加減な態度で聞くってわけにもいかないんだねえ」

で、寄付金担当の先輩、泣き笑いの表情を浮かべて……

「ま、まあ……その、なんとというか……」

帳簿を開いて、会長に今日の集計額を指し示す。

会長、指し示された集計額の金額をみて、目をパチパチさせた。

「なに、この数字！ 数え間違いでない？」

「いえ、ほら、金庫の中のお金を見てもらえれば……」

「うっ……すごい……」

今年の寄付金額、初日のそれも午前中だけだというのに、去年一年間で、集めた寄付金額を軽く超えてしまっていたらしい。去年一年間、観桜会だけでなく、文化祭や音楽会、その他、もろもろの行事での寄付金額すべて合計しても、この数字には届かない……

「な、なんてこと……今年は一体どうなってるのよ！」

寄付担当の先輩も、ただオロオロするだけだった。

ようやく、入力作業も終わり、寄付をしてくれた人のチェックも
終え、やっと今日の仕事は終了した。

ひとつ背伸びびして、肩の凝りをほぐす。って、私の場合、ほとん
ど入力してくれたのは、熊坂さん（妹）だったのだけど・・・・・・・・
いよいよ、自由時間だ！

さっそく、各会場に繰り出して、観桜会楽しんでくるぞ！

私たちは、着替えもそこそこに、連れ立って、校舎から外へ出て
行った。

あ、もちろん、熊坂さん（妹）は、本来なら、今日は一日中生徒
会室につめていなきゃいけなかったのだけど、会長にムリをいって、
私たちと一緒にきてきている。というか、多額のお金を目の当た
りにして、呆然としている会長の混乱に乗じて、許可をもらったの
だけど。

私たちは、まず、グラウンドの体育会系屋台村をのぞいた。

お好み焼き、焼きそば、おでん、学園祭の定番屋台。ただでなく、
観桜会にちなんで、桜もちだとか、桜湯なんてのも・・・・・・・・

塩漬けのピンク色のしわしわの物体に、熱いお湯をかけたら、開
いて膨らんで、さくらの花びらがコップの中に。ほのかに桜の甘い
香りも漂ってくるような・・・・・・・・

「素敵」

私たち、三人、同時に同じことを口にした。なんかそれが楽しく
て、自然と笑い声がこぼれた。華やかな、珠が転がるようになって形
容される笑い声三つ。行き交う人も、屋台の先輩たちも、なんだか
まぶしげに私たちを見ていた。特に私を・・・・・・・・

桜もちのパックを買って、3人で、道々かじりながら、ブラブラ
と歩く。

裏庭の舞台では、軽音楽部のギタリストと吹奏楽部のフルート奏

者が、静かだけど、華やかな春風のような曲を演奏していた。聴衆たちも聞きほれ、目を閉じている。イメージの中の春の野に、遊んでいるのだろうか……

やがて、演奏は終わり、観客の熱烈な拍手の中で、その二人は、アンコールの曲を始めた。春の女神が化身した色鮮やかな蝶が、あちらこちらと戯れ飛ぶ、幻想的だけど、どこかなつかしい曲。

素敵

それから、私たち3人は、いよいよ裏山の入り口へ。

裏山に近づくに連れて、琴の音色が聞こえてきて、いやがうえにも、上品で繊細な雰囲気をもし出している。

こんなパーカーとデニムのパンツなんて私服で見てもわるいではなくて、着物を着て、楚々と歩き回った方が、はるかに雰囲気に溶け込んで、よかったかもしれない……

実際、何人も着物を着て、裏山を散策している女性がいるのだし……

私、ちよつと後悔した。

あ、でも、私、着物って、自分では着れないんだった。夏に着る浴衣も、親戚の結婚式の時も、着物のときは、ママに着つけてもらってばかり……

ちよつとは、私も、着付け習った方がいいのかしら？

あと、4年もすれば、私も、成人式で、振袖着ちゃうのだし。着付けできるって、なんか格好よくない？

裏山の入り口、いつもは、生徒たちが勝手に裏山に上ったりしないように閉じられている門が、今日は目一杯開いている。

そこを生徒たちやOGたち、近所の人たちが自由に出入りしている。

私たちがその門へ近づいた頃、門の影から、突然、ボロボロの服を着た少年が現れた。

「おお、春の女神よ！ そなたは、美しく気高い！」

妙に甲高い声、わずかに盛り上がっている胸元、どう見ても女性。演劇部の野外劇だねえ」

「それに引き換え、私のこのなりといえば、お粗末という言葉ですら、豪華な飾り・・・・・・・・・・」

要するに、夢の中で出会った春の女神に恋した羊飼いの少年が、春たけなわの裏山を見上げて、春の女神が降臨してくるのをただひたすら願っている。

けれど、その羊飼いの少年には、彼に恋する幼馴染がいて、彼が夢中になっている春の女神に嫉妬し、村祭りのダンスに彼を誘い出して、女神のことを忘れさせようとする話みたい。

そういえば、近くにも同じように、つれない女神さまに恋してしまつた少年と、その少年に想いを寄せている少女がいたっけ。

できるだけ、さりげなく、なにげなく・・・・・・・・・・

「ねえ、委員長、なんで、島崎君だったの？」

「えっ、えっ、えっ！！！！」

委員長、しだいに耳まで赤くなっちゃって・・・・・・・・・・

さりげなく訊いたつもりだったけど、ちよつとストレートに訊きすぎちゃったかな？

「な、な、な、なんで・・・・・・・・・・」

「そりゃ、見てれば分かるし。結構、みんな気がついてるみたい

だよ。あ、でも、本人は、まだ気づいていないみたいだけど」

「そ、そんなあ〜」

委員長、もじもじしちゃって、かわいい。恥ずかしがって、私の質問の答え、なかなか口に出せないみたい。めがね巨乳好きなら、その姿だけでも、萌え萌えだね！

やがて、観念したのか、開き直ったしっっかりした声で、

「私ね、3つ年上のお兄ちゃんがいるの」

委員長が言うには、小さなときから、そのお兄ちゃんのこと大好きで、いつもその後について回って、遊んでもらっていたらしい。で、そのお兄ちゃんが小学校の頃からのめりこんで、夢中になっていたのが、サッカー。

残念ながら、お兄ちゃんには、さほどサッカーのセンスがなくて、高校時代はサッカー部をあきらめ、別の部活に入っていた。でも、お兄ちゃんもつとも輝いていたのは、サッカーをしていたとき。だから、今年入った大学で、もう一度、サッカーを始めてほしいってというのが、この春の委員長の願いだった。

「で、そんな風にお兄ちゃんのことを考えて、学校のグラウンド見ていたら、一人お兄ちゃんみたいにボールを蹴るのが楽しくて、楽しくて、仕方がないっていう風な男の子がいたの。もちろん、お兄ちゃんよりもずっと上手だし、スピードもあって、格好よかったのだけど……………」

それが、島崎君。委員長、そう言って、小さく笑った。

「そっかあ。大好きなお兄ちゃんと島崎君がダブって見えちゃったんだね」

うん……………小さく頭が動くのが見えた。

そっか……………

ブラコンが発端だったわけか。私には、お兄ちゃんも弟も、姉妹さえもないけど、どんな感じなんだろう？ 兄弟がいるって……………

学君をもっと身近にしたような存在なのかな？

学校だけでなく、いつでも、家の中でも一緒にいる学君。うっ、なんか、うっとうしいかも。

でも、委員長を見ていると、ちょっとうらやましくも、寂しくも感じた。

そうこうするうちに、入り口の門周辺の野外劇、村祭りのシーン。管理棟から聞こえてきていた琴や横笛の調べが、ワルツの3拍子にかわり、質素な身なりの村人や村娘が8人ほど登場して、踊り始めた。

やがて、少女に手を取られ、強引に踊りの輪の中へ連れ込まれた少年。最初のうちは、少年もいやいや踊っていたのだけど、しだいに、少女と踊ることが楽しくなったのか、軽やかに笑いながらステップを踏む。

華麗なステップ、鮮やかなターン！

観衆を魅了するすばらしい踊りだった。

そして、気がつけば、村人たちは退場し、少年と少女だけが取り残されていた。少年と少女は踊りをやめ、しっかりと抱き合い、お互いの目の中を見つめあい……

「ボクは、今、本当の女神を、この手で抱いている気がする……」

「いいえ、ちがうわ。私は私。あなたの女神さまなんかではないわ」「ああ、知っている。君はボクのただひとり友達だから。ボクが、心の底から愛している、たった一人の……」

「たった一人の……？」
ピタリと当てはまる言葉を捜しているかのようなすこしの間があり。

「……君なのさ」

そうして、二人は、唇を重ねた。

コレが入り口脇の野外劇の大団円のようだ。本当なら、ここで舞台の上から幕が下り、幕引きになるんだろうけど、今はなにもない

野外劇。幕なんてない。でも、観衆たちの満足のため息とあたたかい拍手がこの二人の若い俳優を包んだ。

でも、しかし、結局、夢の中の女神に血迷った少年を、自分自身の魅力を最大限に使って少女が正気づかせただけの話。この程度で、恋から覚める少年つてもねえ！

実際に、こんな少年がいたら、幻滅しちゃうかも。

やがて、音楽がまたワルツの調べにもどり、主役の少年と少女たちが踊り始めた。

劇の中の華麗な踊りではなく、もつと大人しく、優雅な踊り。先ほど退場していった村人たちも再び登場して、踊りだした。

エンディングのダンス。

と、観衆の中から、初老の男性がその妻らしき女性を誘い。その場でダンスをはじめ。日ごろの練習に裏打ちされた、本当に絵になるダンス……

きっと、普段から、趣味で社交ダンスをたしなんでいるのだろうなあ！

素敵な、素敵な老夫婦……

私の周りにいたカップルたちから、いいな、私たちも、いつかあんな風になれるといいね。なんて、甘いささやきがあっちからも、こっちからも……

私も、いつか、旦那さまになる人と、清貴さんと……

「あゝ、なに、なに？　つかさちゃん、なに想像してたの？　真っ赤だよ！」

私の素敵な将来の夢に土足で入り込んできたのは、いつものマイペース娘。

「ああ！　わかった！　つかさちゃん、あの先輩みたいに男装したら、すごく格好よくなるよ！　学校中の男子のだれよりも、絶対、絶対カッコいいんだから！　みんなキヤーキヤー言っつて、ファンクラブがすぐにできちゃうかも。でも、そのときは、私がファンクラ

ブの会員第一号だからね」
とウインク。

ちよつと私が考えていたこととは違うのだけど……..
ま、まあ、私が男装したりなんかしたら、すごく様に……..
つて、ならないつて、どうせ、男装させるなら、ありさちゃんとか、ありさちゃんとか、ありさちゃんとか、ありさちゃんとか……..
背が高くて、ほっそりしてて、それでいて、動きがシャープ。きびきびしてて、格好いいんだもん！

私には、ボーイッシュな感じより、コケティッシュな、小悪魔的な、魅惑的な、女オンナした感じの方が、はるかに似合うと思うんだけど……..?

だって、美の女神つかさちゃんだもん！

ともあれ、老夫婦に釣られて、何組かのカップルもあちこちで踊りだした。

そういう状況になると調子に乗っちゃうのよねえ。マイペース娘つて。

「ね？　つかさちゃん、私たちも！」

「え、ち、ちよつと、ちよつと！」

「はい、ずんちゃつちやつ、ずんちゃつちやつ」

「え、もう、1、2、3。1、2、3」

私たちも、老夫婦の見よう見まねで踊りだす。私と熊坂さん（妹）、どちらがリードするわけでもなく、リードされるわけでもなく。

ムチャクチャに、そして、クルクルと……..

しまいには、両手をつなぎ、腕を伸ばして、お互いにお互いを振り回し、振り回され……..

「きゃははは、目、目がまわっちゃう」

「きゃあ〜ん、ふふふ」

近くの人には、ちよつと迷惑だったかな。でも、すごく楽しい。

こんなに思いつきり踊ったのつて、体を動かしたの、いつ以来かしら。すごく楽しかった。

• けど、子供っぽすぎるのが、すこしだけ残念なのだけど……

それから、私たち、そのまま手をつなぎ、裏山を登り始めた。

登山道の両脇に植えられた八重桜は、ピンク色の雲を視界いっぱいに広げ、かすかな風に吹かれて、甘い香りをあたりに撒き散らしている。

下のほうから聞こえる琴や横笛の音色が、優美でたゆたうような雰囲気をかもし出している。

このピンク色の世界の中で、横になり、お昼寝をすれば、天の国へ昇ったかのような、最高のくつろぎとやすらぎを与えてくれそう。裏山といっても、高さは100メートルあるかどうかぐらい。学校自体が丘の上に建っているから、麓の町からの標高差で、200メートルちょいぐらいになるのかな？

学校の敷地自体は、もともとさくらヶ丘女子高校の運営財団の所有地だったけど、この学校に隣接する裏山は、さくらヶ丘女子の創始者一族の私有地。だから、今年の春の経営危機のときには、この裏山売りに出されることもなく、依然と同じように、管理されているのだねえ。

だからこそ、さくらヶ丘女子の生徒会主催で行われる観桜会が、今年も支障なく開けるってわけだ。

私たちは、中腹にある池まで来た。

池といっても、水溜りみたいなものだし、今は干上がって、底に敷き詰められている小石が転がっているのが見えるだけ。梅雨時になり、雨が降ったときに、ようやく池らしい姿を見せる。

この池の周りでは、文芸部が自作の詩の朗読会を開いているはずなのだけど・・・・・・・・・・

まだ、時間がちょっと早いのか、だれもない。

「だれもないね？」

「うん、まだ、ちょっと早いみたいね」

委員長が、手元のパンフレットと携帯の時間表示を見比べて言う。

「ね、ちよつと寄り道して、あつちの東屋へいつてみようか？」

「たしか、なにか作品を展示してあるんだっけ？」

「そうだよ。同じクラスの美術部の子の作品もあるって、言ったた」

「同じクラス？ まだ、入学して、一週間ちよつとなのに？」

「うん」

一年生のそれも入学間なしなのに、もう先輩たちの作品と一緒に展示されるなんて……

な、なんか、すごい作品がみられそう！

東屋の横、テントが設営しており、何人かの女生徒たちが休息を取っている。

早速、その中に、友人の顔を発見したのか、熊坂さん、テントの中へ飛び込んで行っちゃった。

私たちも、その後をついていくかどうか迷ったけど、まずは、目的の東屋の中をのぞいてみることにした。

東屋は、壁が山側にしかなく、後の三方は3本の柱があるだけの吹きさらし……

中のベンチに腰掛ければ、目の前の桜の雲海越しに、私たちの町が一望できる。高い建物がない、静かに眠っているかのような町。四方を山に囲まれた盆地で、夏は極端に暑く、冬は極度に寒い。

でも、今日は視界の縁を彩って、ピンク色の雲が漂っている。まるで、幻想の町。いまにも、あちらの扉から、こちらの扉から、妖精たちが飛び出してきそうな……

「素敵」

今日何回目だろう。私や委員長の口から、この言葉が飛び出したのは……

そして、反対側、中央のテーブルの上には、手芸部の作品が。こよりを編み、ニスで固めたカゴや、毛糸を編んだ人形。造花の桜を

肩にしているのは、粘土細工の少女。

なかなか手が込んでいて、力作ぞろい。

「かわいい〜」

山側の壁やベンチの上に置かれているのは、桜の絵。おそらく、去年、この桜が満開になった頃、観桜会の後で、スケッチし、描き上げた作品の数々。油絵や水彩画、さまざまな技法を凝らした桜の絵が華やかさを競っている。

現実の桜もきれいだけど、これらの絵の中の桜も、美しく気高い。

「あれ？ このベンチの上の小さな作品、駅の向こうの学校の桜じゃないのかな？」

「え？ どれどれ？」

駅の向こうの学校といたら、私が通っていた中学校だ。校庭の隅に、大きな桜の木が一本だけ植わっていて、卒業式に雨のように花びらを散らしていたっけ。

卒業式で感極まった女の子たちが、涙で濡れた頬に、桜の花びらをつけて、卒業写真におさまっていたんだよねえ。ありさちゃんも私も……

そう、確かに、こんなシルエットの桜だった。

満開の桜、遠景に校庭でキャッチボールをしている少年たちの姿。私が学んでいた校舎が描きこまれている。

「これ、私が通っていた中学校だよ！」

「へえ〜 この中学校、いつも駅から見えるし、大きな桜があるから、すぐわかるね」

「うん。この桜、学校ができる前からここにあるんだってえ 先生 言ってた」

「歴史のある桜なんだあ〜」

「明治時代に、伊藤博文が来たときに記念に植えていったんだって「すごい。そんなに昔からあるんだあ〜」

「うん。すごいでしょう。うふふ」

「私、いつも電車の中から、この桜、葉っぱしか見たことなかった

から、花咲いているときつて、どんなだろつって、いつも想像して
たんだ」

「あ、そうか、今、葉桜だもんね」

「うん」

「じゃ、こんど、私の卒業式の日の写真見せてあげるよ。ちよつど、
卒業式の日、満開だったし、最後の集合写真、その桜の下で撮っ
たから、満開に咲いてる姿が見れるよ」

委員長、胸の前で両手を組んで、心の底からうれしそうに……

・

「え、ほんと。うれしい〜 ぜひ、ぜひ見せてね」

「うん、了解！」

ピトツと眉毛に人差し指と中指を当てて、敬礼をひとつ。了解の
合図。

と、その途端、東屋の入り口に熊坂さん。

「なに、なに、なに？ なに二人で話してたの？」

含み笑いの私と委員長、そろって、

『ナイシヨ！』

「ええ〜 ずるーい！」

私たちは、ようやく頂上まで上り詰めた。

つて、大して上ったわけでもないの、特に疲れたりなんかしな
かったけど。

頂上では、毛氈の敷かれた台が何台か置かれ、赤い大きな和傘が
日よけ代わりに、立てかけられている。

すこし離れたところでは、茶釜が炊かれ、きれいな着物を着た上
級生が、お手前を披露している。

とても優雅でしつとりと落ち着いた美しい眺め。

台のひとつに腰掛け、その仕草を眺めていると、着物にタスキ掛
けた女生徒が、先ほどの上級生から大きなお茶碗を3つ受け取り、
私たちの元へ運んできてくれた。

「えっ、えっ、えっ!？」

もちろん、私、お茶のお作法なんて、知らないよ!

「私、お作法つて知らないんだけど……」

「私も……」

って、こういったときに、もっとも頼りになるはずの委員長が……

……

ひよいと、反対側をみると、マイペース娘、ずずずとお茶を飲んでるし……

あわてて、ひじをつつき、小声でたずねてみる。

「熊坂さん、お作法知ってるの?」

「えっ? お作法? 知ってるも何も、こんなときは、作法なんて気にせず、美味しく飲めばいいんだよ。それがお作法!」

「えっと……そ、そういうものの……?」

「そう、そういうもの」

妙に自信たつぷりに言ってくれるし……

迷ったけど、思い切って、私も飲んでみた。

決して、美味しいってものでは…… 苦いし、渋いし、

なんだか生臭いような気もする。

それでもさすがお茶。なんだか、気分がすーっと落ち着く……

……

お茶つて、結構いいものかも。

隣では、私と熊坂さんの真似をして、委員長もずずずー。

私たち3人の中で、一番大きな音のずずずだった。

ぷっ

山は上りよりも、下りの方がラクだけど、でも、下りの方がケガをしやすい・・・・・・・・・・

斜面に足を乗せると、つま先が平地のときよりも下に位置し、足の甲が伸びる。さらに、重力の影響で、普段よりも強く足を踏み出すことになる。

よくよく気をつけないと、滑って、普段使わないような腱をいため、歩けなくなってしまう。

そう、最初に、すべってしまったのは、熊坂さんだった。

中腹の池のほとりにまでもどってきたころ、桜の根っこに足を滑らせ、転びそうになった。たまたま、私が隣を歩いていたので、慌てて、体を支え、転ばないようにすることができたのだけ。

でも、次にすべったのは、私。

もうちょっとで、裏山の入り口っていうところ、私、小石で足を滑らせてしまった。

熊坂さんも委員長も、私の後ろで、並んで、足元を気にし、気にし、慎重に下りていた。私も、同じように降りていたはずなのだけど・・・・・・・・・・

足を乗せた小石が急にガラガラと崩れ落ち、私の足が支えを失って、滑っていく。

「きゃっ!!」

私、転んじやった。デニムのパンツだったから、擦り傷とか作らなくて済んだけど、スカートとかはいていたら、血まみれの足になっていたかも・・・・・・・・・・

「つかさちゃん、大丈夫？」

熊坂さんと委員長慌てて駆け寄ってきてくれる。そして、手を伸ばして、助けおこそうと・・・・・・・・・・

「つつ!?! いたっ!」

「どっか、怪我した？ 痛い？ 大丈夫？」

「うん、ちよつとひねっちゃったみたい」

私、どうにか立ちあがったけど、すぐに痛さで、しゃがみこんじやう。

「大丈夫？ 立てる？」

「私、誰か呼んでくる。ひかりんはつかさちゃんのそばにいてあげて」

委員長はさすが頼りになる。そういつて、一人で駆けていこうとしました。

でも、すぐに、その委員長を呼び止めた人影がひとつ。

「やあ、委員長！」

「あ、佐野くん、ちようどよかった。友達が怪我したみたいなの。

歩けなさそうだから、保健室まで連れて行くの手伝ってくれない？」

「ああ、いいよ。そういうことらしいから、中川、悪いな」

桜の木の向こう側から、ああとかいう返事が聞こえた気がするけど。

中川………？

こんなところで、中川君に会ったりしたら、また、どんなことになるか………

来てくれるのは佐野君だけだといいな！

私の願いはどうやら聞き届けられたみたい。

程なく、委員長に連れられて、佐野君が登場した。

「あ、これは軽い捻挫だな？ そういえば今日は保健の先生は、いないはずだから、だれか付き添って、一旦家へ帰って、家族の人と一緒に病院へ行った方がいいかもな」

佐野君、私の足をつかんで、グリグリ動かして、症状を確かめた。そのたびに、強烈な痛みが私の体を突き抜ける。

この人、わざと、私に痛い思いをさせてるのじゃないの！

かなり恨みがましい視線を佐野君に向けたのだけど、それに全然

気づいてくれないし……

ようやく、佐野君、私の足を放してくれたと思ったら、私に背を向けて、しゃがみこんだ。

「ほら、おんぶしてやる」

えっ！ えっ！ ええっ！

「い、いいよ。自分で歩いていく」

「自分で立てもしないくせに、どうやって歩いていくんだよ！ ほれ、早く乗りな！」

「えっ！ でも……」

「オレの背中がいやなら、なんなら、中川を呼んできてやってもいいんだぞ！」

そ、それは、絶対にヤダ！

私が動けないって知ったら、何をしてくれてくれることが……

・

私、しかたなく、おずおずと佐野君の首に腕を回した。そして、体をその背中に預けた。

大きな背中だった。あつたかくて、大きな背中。

そういえば、私がこんな風に大きな背中におんぶしてもらったのって、いつ以来だろう？

小学校のとき、かみそりの刃で血だらけの足になった私をおんぶしてくれたのは、学君だったっけ。

「ほらっ！ もっと腕に力入れて、ずりおちるぞ！」

「う、うん……」

なんだか、頬が熱いような気がする。

でも、そのとき、佐野君。

「お前、結構、胸あるんだな」

「ば、ばかっ……！」

私、中川君に顔を見られないように、佐野君の首筋に顔を伏せ、裏山の入り口の門を通り過ぎた。

佐野君、ご丁寧にも、中川君にちょっと行ってくるわとかなんとか、挨拶していたけど、中川君の方は、全然私には気づいていなかったみたい。C組の女の子とおしゃべりしてた。

まあ、パーカーとデニムのパンツなんて、あまり気の利いた女の子のするような格好じゃないし……

私のイメージにぴったりなのは、ふりふりワンピースとかかな？

もちろん、キライじゃないけど、やっぱり、こういう格好の方が、ラクっていうか、気を使わなくて、いい。

佐野君、私をおんぶしたまま、最短コースで校門前へ、校庭を通り抜け、途中、何人か、私に気づいた子がいたみたい。

熊坂さんと委員長は、会長に、私が怪我したことを報告しに生徒会室へもどり、委員長が私の荷物を取って、追いかけてくれるはず。私は佐野君の背中に必死にしがみついて、校門から桜並木の道を下り始めた。

普段よりも、すこし目線が高い位置からの桜並木。

ハラハラと散って、私たちの頭に降りかかり、降り積もる。佐野君の頭の天辺に桜の花びらが張り付いているのが、なんだか間抜けな眺め。足の痛みがあったけど、ふっと息を吹きかけて、飛ばそうとしてみた。でも、うまくいかなかった。髪の毛に引っかかって、桜の花びらは佐野君の頭にくっついたままだった。

「なに遊んでるんだ！」

「あ、ごめん。桜の花びらが、頭に……」

「ああ、知ってるよ。さつきから、額とかに、張り付いてきてるか」

えっ？

よく見たら、佐野君、顔中汗だらけ……

汗で桜の花びらが張り付いている。

「お前、結構重いな！」

「な、な、なっ……」

なんですってえ!!!

「わっ、ばか！ 暴れるな！ 落ちるだろうが！」
ほんと佐野君って、ヤなヤツ！

委員長は、歩道橋の前で私たちに追いつき、そのまま三人で、私の家へ向かった。

家の前では、予め電話で連絡が行っていたので、すでに車の用意がしてあり、私が着いた途端、車に乗せられ、病院へ直行した。だけど、その車を運転してるパパどうしちゃったのだろうか？

なんだか、機嫌わるい！

それに、家にたどりついたとき、裏山から、家までずっと私をおんぶしてくれた佐野君を、にらんでいたし……

かなり、いけ好かないヤツだとはいえ、汗まみれになり、大変なおもいをしてまで、私を家まで連れ帰ってきてくれた今回の功労者だというのに、ありがとぐらい声をかけてあげればいいのに……

まるで、親の敵かなにかみたいにならんじやって、ヘンなの！

病院で見てもらうと、私の足、軽い捻挫だった。

腫れはひどいけど、骨に異常がないし、足の腱を伸ばしちゃっただけで、とくにひどいものではないみたい。

大体、10日ほど、足首を固定していれば、完治するだろうという見立てだった。

おかげで、私、足首をがちり固定されて、包帯でグルグルと大げさに巻かれちゃった。こんなんじや、靴はもちろん靴下も、履けないし、松葉杖なしじゃ、一人で移動すらできない。

明日も、受付しなきゃいけないのに……

私は、病院から、会長の携帯に電話して、事情を説明しておいた。いくらなんでも、こんな怪我人に明日の受付が務まるわけないのだし、会長の方で、適当にやりくりしてくれるだろうな。きっと。

その日は、早めに休むことにした。

眠る以外、
することもなかったし・・・

次の日の日曜日、朝早く、私、パパに車で送ってもらって、学校へ。

今日、学校へ出ても、こんな足じゃ受付なんてできないし、役に立たないけど、とりあえず、挨拶程度に、生徒会室へ顔を出しておいた方がいいだろう。

昨日、私が怪我した姿を直接見たのは、委員長と熊坂さん（妹）、それに佐野君ぐらい。あとは、ほとんど私のことを知らない人ばかり。。。。。

直接、会長が私の怪我した姿を見たわけでないから、いくら携帯に連絡しておいたといっても、私の怪我がどの程度のものかまでは、きちんと分かっていないはず。

もしかしたら、私が今日ズル休みをするために、大げさに騒いでいるなんて、考えているかも。それは考え過ぎだって、もちろん分かっている。でも、そういう誤解を発端に、悪感情が醸成され、大きく育ち、私を嫌うようになって。。。。。

どぶ川に浮かぶ私の服、血だらけの足、鈍く光る画鋏の針先。。。。

ブルツ。。。。。

ママやパパは止めたけど、やっぱり会長と直接会っておかなくちゃ！

私、まだ、開門前の静かな校舎の中を、松葉杖をつきながら、生徒会室へと歩いていった。

「おはようございます」

生徒会室のドアをノックして、開ける。

中にいたのは、会長と大崎先輩だけ。後の生徒たちは、もうそれぞれの持ち場へ出払っていった後みたい。

会長と大崎先輩、書類をのぞき込んで、なにか話し合っていたけ

ど、私が中へ入ると、顔を上げて、びつくりしたような表情。そして、心配そうな声で、

「おう！ 神宮寺、足大丈夫か？」

「はい、なんとか……………でも、まだ、ちょっと痛みますけど……………」

ちらりと、私のグルグルに包帯が巻かれた足元を確認。

「ムリするな！ 今日、ゆっくり休んでよ」

「はい、ありがとうございます」

「その足じゃ、受付はムリだろうし、今日は光を代わりに受付へ行かせたから、こっちは気にしなくてもいいぞ！」

要するに、そんな足じゃ役に立たないから、とっとと帰って休めって言いたいんだらうなあ

「は、はあ」

でも、こんな風に足を痛めるなんて、まして、松葉杖について歩くなんて、生まれてはじめての経験、そんな風に言外に追い出そうとされても、実は疲れてて、一旦休憩しないことには……………とりあえず、一番手近にあった椅子に腰を下ろした。

今日は、このまま帰るにしても、体力を回復させてからでなければ……………」

「フウ」

私のため息に、ちらりと会長と大崎先輩が、私の方を見る。

まだいたのかって、視線だね。あれは……………」

「でも、松葉杖って、結構疲れるものなんですね？」

「ああ、私も中学時代、体育の授業で怪我したことあって、1週間ほど、松葉杖の生活したことがあったけど、あれは辛かった」

「家から車で送ってもらって、裏門から、ここまで歩いただけで、すごく疲れちゃいました」

「うん、慣れないと大変だよな。大崎、これでいいんじゃないか？」

「はい、じゃ、これで印刷にまわしておきます」

「あい、たのむわ」

そのまま、大崎先輩、部屋をでてどこかへ行っちゃった。

その後姿を見送り、手近にあったポットとお茶のお盆を手繰り寄せ、二つの湯呑みにお茶をいれた。ひとつは、少し苦勞しながらも、会長の机の上へ。

「お、サンキュー」

もうひとつは私のために……

そういえば、昨日の委員長、大きな音を立てて、お茶をすすっちゃって。

クスツ。

「ん？ 神宮寺、思い出し笑いか？」

「え？ あ、はい。ちよつと、昨日のこと、思い出しちゃって……

……」

「そつか……」

そういえば、この人は、会長だということで、ずっとこの生徒会室につめていたけど、昨日は、私たちがみたいにあちこち見てまわって、観桜会を楽しんだのかなあ？

会長として、ここに詰めているばかりで、ちつとも楽しんでいないのじゃ？

律儀というか、職務に忠実というか、そういうのは、よいことなのだろうけど、このイベントはそもそも、みんなでさくらヶ丘名物の満開の八重桜を観て回ろう、花見を楽しもうって企画のはず。

いくら職務とはいえ、この人自身が、ちつとも楽しまない、楽しめないのじゃ、まったく意味がないような気がするのだけど……

「会長？ 会長は昨日、裏山の桜見てきました？」

「うん？ いや、行ってない」

「ええ！？ そうなんですかあゝ！ 裏山から眺めると、ピンクの雲に乗って、フワフワ浮き上がっているみたいで、すごく素敵なん

ですよ！ それに、演劇部の劇とか結構面白かったし、東屋の美術部や手芸部の作品も、とてもかわいくて、素敵だったんですよ！ 会長も、観桜会、終わるまでに、一度観にいかれた方がいいとおもいますよ！」

「ああ、機会があればな……」

会長、言葉とは裏腹に、興味がないのか、顔の横で手を払うみに振った。

まあ、本人が興味ないみたいだし、強いて、観て来い！ なんて、命令するつもりはないけど、でも、なんかなあ」

それで、本当にいいの？

本当に、満足なの？

「ぜひ、一度、観にいつてみてくださいね？」

伝統を守る！ 2

ほどなく、開門時間がやってきた。

やがてグラウンドの体育会の屋台から、客引きの声が遠く聞こえてきた。

二日目の今日も、盛況みたい。

お茶も飲み終え、脚の疲れもだいぶ取れてきたので、そろそろ帰ろうと立ち上がったとき、ドアを軽くノックする人がいた。

「はい、どうぞ」

「おす！ 瞳、元気か？」

背の高い、髪の毛長い年上の女性。大学生かな？

会長、目を大きく開いて、信じられないっていうように、入ってきた人を見る。

「か、会長！」

熊坂会長が、会長と呼びかけるってことは……

そう、熊坂会長の前任者、去年の生徒会長、ってことは、さくらヶ丘女子高校の最後の正統な生徒会長・梅田美樹だった。

「今年は、すごく人出が多いな！」

「は、はい。昨日も今日も快晴だったので……」

「それだけじゃ、ないみたいだけど……」

梅田前会長の視線が、戸口の近くで立っている私に向いた。

「あ、彼女、今年の新入生の神宮寺さんです」

「神宮寺つかさです。よろしくお願いします」

「ああ、よろしく。梅田です」

私を値踏みするように、じろじろ見ている。ちよっと居心地が悪い。

「昨日、あなた受付をしてた？」

「え？ あっ、はい。午前中だけ」

私の答えを聞いて、ひとり納得の様子の梅田前会長。

なんなのだろう？ なに、一人で合点がいったって感じで、含み笑いをしているのだろう？

「なあ、瞳？ 今日の観桜会、ゲストの間で流れてる噂って知ってるか？」

えっと？ ん？ 噂ってナニ？ どんな噂だろう？

「受付の女の子の中に、昨日は、とてつもない美人がいたんだってさ」

そういつて、自分の携帯を開いて、メールを見せてくれた。

「昨日来た写メ。ほら」

その写メに写っていたのは……

「え！？ 私！」

「そ、この写メ、昨日来た連中から、広まってさ、今、美人の噂でもちきりみただったゾ！」

「……」

「近所の男どもだけでなく、卒業生の知り合いとか、今日はみんなこの写メみて、美人目当てに大勢来てるみたいだ」

えっと……

「今のうちに、手を打っておかないとき、危ないかもよ」

そこへ転がり込むようにして飛び込んできたのは、受付にいるはずの熊坂さん（妹）。

「おねえちゃん、大変！ 今、受付のところで、ゲストさんたち、騒ぎ出して、大混乱だよ！ 昨日の写メの美人を出せて！」

「……」

そういえば、遠くで、『出せ！ 出せ！』の大合唱がきこえる……

……

「ったく！ 今年は、いつたいなんだっての！」

伝統を守る！ 3

結局、それから私たち4人、校門前まで急ぐハメになっちゃった。熊坂会長を先頭に、梅田前会長、熊坂さん（妹）の肩を借りながら、私が校舎の中を駆けていく。

でも、こんな足じゃ、そんなに早く走れない。

見る見る私たち、会長たちに置いていかれちゃった。

私が高んとか校門脇の受付まで到着したときには、すでに、熊坂会長、受付の長机に乗り、ハンドスピーカー片手に、がなりたてていた。

『みなさん、お静かに！ ここは、さくらヶ丘女子高校の敷地内です。これ以上、騒動をつづけられる場合には、強制的に退去していただきます！』

でも、暴徒寸前の男たちには、その程度の怒鳴り声なんか、耳に入らないみたいで、相変わらず、『昨日の美人を出せ！ 美人を出せ！』なんて、口々に……

熊坂会長、さらに金切り声を振り上げて！

『ちよつと、みなさん、聞いて！ 騒がないでください！ 近隣の迷惑です。静かにしてください！』

でも、まったく効果はなかった。

「ったく！ なんだったの！」

見事に、男どもを抑えるのに失敗した熊坂会長。

それから、力なく、『騒がないでください！』とか『静かにしてください！』とか言っていたけど、まったく効果なし。

でも突然、熊坂会長の隣で、長机に上った者がいた。その人、会長から、無理やりハンドスピーカーを取り上げると、大きく息をすって……

『しゃらっつっつぷっつ！！！』

耳がキンキンする！！！！

一瞬で、その場が静まり返った。全員が、その大声を上げた人物を見た。

神宮寺高校生徒会会長、今野翔吾だった。そう、昨日、熊坂会長に無視され、開会の挨拶をすることができなかった、あのかわいそうな生徒会長だった。

『みなさん、ここは神宮寺高校の施設内です。教育施設内ですので、騒がず、お静かにお願いいたします』

落ち着いた、染み渡るような声だった。

仕事が終わったという感じで、スピーカーを熊坂会長へ渡し、自分分はさっさと長机から下りる。

熊坂会長、顔を上気させ、唇を強くかんでいる。必死で、自分を抑えている。

目まで血走らせて、ちょっと怖いよ……

と、今野会長が去っていくのをあつけにとられて見ていた何人かの男性の目が、隅に立っている私を見ているのに、気がついた。

あ、見られてる……

つつい、私、いつもの……エンジェルスマイル。

とたん、何人かの男性の目がハート型になった気がした。そして、その周りでは、私を指差し、まだ気がついていない隣の男の袖を引く。

しずかな、驚きの声が、その場所から周囲へ広がっていった。

その場にいた全員の視線が、私に集まるのに、時間は必要なかった。

そして、私……

いやん！ そんなに見つめないで！ はずかしい！

手を軽く握り、口の前へ持って行って、視線を右斜め下45度へ……

計算しつくしたタイミングで、ときどきチラリと男たちを眺めてみせる。

可憐な恥ずかしがり屋さんのポーズ。

そう、これでまとめて、男たちはいちころのはず！

その上で、さらに、そよ風なんか吹いて、私の髪を軽くそよがせたりなんかしたら・・・

って、すごいタイミング。私の思っていたとおりの風が、桜の花びらを舞い散らせながら吹き抜けた。

声にならないどよめき。

それが、その場を支配した唯一のモノだった。

伝統を守る！ 4

その後、梅田前会長が取り仕切って、その場を収めてくれた。

『お静かにお願いします』 『順番に整列して、受付をお済ましねがいます』 『当校生徒へ向けての写真撮影はご遠慮もうしあげます』

『ソコ！ 撮るなって言っただろが、このボケ！』

さっきとは違って、男たち、すっかり毒気を抜かれたみたいな表情で、私たちの指示に素直に従ってくれていた。もうこうなったら、大人しいものだ。

あとは熊坂さん（妹）や委員長たちだけで十分対処できる。私たちは、もう一度、生徒会室へもどっていった。

「……………」

熊坂会長はさっきから、むっつりと黙ったままだった。額の血管を浮き上がらせ、顔を真っ赤にして……………

私は、慣れない松葉杖について、生徒会室と校門を往復したのでグツタリ座りこんでいる……………

ただ一人、元気なようすの梅田前会長は、離れたところで座り、頬杖について、そんな私たちを面白そうに眺めていた。

やがて、梅田前会長。

「ねえ、神宮寺さん？ その足どうしたの？」

「え？ あ、はい、昨日、裏山から降りる途中で、足を踏み外しちやって……………」

「捻挫？」

「そうです。お医者さんは、10日間ぐらいで治るだろうって」

「そう、お大事にね」

「はい」

「しかし、あなたすごいわね。さっきのあれ」

「え？ な、なんですか……………」

「あのポーズひとつで、さっきの集団を大人しくさせちゃって」

「そ、そうですね？」

ちよつと分かっていないかのようなフリ。天然ぶりっ子つかさちやん出現。ここで、彼女が指摘しているポーズとは、何のことか分かっていないかのように振舞うと、いやらしくなっちゃう。嘘でも、ぶりっ子して見せなくちゃ。

「あんなの初めてみたよ。すごいなあ、神宮寺さん！」

「えっ、えっ、えっ！！ ええっくっ！！」

我ながら、かなりわざとらしい。照れたように、髪を掻いたり・

そんな私の態度をどうみたのか、梅田前会長、にこりと微笑みかけてくれた。

「ほんと、すごいわ……」

「瞳、いつまで隅でふてくされてるの！」

梅田前会長、私に微笑みかけた後、今度は一転して厳しい顔。去年までの生徒会長の顔って、こうだったのだろうな。

「なに気に入らないか知らないけど、いい加減にきなさい！」

「……」
「いい、あんなのだれにだってあることよ。気にしないの！」

一転、あやすかのような口調。

「なんていったって、私たちは女の子なんだし、あんな風にいきり立っている男たちを黙らせる、大人しくさせるなんて、土台ムリな話なのよ。それだけの腕力がないし、迫力ある大声も出せないんだから……」

「……」
「だから、私たちは、ああいう場合、だれか頼りになりそうな男を呼んでくるしかないの！ それがムリなら、鍋でも叩いて、注意をひきつけるしかないのよ」

熊坂会長さらにきつく唇をかんじやった。あの場面で無力だったのが、よっぽど悔しかったんだねえ。

「でも、あそこで登場してくれた男の子、天の助けだったと思うわ。頼りになったし、適切な行動をとってくれたわ」

あらら、これって、わざとかな？　なんか、神宮寺の今野生徒会長をほめて、追い討ちをかけちゃってるよ……

「ああいう男の子ができて、自分から率先して、手助けしてくれるって言うのは、瞳に人望があるからなのよ。そうでなければ、だれがあんな場面で手助けなんてしてくれるもんですか。世の中の人たちは、自分に関係のないことなら、みんな遠巻きにして、面白がって観ているばかりなのよ。瞳、もつと自分に自信を持ちなさい。もつとしゃんとしなさい！」

「……」
「アンタは、立派にやったのよ。大丈夫。あれでよかったの。瞳は正しいことをしたの。私がそういうのだから、間違いないの。大丈夫、私を信じなさい！」

どんと芝居がかって、自分の胸をたたいた。たしかに、頼もしい大きさの大人の胸……

「……」でも、私はあの時、何もできなかった……
熊坂会長、涙声だよ。いつものいやらしいほど自信満々な様子の影も形もない。

悄然としちゃって、目の端に涙を浮かべちゃって……
「私、なんにもできなかった。早く混乱を収めなきゃ、みんなを落ち着かせなきゃって思って、焦って、焦って……」

それでも、何もできなかった……
「そりゃ、仕方ないよ。私たちは非力な女の子だから……」

「でも、でも、だからって、アイツは、今野は、たつた一言叫んだだけで、できたんだよ！　なんで、なんで、アイツにできて、私にできないの！　アイツは、おバカ神宮寺の人間で、私はさく女の生徒会長なのよ！」

「だ・か・ら、女の私たちには、最初からムリなの！　あの男の子

は女じゃなかったから、あんなことができたの！」

「なんで、なんで、あのおバカが、私たちにできないことできるのよ！ さく女の方が、頭のできも人間のできも完全に上なんだから！ 絶対、おかしい！ ありえない！」

梅田前会長、思わずため息ひとつ。

「はあ〜 ちよつと人より勉強ができるからって、なんでもできるような気になっているのは、よいことではないわ」

「な、なんで、あそこでアイツなのよ！ よりによって、なんでアイツの力を借りなきゃいけないのよ！ さく女の伝統は、この私が守るってきめたのに、なんで、なんで、神宮寺に助けられなきゃいけないのよ！ しかも、観桜会っていうさく女の今年最初のイベントで…」

伝統を守る！ 5

「瞳・・・・・・・・アンタは、よくがんばったわ」

「でも、力を抜きなさい。さく女の伝統を一人で守ろうなんて、力
んでないで、深呼吸でもしてみなさい！」

「・・・・・・・・」

熊坂会長、さっきの言葉から、かたくなに黙り込んでいる。

「つたく、もう！ で、瞳、あなたのいう、さく女の伝統って何？」

「・・・・・・・・」

「もしかして、私たちがこれまで続けてきたことを、これからも続
けようっていうわけじゃないでしょうね？」

熊坂会長の頭がこくりと揺れた。

それをみて、梅田前会長が盛大にため息。

はあ〜

「だったら、そんなこと、やめときなさい！ 悪いこと言わないか

ら」

熊坂会長、キツと目を上げた。

「だって、あなたたちは、さく女の生徒ではもうないのよ。そんな
制服着ているけど、神宮寺の生徒なの」

「それは、神宮寺が勝手に、さく女を乗っ取ったからで、私たちは
認めていないわ！」

「それが違うことぐらい、あなたも分かっているんでしょ？ 瞳」

そう、さきの世界金融危機で、運営財団が破綻して、神宮寺に救
ってもらっただけ、別にさく女が乗っ取られたわけでは・・・・・・・・

「あなたがさく女を愛していたのは、よく分かるわ。すくなくとも、
去年までの2年間、私たちは長い時間一緒に過ごしていたのだから、
それぐらい分かっているわ。でも、もうさく女なんて、どこにもな
いのよ。あなたがどうこうしたところで、どうなるものでもないし、

さく女がいつか復活するなんてこともないわ。そろそろ私たち、さく女の思い出にフタをしてあきらめなきゃいけない時よ」

えっ！　っというように、熊坂会長、梅田前会長の顔を見上げた。見る見る表情がくずれ、ポロポロと水滴が目から転げ落ちる。

「どうして、どうして、先輩がそんなことをいうの？　どうして？　もう、卒業しちゃったから、さく女なんて、どうでもいいの？　どうして？」

梅田前会長、熊坂会長にやさしく微笑みかけながら、

「違うわ！　私だって、さく女を愛していたわ。卒業したから、どうでもいいなんてことは絶対じゃない！　もし、そうなら、今日、こんなところで瞳と話しなんかしていない」

「じゃ、どうして、どうして、さく女のことをあきらめろって言うの？」

「わからないの？　もうさく女なんて、どこにもないのよ。私たちの思い出の中にしか、さく女なんてないの！　あなたも、あの子も、他のみんなも、これからイヤでも神宮寺の生徒として、歩んでいかなくちゃいけないの。わかる？　私たちの思い出の中のさく女なんかで、瞳、あなた自身や他のみんなを縛り付けてほしくないの！」

「そ、そんな……」

「さく女のプライドを持ってこれからがんばっていくのはいいことよ。だけど、さく女に縛られて、伝統を守るだとか、神宮寺の影響を排除しなきゃいけないだとか、考えてはダメ。これからのあなたたちは、あなたたちでしかできない歴史を作っていかなきゃいけないの」

ひと呼吸置き、さらに……

「それは、過去のさく女に縛られたものではなく、さく女だの神宮寺だのではない、新しい伝統をあなたたちが築いていかなきゃいけないの。これから、いまここから……」

「……」

「考えてみて！　どんな伝統も、最初登場したときには、なにか合

理的な理由があったはずなの。だけど、時代を経るにしたがつて、取り巻く環境が変化し、かつては存在した合理的な存在理由って、なくなってしまう。だから、伝統を先人が伝えた形のまま受け継ぎ、次の人へそのままの形で渡そうとするのは、形だけを伝えているだけで、本当には伝統を守るってことにはならないの。存在意義のないものを伝えるなんて、自己満足なだけで、次の世代の人にとっては、迷惑なだけなのよ」

まっ、そうだろうなあ。伝統を受け継いだ形のまま残すのであれば、メモをとったり、写真に収めたり、動画で保存したりすれば、それで十分。あとは博物館にでも展示しておけばいい。時代に合わないのに、延々と伝統を受け渡しし続けても、存在理由そのものがないのであれば意味がない。存在理由のないものなら、いずれその受け渡しは途絶え、消えていかなくちやいけない。

「伝統を守るっていうのは、伝統をいつまでも同じ形で伝え続けることではなくて、その時代ごとに必要とされる形へ変え、あたらしい存在理由を与え続けるってことなの。そうしてはじめて、伝統を守るってことになるのよ。そして、時には、時代とまったくあわなくなってしまうのなら、廃止してしまうのも、伝統を守るってことになるわね」

なんだか、熊坂会長、眉根を寄せて、考え込んだ。じゃった。

「瞳、さっきはあそこで、神宮寺の男の子の登場に、激しく反発していたみたいだけど、それは過去のさく女の伝統では男子が関わってはいけなかったから。ううん、男子がそもそも存在していなかったから。過去のさく女の伝統にとらわれていたから。でも、あなたたちは、今を生きているの。過去のさく女の生徒ではないの。もう、男子が関わらないなんていう伝統は、まったくのナンセンスな世界にいるの」

「……はい」

「あなたたちがしなければいけないのは、過去のさく女に縛られるのじゃなくて、神宮寺の生徒たちも関わることのできる新しい伝統

をつくることなの！」

梅田前会長、こぶしをグツと固め、さつと窓の外を指差す。

「瞳、前を向いて歩きなさい。決して、後ろを振り返るんじゃないわよ！」

梅田前会長、とつても満足そう！

これで、指差した先に今にも沈む夕日が輝いていると絵になるのだけど……

でも、指差した窓からは、朝日を浴びた巨大なてるてる坊主がその指先を見つめているだけだった。

伝統を守る！ 6

まあ、梅田前会長の言うことにも一理ある。

いつまでも、さく女、さく女つてこだわっていても、もうすでに、そのさく女自体が存在しないわけだし……

私たちは、これから神宮時高校の生徒として、生きるのだから、さく女にこだわるより、新しい歴史を作っていかなければいけないし、作らなければいけない立場。

でも、だからといって、感情面、特に、受験のさいの偏差値の差からくるさく女のエリート感情、神宮寺への侮蔑まで、簡単に乗り越えられるはずなんてない……

大体、私たちは、さく女に入るために、中三の一年間、どれだけががんばったことか……

最初から、神宮寺高校に入るのだったら、はっきり行って、勉強なんて、適当でよかった。毎日、遊んでばかりでも十分に合格点とれたんだよなあ〜

いまさら神宮寺なんて……

私の、あの努力を積み重ね、我慢に我慢をしつづけた一年間を返せ！ あらためて、私はそういたい。

私が複雑な感情のまま、会長たちを眺めていると、私の携帯に電話が。

今はやりの明るい曲調の着メロが部屋いっぱいに流れた。

すごく場違い……

ありさちゃんからだった。

本当なら、さつさと立ち上がって、廊下に出て、出るべきなのだろうけど、私は今足を捻挫中。その場で送話口を手で隠すようにして、出た。

『あ、つかさ、足怪我したんだって？ 大丈夫？』

「うん、大丈夫。ありがとう」

『今、剣道部の先輩たちに頼まれてたもの届けに来たら、受付で委員長が教えてくれたんだ』

「あ、そうなんだあ〜」

「ってことは、今校門前にいるってことだね。」

『帰りに、見舞いに行くよ。それまで今日は、家でおとなしくしてなよ』

「うん。あつ、でも、今、学校にいるんだよ」

『エツ？　つかさ怪我してたんじゃないの？』

「うん、捻挫だつて、10日ぐらいかかるつて」

『結構、おつきいじゃん。そんなので、歩き回っても大丈夫なの？』

「うん、たぶん。それに、これから帰るところだから」

『そっか、じゃ、一緒に帰ってあげようか？』

「うん、そうね。裏門の駐車場へパパに迎えに来てもらうから、一緒に帰る？」

『OK、じゃ、玄関で待ってて』

「はい」

「パタンと携帯を閉じた。そして、会長たちへ挨拶。」

「それじゃ、私、帰ります。全然、お役に立てなくて、申し訳ありませんでした」

「ああ………　気をつけて………」

「いいえ。役に立ってないってことはなかったわ！　神宮寺さんがいてくれたおかげで、どれだけ助かったか………」

「梅田前会長が言いたいことは、なんとなく分からないわけじゃないけど。」

「でも、まあ、そうだろうね。私のおかげで、今年は寄付金がたくさん集まったわけだし………」

「それに、昨日今日の快晴といい、私目当ての人出といい、みんなにどんなに感謝されても、されたりないぐらいの貢献をしたのは確か。」

美少女戦士つかさちゃんって、ホントすごい！ エッヘン！
そういうのをすべてのみこみ、私、二人に最高の笑顔をプレゼント。
ト。二人とも、なんかまぶしげに目を細めちゃって……..
「では、帰ります。失礼します」
私が去ったドアの後ろから、梅田前会長のうめき声が聞こえてき
た。
「しっかり、ホントすごい娘ねえ」

伝統を守る！ 7

下駄箱で、靴を履き替え、ありさちゃんを待っていると……

「ねえ、彼女、一人？ 俺とお茶でもしない？」

さっそく、私を見つけて、声をかけてくる八工が一匹。

「君、すごくかわいいねえ〜 足怪我してるんだ。これから帰るの？ 大変だねえ。送ってあげるよ」

八工なんか無視！ 無視！

私は、宇宙人、未来人、超能力者にしか、興味がないの！ 的に、フンと横をむいて、その八工を無視。

でも、途端に、その八工豹変。

「ちっ、シカトかよ！ かわいい顔して、かましてるんじゃない！」
バシンツと、私の横の壁を殴った。

思わずビクツと震えちゃう。顔から血の気が引くのが、自分でだつて感じられる。だつて、怖いんだもん！

ヤだ！ なんで、男つて、こんなことするの！ 私は、あなたに興味なんてないの！ あなたに構ってなんかほしくないの！ どっかいつてよ！ 私に近寄らないでよ！

でも、その男、私の内心の叫びを感じ取ることもなく、私の松葉杖をつかんで、取り上げた。

「なにするのよ！ 返して！」

「返してやるよ、そのかわり、俺とこれから付き合え！」

そういいながら、私の腰に手を回して、抱き寄せようとする。

「いや、触らないで！ やめて！」

ただだよ。もう！ こないだの中川君といい、なんで、いつもいつも、私ばかり、こういう目にあわなきゃいけないのよ！

その男、私の手の自由を奪い、強引に顔を近づけてくる。

「イヤ！ だれか助けて！」

私がそう叫んだ瞬間だった。

「お前、そこで何してる！」

だけれが、私を助けに来てくれた。

「うるせい！ すっこんでろ！」

ハエ、すこんでみせる。なんか、すつごく、芝居がかった態度とセリフ。

「彼女嫌がつてるじゃないか！ その手を放して、消えな！」

「おまえこそ、どこかへいきな！」

ハエ、私を突き飛ばして、身構え、私を助けに来てくれた人に殴りかかっていった。でも、なんていうのか、こぶしのスピードが……遅ッ！

それこそ、ハエが止まっちゃいそうなスピード。

あれなら、私でも簡単によけられそう。

でも、私を助けに来てくれた人は、その超鈍足パンチを見事に顔面に受けて、吹っ飛んでいった……

あ、でも、なんか、パンチで飛ばされたというより、自分から跳んでいったみたいに見えたのだけ……

その人、すぐに立ち上がり、殴られた頬を押さえ、『親父にもぶたれたこと無いのに！』

はあ、なんだかなあ。

もちろん、この後の展開はお約束。

その人の反撃にあい、『おぼえてるよ！』とかなんとか、ハエとつと尻尾を巻いて退散。

で、勝ったその人、精一杯の優しい笑顔で、私に手を差し伸べながら、

「じん……お嬢さん、お怪我はありませんでしたか？」

うん……

この場合は、やっぱり彼のシナリオどおりに演じてあげた方がいいのかな？ それが親切つてもものだろう。バカバカしいけど……

それに、さっきの八工を雇ったり、着るものにも結構お金がかかっているみたいだし、もしかするとお金持ちなのかも。

「はい、ありがとうございます」

ここで、一瞬躊躇し、それから、はにかみながら、差し出してくれている彼の手をとってあげるつと……

さらに、目を潤ませながら、斜め下に視線をずらして、ちらりと彼を盗み見。

彼、耳まで赤くなっちゃって。ふふ、かわいい。

「あの、危ないところを助けていただきまして、本当にありがとうございます」

ぺこり

彼の見えないところで、舌をだしてたりして……

「い、いや、べ、べ、別に、た、た、た、大したことをしたわけじゃ……」

かみまくり。

悪乗りして、彼の両手をひしつとつかんで。潤んだ目で彼の目を覗き込んで。

「私、このご恩、忘れませんね」

たぶん、あと、1分ぐらいは。

「あ、い、いや、あの、その……」

目の端で、ありさちゃんがやってくるのが見えた。もう、お遊びの時間は終わり。彼も鼻息をあらくし、鼻を伸ばしちゃって大いに満足したみたいだから、もうこれぐらいでいいよね？

「あ、友達が来たみたい。本当にありがとうございます。私、いきますね」

こちらへ駆け寄ってきたありさちゃんに手を振り、松葉杖をつきながら近寄っていった。

この芝居をうった彼、私が彼の名前を尋ねようとしなかったことに気づいたかな？

それとも、今の出来事で、私が彼に一目ぼれしただろうなんて、舞い上がって、うぬぼれちゃってるのかな？

まあ、そのうちなにかアクションを起こしてくるかもしれないけど、すくなくとも、乱暴な手は今後使ってこないだろうな。

さつき、一瞬、私のことを神宮寺って呼びそうになったところをみると、私をピンポイントで狙ってきたみたいだし、脈がありそうって思っているうちは、手荒な真似して、嫌われたりしないように気をつけるだろう。

はあゝ 男って、ホント、面倒くさい！

後々のことを考えて、事前に手を打って置かないといけないなんて………

ともかく、しばらくは、あなたの幸せな夢に浸って、私を困らせるようなことはしないでくださいね。

私たち、その後、裏門まで歩いて、迎えに来てくれていたパパの車で家へ帰った。途中、ずっと私たちの車の後ろをついてくる車があったような気がするんだけど………

ちよっと心配。

桜色のしずく 1

翌日の月曜日。

朝の空はからりと晴れ上がっているのだけでも、天気予報では、今日は午後から雨。

私、傘を持って、今朝もパパに車で送ってもらって、学校へ。行きは会社へ向かうパパの車で送ってもらえるけど、帰りは当てにできない。今日は歩いて帰らなくちゃ。昨日、家に帰ってから、ゆっくり休んだから、ほとんど痛みもなくなつて、快調、快調。

これなら、なんとか傘差しながらでも、家に帰れそう。私、気分よく、裏門から、玄関まで来ると、私の下駄箱、すごいことになっていた。

靴箱全体が手紙でいっぱい。下駄箱に入りきらない手紙のせいで、ふたも閉まらなくなつてるし………うへっ！

なんなの、これ？ 今日、さすがに、呼び出されても、この足じゃ、いけないのに。このうちのどれぐらいが、私に呼び出しをかける手紙なのだろう？

ど、どうしよう………それに、この中のラブレター全部に、付き合えませんが、いい友達でいましょう。なんて、返事を書かなくちゃいけない。それだけで、何時間かかってしまうのだろう？

ありさちゃんなんか、こんなの、私のことを考えずに、一方的に想いを伝えようとしているだけなのだから、無視して、ゴミ箱へ直接捨ててしまえばいいっていうけど。でもダメ。私の頭の中で、どぶ川に浮かぶ私の服だとか、血だらけになった足だとか、鈍く光る画鋏の針だとかのイメージが………

途端に、身震いしちゃう。

とにかく、全部を回収して、教室へ向かった。

教室で、全部に目を通して、仕分けなきや。
呼び出し状か、ただのラブレターかだけでも……

教室では、同級生たち、私を遠巻きにして見てる。

なんだよあれ？ って私を指差して、ケツ！ あんなの見せつけて、自分がもてるってことの自慢かよ！ ってなことを隠れて言い合っているのだろうなあ。

でも、そんな陰口には構ってられない。

急いで全部に目を通して、呼び出しだけでも、確認しておかなくちゃ、後で、どんな目にあっちゃうか……

私、目を血走らせながら、一通一通目を通していった。

それらは、ほとんどが、昨日一昨日と観桜会にやってきて、私を見かけた上級生たちからの手紙。中には、私を直接見かけたのではなくて、昨日出回っていた写メをみて、一目ぼれしたっていう人もいるみたいだけど。

その一通一通に私への想いが書き綴られ、私の美しさが褒め称えられ、彼らの幻想にだけしか存在しない甘い言葉を私が口にするのを期待していた。

でも、全然だめ。

朝のホームルームが始まるまでに、やっと全体の三分の一を片付けただけ……

私、絶望し、半狂乱で考え続けていた。どうしよう！ どうしよう！ どうしよう！

でも、答えなんてない。そもそも手紙が大量すぎて、それらに全部目を通すだけの時間が存在しない！

私の中の悪魔な部分が、そんなもの、ほっっておきなさい！
なんて、ささやいてくれる。

もともと、私の気持ちなんかまるつきり無視して、一方的に自分の気持ちを伝えようとしているだけ、まともに相手にして、自分の時間をなくすなんて、本末転倒な話！

でも、私の中の天使な部分は……

とにかく、わき目も振らず、全部読んであげるのよ！ あなたのことを想い。あなたのために一生懸命書いた、彼らの想いの結晶なの。しっかりと目を通してあげて、彼らの想いを汲んであげなさい！

なんて、ささやいてくるし……

でも、そもそも、そんな時間がないのだから、困っているんじゃない！

たとえ、時間がなくても、読もうと努力したってことが重要なのよ！

なんて、頭の中で、悪魔と天使が……

うあああ~~~~！！！！

「いい加減にしてえ〜！！」

つい声に出して、立ち上がってしまった。先生も教室のみんなも、一斉に私を目を丸くしてみていた。

桜色のしずく 2

4時間目終了のチャイムがなり、いつものお弁当タイム！

でも、私は、手紙に目を通すだけ……

まだ、半分も進んでいない。これじゃ、お弁当食べられないよ。

と、教室のドアが開いて、飛び込んでくる影が……

「つ・か・さ・ちゃん！」

抱きついてきたのは、熊坂さん。でも、私、それどころじゃない

！ 一人で黙々と手紙に目を通す。

「つかさちゃん、なにしてるの？ お弁当食べないの？ ね？ あ

つちで一緒にお弁当食べよ？」

委員長を指差して、お弁当に誘ってくれるのは、うれしいんだけど、私は、今、それどころじゃ……

返事もしないで、黙々と目だけを動かす。

「ほら、つかさちゃん、ご飯食べないで、そんなのばかり読んでると、体壊しちゃうぞ！」

無理やり手に持っていた手紙を取り上げてくれるし……
「十二読んでるの？ えつと……」 『初めて、あなたを
にしたときから、ボクはあなたに夢中になってしまいました。ボク
は今、あなたの虜です。昨日までは、真っ暗で、何も見えない高校
生活でしたが、あなたという光を目にしたとたん、ボクの人生は暗
闇から解き放たれ、ばら色へと変わったのです。どうか、どうか、
ボクの気持ちをご分かってください。あなたが好きです！ 大好きで
す！ あなたに嫌われてしまったら、ボクには絶望しか残りません
！ 死ぬしかありません！ どうか、ボクを嫌わないうでください！』
……

熊坂さん、私が呼んでいる手紙の一節を教室中に聞こえるように
読み上げてくれるし……

熊坂さんが読み上げている間、シンと静まり返ってた教室、終わ

った途端、一斉にひそひそと。

耳にかすかに、『す、すごいわねえ〜』だとか、『熱烈う〜』だとか、『私もあんな手紙もらいたい』だとか、聞こえてくる。

「ねえ〜？ つかさちゃん、もしかして、その手紙の山って、全部、こっぴつヤツ？」

私から取り上げたラブレターをひらひらと振る。

「うん、そう」

途端に、教室にいる生徒たち全体から地鳴りのような唸り声が・

・・・

『うううう〜！！！！ す、すげえ〜！！！！』

「それ、全部読まなくちゃいけないの？」

「うん・・・・・・・・」

「そんなの絶対むりじゃん！」

「分かってる。でも、読まなくちゃ・・・・・・・・」

「どうして読まないといけないの？ どうせ、不可能なんだし、放つておけばいいことじゃない？」

「でも、一生懸命、私のために書いてくれたのに、読んであげない・・・・・・・・ 書いてくれた人の気持ちを踏みにじるなんて、できない！」

「って、だからって、つかさちゃん、これを書いてきた人全員と付き合っつてわけじゃないんでしょ？」

「うん、だから、目を通して、返事を書いて、お断りをしなくちゃ・・・・・・・・ 時間が無いの！ お弁当、今はたべられないの！」

私、次の手紙を取り出して、読み始めた。

「・・・・・・・・・・はあ〜」

ため息を吐くと、熊坂さん、私の机をドンとつよく叩きつけた。

え！？ な、なに？

「いいわ！ 私が何とかしてあげる。その代わりに、私たちと一緒にお弁当たべよ？ いい？」

「な、何とかって・・・・・・・・・・？」

「ちょっと待ってて、いま電話してくるから」

そういうと熊坂さん、廊下にて、だれかに電話を掛け始めた。
やがてもどつてくると、

「つかさちゃん、OKよ！ もうそんなの見なくていいから、私たちと一緒にお弁当たべよ」

って、強引に私の手をとって、委員長の方へ連れて行くところ
し……し……

「ち、ちょっと、ちょっと!」

「大丈夫！ ダイジョーブ!」

私、熊坂さんに連行されちゃった。

何度も未練がましく、私の机の上のラブレターの山を何度もチラ見していた。

そのたびに、熊坂さん、『大丈夫！ ダイジョーブ！』って、本当に大丈夫なのかなあ？

今日は、私と熊坂さん、委員長の他に、ありさちゃんと名も無き女子4人組も一緒。全8人の大所帯でのランチ。

女の子たち、委員長のお弁当をのぞきこんで、「わあ〜 カラフルでかわいい！」なんて、口々に褒めちゃって。

でも、そのお弁当は、私たちみたいに、毎朝ママに作ってもらうのではなく、委員長が手作りしてきたなんて、聞いた途端、すごい！ って尊敬のまなざしで委員長を見たりして。

驚いたことに、熊坂さんのお弁当も、熊坂さんお手製……………

「お姉ちゃん分も作るから、ついでに私の分も」
「だなんて……………ま、負けた……………」
「やがて……………」

「そろそろ、かな？」
なんて、熊坂さん、一人でうなずき始めた。

そのつぶやきが合図でもあったかのように、教室の前、黒板の上のスピーカーが、ガーガーなり始め、最近よく聞く声が……………

『神宮寺高校生徒会より、生徒会連絡』

熊坂会長の声だ。この場合、神宮寺高校生徒会だから、熊坂副会長の方がいいのかな？

『生徒会連絡。関連各位、関係者に連絡事項。神宮寺つかさ関連』
教室中の全員の視線が私に集まる。

「え！？ 私！？」

そんな中、スピーカーを通して、手元の紙がカサカサなるような音がして、メモが読み上げられ始めた。

『各位からの手紙等、ありがたく拝読させていただきましたが、こちら諸般の事情により、お申し出の件、お受けいたしかねます。だそつだ。さて、みんな、ご愁傷様』

つて、ええ〜！！ なにこれ！？ えええ〜！！

『今日、彼女の下駄箱に大量の手紙が入られていた。彼女、優しいから、その大量の手紙に全部目を通して、返事を書くつもりだったみたいだけど、さすがに、量が多すぎて、物理的、時間的に不可能なので、こちらの方で制止した。手紙を読むだけでも相当な負担がともない、彼女の身が持ちそうになかったのね。ともかく、彼女の意志としては、今はだれとも付き合うつもりはないそつだ。それは各自理解しておいてもらいたい。なお、この放送をもって、すべての手紙への返事とする』

たちまち、さくらヶ丘のあちこちから、男子生徒たちのうめき声が……

それどころか、麓の神宮寺の方でも、校舎中に悲嘆にくれる嘆きが満ちたという……

『みんなの自分の気持ちを伝えたいという純粋な想いは尊いものだと思うし、それが分かっているので、彼女も一生懸命それに応えようと努力はしてくれたのだが、さすがに、限度というものが……
・ 彼女の時間や体力を大幅に削ってまで、そうするのはコクである。なので、今回、想いが通じなかった諸君、自分の一方的な想いを押し付けようとするのではなく、相手のことも慮って、相手に過度な負担をかけないということも学んでもらいたい。そして、この経験を糧に次の恋に邁進していつてもらいたい！』

「……………」

「……………なに、あれ？」

「……………」

様々な疑問があるけど、でも、これで確かに私、あのラブレターの山から解放されたかも？

これで、よかったのよね？ 間違いじゃないよね？

ハア~~~~

で、スピーカーからの熊坂会長の声、まだまだつづいて……

『次も、生徒会連絡』

え？ また？ また、なにか私に関して？
でも違った。

『うちのOより、Tへ。了解しました。今度の土曜日楽しみにしています。だそうだ。T君、おめでとう！』

その途端、スピーカーの向こうで、誰かが慌てて、駆け寄ってくる気配が……

『ち、ちよ、ちよ、ちよっと！』

『こら！ いま放送中だぞ！ 静かに！』

『か、会長~~~~』

ありさちゃん、真っ青になっちゃったし、私と熊坂さん、委員長、思わず、お互いを見交わしちゃった……

大崎先輩……

その放送の直後、多くの同級生たちが悲嘆にくれている中、神宮寺の2年生教室の片隅で、ひとりガッツポーズをしている田中という少年がいたとかいう。

なにはともあれ、以降、神宮寺高校で長く受け継がれていくことになった、『愛の生徒会連絡』のこれが一番最初の放送だったのである。

桜色のしずく 4

放課後になり、あの放送のおかげで、今日からは、呼び出しに應じる必要はもうない。

私、なんとなく晴れ晴れとした気分で、帰り支度を始めていた。

教科書とノートをカバンにつめて、杖と傘をつかんで……

あっ、降ってきた。

教室の窓際の席から、そういうのが聞こえてきた。

思わず、窓の外を見てみると、鉛色の雲、薄暗い空。かすかな雨粒の線がまっすぐ地上へと伸びている。

と見る間に、その空から地上をつなぐ線は太さを増し、激しく窓を叩きつける。

すごい雨。一昨日、昨日と、私の晴れ女パワーのせいで、雨が降るのを阻止されちゃったから、その分もこれから降ろうとでもいうのかな？

ともあれ、教室を出、一旦、廊下を生徒会室へ杖を突きながら歩いていく。

「つかさちゃん、待って！ お姉ちゃんのこと、行くんでしょ？」

一緒にいこー！」

なんていいながら、私の杖を引っ張るのは、もちろん熊坂さん（妹）。その後ろから、

「ひかりん、神宮寺さん、怪我してるんだから、杖ひっぱったりしないの！」

なんて、やさしく注意してくれるのが、委員長。

おもわず、委員長と目が合って、お互いの顔に自然と笑みが……

「おす、みんな、一昨日、昨日と、おつかれさま」

いつものように黒板の前、熊坂会長が演説を始める。

「とくに、昨日は、閉会后に、後片付けまでご苦労様だった」

そう、昨日の観桜会終了後、メンバー全員での撤収作業が待っていたのだ。まあ、私はこの足だし、たとえ、昨日帰らず、居残っていても、満足に手伝いもできなかつただろうけど……

で、今日は、反省会。

「今年の観桜会。天気もよく、君たちのがんばりのおかげもあって、例年にもなく、大成功だった。これまでの観桜会の中で、歴代ナンバーワンの人出と寄付金が集まった。このような大成功時の会長となれたこと、私は、非常にうれしく思う。みんなありがとう」

会長、深々と頭を下げる。

みんなスタンディングオベーション。

でも……

「みんな、ありがとう。だが、最高の成績を残せた観桜会だったが、残念なことがいくつかある。まず、怪我人が出たこと」

ビシッと私を指差す。

「さいわい、我々の仲間だったので、よかったが、これがゲストだったなら、どういうことになっていたのか、考えるだに恐ろしい……

……今一度、安全確保の規定の見直しが必要だと思う」

かたわらに控えていた少し赤い顔の大崎先輩、さつと立ち上がった、黒板に『安全規定の見直し』なんて書き込む。

「つぎ、ゲストの中に、例年になく無理難題をふっかけてくる者が続出した。これもゲストへの対応マニュアルの早期改訂が必要だと思うわね」

うん、そうだったねえ。私の連絡先を教えるだの、紹介しろだの、会長大変だったものねえ。

ん？ って、今の二つ、両方とも私に関係してくるものばかりじゃ……

私って……

もしかして、トラブルメーカー？

いや、そんなことはない！ すべては、私のこの絶対的な美がい

けないのよ！

美の女神は波乱万丈な一生を送るのが宿命なのよ！

がんばれ、つかさちゃん！ ふぁいとぉ〜！

「その他、細かいことがこまごまあったことはあったが、概ね、上出来だった。みんなよくやったぞ！」

会長、そのまま座り込んで、大崎先輩に目で合図。

「では、だれか他に、なにか気づいたことありますか？」

そういつてぐるりと全員を見回す。

でも、だれも、手を挙げるものはなかった。

「OK では、この二点『安全規定の見直し』と『ゲスト対応マニュアルの改訂』を今後の課題として、考えていくものとします」

パチパチと拍手。だれも異議をとねえるものは、なかった。

「さて、今後の方針が固まったところでだが、昨日までの観桜会で私、考えたことがある」

会長が再び立ち上がり、話しはじめた。

「いままで、私は、さくらヶ丘女子の伝統にこだわり、さく女の伝統をひたすらに守ることをよしとしてきた。それは決して間違いではないし、今回の観桜会は、まさに、そのさく女の伝統そのものだった」

会長、さらに話を続ける。

「今回の成功は、さく女の伝統の勝利であり、我々の勝利でもある。でも、閉会して、みんなで片付けるとき、こつも思った。金曜日、事前の予想よりも短時間で、準備が完了したのは、我々ががんばったからだけではなく、男子たちが手助けしてくれたから。それだけでなく、観桜会期間中、いろいろな場面で、私たちが困っているときに、男子たちが手を差し伸べ、助けてくれることが、あちこちで見られた」

そう、私が足をひねって動けなくなったときに、助けてくれたのは、男子の佐野君だった。

「もし、我々がさく女の伝統をかたくなに守ろうとするのであれば、

そんな男子の助力、突っぱねねばならなかった。だが、我々はそうしなかった。その意味では、今回我々は、さく女の伝統を逸脱した存在だったといえる。だがしかし、そうであっても、今回は空前の大成功だった。伝統を遵守しなかったにもかかわらず、今までだれもなしえなかったほどの大成功を納めた。となると、我々、さく女の伝統を守ることばかり考えていたが、そんなに、堅苦しく考える必要はないのかもしれない。伝統を時代に合わせて、変えていく必要があるのかもしれない。いや、時代に合わせて、変えていくべきなのかも……」

昨日の梅田前会長の意見に近いねえ。

「我々、これからは、単にいままでのさく女の伝統を受け継ぐだけじゃたりない。それだけでなく、新しい神宮寺という伝統を生み出していかなくちゃいけない。我々は元さく女の生徒だったけど、今は違う。今は神宮寺の生徒。我々は過去のさく女にとられることなく、新しい神宮寺の伝統を生み出さなければいけない！ だから、みんな私とともに、さく女の伝統を守るだけでなく、これからの神宮寺高校の伝統を生み出していく手伝いをしてほしい。一緒に、新しい伝統を作っていこう！ 神宮寺の者たちの手でなく、私たちの手で、新しい伝統を築いていこう！」

会長の突然の提案に、その場のメンバーたち、最初は戸惑っていたみたいだけど、その言葉を吟味し、しだいに理解していった。

そして、その言葉は熱烈ではないけど、温かい拍手に包まれたのだった。

「これからの神宮寺の伝統は、私たちが生み出していく！」

しかし、昨日は梅田前会長、神宮寺の生徒たちとともに新しい伝統を作れとかなんとか言っていたのに、熊坂会長の結論は、やっぱり神宮寺ではなく、さく女が主体となってなのね。

会長らしいというのが、なんといいのか……

反省会も終わり、解散になった。

私と委員長、熊坂さんは、並んで、玄関へと向かって歩いていく。と、途中にある、視聴覚室から、そろそろと男の子たちが出てきた。みんな帰り支度をしてはいるけど、サッカー部の部員たちばかり。今日は外が大雨になっちゃったので、サッカー部の練習お休みになって、ビデオを見ながらの戦術講義とかになったんだねえ。

もちろん、サッカー部の部員なので、その中には……
「島崎、帰りに駅前でカラオケしていかない？」

なんて、同じ部員に誘われている男子が。そして、私の隣には、思いがけないときにその男子の姿を目にしてしまって、耳まで真っ赤になってうつむいている女子が……

「わりい！俺、ちょっと教室に忘れ物してきたから、一旦、取りにもどるわ！また、今度な！」

なんて、私たちに気づきもせず、さっさと教室の方へもどっていつちゃった。

私の隣で、委員長、ちよっぴり落胆気味。

最後に視聴覚室から出てきたのは、サッカー部の顧問の先生。廊下の先に、玄関へ歩いていく部員たちの姿を見つけて……
「おーい、お前ら、島崎見なかったか？あいつ、傘忘れていつてるぞ！」

だなんて……

でも、サッカー部の部員たち、自分たちのおしゃべりに夢中で、そんな顧問の先生に気づきもせず、廊下を曲がっていつちゃった。

ヤレヤレ、って感じで首を振りながら、ヒョイと振り返ると、視線の先には、私たち。

「あ、神宮寺か、今、帰りか。気をつけて帰るんだぞ！あ、そうだ、お前ら、島崎と同じクラスだったな？」

「はい」

「じゃ、あいつに傘届けてやってもらえるか？」

「あ、はい、いいですよ」

というわけで、私の手元に島崎君の傘が……

これは……この状況って、何かに利用できないのかな？
なかなか想いを伝えられない女の子、その女の子に気づいてあげられない、鈍感な男の子。そして、その男の子の傘が手元にあり、外は傘なしじゃられないような大雨。

それから、私考え続けながら、玄関まで移動した。杖を突きながら歩いていたせいばかりでなく、考え事をしながらだったので、さらにさらに、ゆっくりとしか歩くことができなかった。

玄関に着くと、熊坂さんは、D組女子の下駄箱コーナーへ。私と委員長はA組女子の下駄箱コーナーへ。

まあ、玄関でしばらく待っていれば、島崎君がやってきて、傘を渡せるだろうって思っていたのだけど、玄関の外を見ると、すでに、ひさしの陰、ギリギリ濡れない場所に当の島崎君が立っていた。

島崎君、傘を持っていないので、恨めしそうに空を見上げている。傘をどこで忘れたのか、気づいてないのかなあ？

きくと、島崎君のことを見ているって女の子がだれなのか、考えるのに夢中で、傘をどこで忘れたかなんて、思い出せないのかも……

ともあれ、島崎君、小降りになった頃を見計らって、カバンでも頭に掲げて、走るつもりでいるみたい。さかんに空の様子を気にしている。

その瞬間、私、ピンと来た。

そうだ！ これなら……

そして、それを実行した。

私、玄関の扉のところ、島崎君の真後ろに立った。D組の下駄箱から、来るはずの熊坂さんを待っているかのフリ。でも……

「委員長、ちよつとここへ、私の前に立って」

「え？ なに？」

そういいながらも、素直に、なんとなくうれしげに委員長、私の前に立つてくれるし。やっぱり、好きな人の近くに立てるのが、うれしいのだねえ。

「はい、そのまま回れ右して！」

「え？ ころ？」

少し握った手を唇の前に置き、頬を多少赤らめて、反対の方をむいた。

もしかすると、委員長、今、島崎君の背中に視線が釘付けかな？ 私、そう考えながら、委員長の背後から、すこし大きめの声で島崎君に声をかける。

「ねえ、島崎君？ 傘ないの？ 私の傘に入れてあげるから、一緒に帰る？」

え！？ なんて、驚いて、振り返ろうとした委員長。でも、振り返る暇も与えず……

ドシンッ！！！！

全力で委員長の背中を押した。そして、私は、その反動を利用して、近くの柱の影へ。

「キャッー！」

計画通り、委員長、前へつんのめるようにして、二、三步前へ。ちよつと、私の声で背後を振り返った島崎君の目の前。

「え？ ああ、神宮寺さん？ いいの？ わりい……ん
？ 委員長？」

「し、し、島崎、君……」

振り返った島崎君、後ろにいたのが、私でなく委員長だったので、すぐ戸惑った様子だった。

一方の委員長も、自分の傘を胸の前に抱えたまま、ビックリして固まっているし。

「・・・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・・・？」

一瞬見つめあった二人、委員長、たまらず、視線を足元へ。

そう、委員長、そこで勇気を出して、誘うの！一緒に帰ろって！がんばれ、委員長！

でも、委員長は、視線を落としたまま・・・・・・・・・・

と、突然・・・・・・・・・・

「っ、使って！」

胸に抱えていた自分の傘をグイッと島崎君に捧げるように突き出し、無理やり渡した。そして・・・・・・・・・・

あっ！逃げた！

委員長、そのまま雨の中へ。

ピッシャ！ピッシャ！と委員長が一步踏み出すたびに水がはねる。その場から、走り去っていく委員長の髪の毛が激しく上下に揺れる。

島崎君、自分の腕に抱えさせられた女物の傘と走り去っていく委員長の背中を交互に見ながら、当惑し、混乱していた。呆然と立ち尽くしているばかり・・・・・・・・・・

な、な、な、なにしてるのよ、委員長！そこが一番肝心なところじゃない！勇気を出して、なんで、誘えないのよ！なんで、逃げ出しちゃうのよ！

あまりの展開。折角、お膳立てしたのに、委員長、逃げ出して行ったし。こんな場合、私どうしたらいいの？

こんなことって、こんなことって、ありえない！

と、そのとき、A組男子の下駄箱コーナーから一人の男子が走り

出てきた。そして、ぼうつと突っ立っている島崎君に大声で叫んだ！

「バカ、なに突っ立ってるんだ、島崎！ 追え！ 追うんだ！」

島崎君、一瞬その叫び主の方を見た。すぐに、うんとうなずくと、はじかれるようにして、雨の中へ飛び出していく。

それを見送り、私、慌てて、その叫んだ男子を振り返った。

「ど、どうして……」

佐野君が、にこりと笑ってた立っていた。

「ああ、ちょうど、先生の手伝いで、呼ばれてたから、俺、これでも副委員長なんですね」

「……ち、違う……」

「ん？ 神宮寺は、島崎たちの応援をしたかったんだろ？ なら、あれでいいじゃん？」

私、混乱したまま。

「お、さすが、サッカー部のエース。もう追いついてる」

私、佐野君が指差す方を見た。

校門のところ、島崎君、もう委員長に追いついている。逃げる委員長の腕を押さえ、引き寄せた。そして、強引に抱き寄せる……

「そう、そう、島崎、そこだ、そこで好きだっていつてやれ！ そして、唇を！」

隣で、妙に興奮している佐野君、でも、だからって、今、何で私の手をつかんだの？

大きくて、あつたかい手。ふふ、ちよつとゴツゴツしてる。

校門前の二人、抱き合つたまま、雨に全身濡れながらも、なにかささやきあっていたみたい。見つめあつちやつて、いい雰囲気かもだけど、ちょうど通りかかったサッカー部の男の子たちに、ヒュ〜ヒュ〜と口笛を吹かれ、女の子たちに、ヒソヒソ指差されながら見られていることに、急に気がついたみたい。

あらら……二人、パツと離れちゃった……

「ったく！ バカ島崎！ そこで、なんで思いつきりいかないかないかなあ〜」

っつ……いたいつ！

佐野君、手に力を入れないで。痛いんだから……でも、あの二人、遠くからでも分かるぐらい真っ赤になっちゃっ

て………

見てる私が、くすつて笑っちゃう。

「ま、あの島崎だから、仕方ないか。とりあえずは、あそこまで進歩したんだから、OKってことで、ね？」

佐野君、私に微笑みかけてくれるのは、うれしいのだけど、そろそろ手を放してほしいなあ？　なんて、私的には、そう思う。

でも、その間に、委員長と島崎君、ぎこちなく、でも、なんだか見てる方が爽やかに感じられるぐらいの様子で、委員長の傘を開き、並んで、校門を出ていっちゃった。完全に私たちのこと、忘れちゃってるみたい。まあ、それでいいのだけど………

手をつなくでもなく、肩を抱くでもなく。ただ、二人でひとつの傘におさまって、並んで歩く。ただそれだけ………

ただ、それだけ………

委員長も、島崎君も、照れくさそう。それ以上に、しあわせそう。いいなあ。

その様子を見ながら、隣の佐野君、ボソリと………

「しかし、あんな女物の傘で、ふたり入ったんじゃ、あんまり傘の意味がないような気がするな。絶対、明日、あいつら風邪ひいて学校休むな………」

な、な、なんで、そこで、そんなことをいうのかなあ？　男って！

折角、素敵な場面だったのに！　ぶち壊しよ！　まったくもう！　私、佐野君に握られている方の手を思いつきり振った。

その動きで、佐野君、自分が無意識に何をしていたか、ようやく気づいたみたい。

「あっ！　わ、わるい」

佐野君、慌てて、手を放した。ちよつと、手の温度が下がった。

「えつと………」

熊坂さん、私たちの横から、遠慮がちに、声をかけてくる。いつもマイペースなのに、なんだか珍しい。

「島崎君だっけ？ あれ？」

「うん、そう」

「そう………よかったね」

ちっともよさそうには、見えない表情。

ん？ もしかして、この娘、島崎君に嫉妬してるのかな？

委員長とは中学時代からの親友みたいだし、目の前で二人の姿を見せられて、動揺しているのだろうなあ。

「あ、そうだ、神宮寺？ もしかして、それ、アイツのдарろ？」

佐野君が照れ隠しか大きな声で、私の抱えている傘を指した。

「うん。サッカー部の顧問の先生が渡してって」

「そっか、じゃ、それ、俺から、渡しといてやるよ。アイツの家近所だし、お前が持ってたんじゃ、ヘンな誤解の元になっちゃうから」

「え？ でも………」

「それに、今朝、晴れてたから、傘持つてくるの忘れてたし………」

そういって、強引に傘を奪っていつちやった。

「たく！ もう！ 勝手なんだから………」

それから玄関の先で、振り返って、いたずらそうな表情で、

「あ、そうだ、今日も俺の背中乗っていくか？」

「ば、バカ！」

「バカ！ もう、佐野君のバカ！ 私、真っ赤になっちゃうじゃない！」

全力で、拒否する私に、佐野君、片眉を上げただけ。

「そっか、じゃ、また、明日な？」

軽く手を振って、スタスタ歩いてく。

う、うん………

その背中に、すっかり冷たくなった手を小さく振った。佐野君が見てはいないけど。

「私たち、雨の中を並んで歩いて帰った。

なんとなく、会話が途切れ途切れ、続かない。

熊坂さん、機嫌悪そう。

「ねえ？ 熊坂さんって、委員長と中学一緒だったんでしょ？」

「……………うん」

「中学時代の委員長って、どんな女の子だったの？」

「普通の子だった」

「……………」

「はあ、なに怒ってるのよ！ まったく！」

「タダでさえ、松葉杖について、歩きにくいのに、苦勞して会話しようとしてるのに！」

「ねえ？ 熊坂さん、怒ってる？」

「別に怒ってないよ！」

「うそ、怒ってるよ。さつきから、機嫌悪いし」

「怒ってない！ 機嫌悪くない！」

「プイツと顔を背けちゃって、素直じゃないんだから。まったく！」

「さつきはごめんね。勝手なことしちゃって」

「きつと、委員長を勝手に島崎君にくつつけちゃったことを怒ってるのだからな。」

「な、何、謝ってるの！ 別に、私怒ってないから！」

「中学時代から友達だった委員長を勝手に島崎君にくつつけちゃって、ごめんね。予め、委員長の親友の熊坂さんに言っておくべきだったね」

「とたん、熊坂さん、真っ青になっちゃった。」

「ち、ちがう！ そんなことじゃ……………」

「え？」

「違う！ 私、彼女が好きになった人と仲よくなれたことは、本当

にうれしいの！ 本当に、心の底から、喜んでいるの！ すごく、すごくよかったと思ってるの！」

必死に、言っている。どうやら、本心みたい。

ん？ 委員長のことで腹立ててるのじゃないの？ じゃ、なにさつきから怒ってるの？

．．．．．！？

ま、まさかねえ？

佐野君に手を握られていたからって．．．．．

あ、でも、なんでさつき私、佐野君に手を握られたときに、イヤだって思わなかったのだろう？ それどころか、むしろ私、心地よかったような。

いや、そんなことはないはず。だって、だって、だって、私は．

．．．．

私、混乱して立ち止まっていた。

熊坂さん、そんな私の正面に回って、真顔で顔を覗き込む。

「私、愛してるの！ 誰にも渡したくないの！」

私の手をとり、両手で握った。ちょうど佐野君が握っていた手。

佐野君よりも強く。

好き。

私の耳に、かすかに彼女がつぶやくのが聞こえた。

なんだか、全然本当のことのようにには思えない一瞬がそこにあった。ぼうつとしていた。頭の芯がしびれてしまっているかのように．

．．．．

まったく現実感のない視線の中の彼女の傘には、桜の花びらが散っているのがみえる。もしかしたら、私の傘にも桜の花びらが．．

．．．．

ふっと、その傘の向こうに私は見た。

「あっ、虹！」

いつの間にか、雨は止んで、この町の上に虹がかかっていた。

熊坂さん、私の声に釣られて、振り返り、その虹を見上げた。

決して鮮やかではない、不鮮明な七色の帯。自分でもはっきりとは分からないモノ。でも、なにかがそこにはある。きっと、なにかが………

私、その熊坂さんの横顔に近づいた。

そして、

チュツ

「えっ!?!」

「ありがとう。でも、これだけは覚えてて、私は私。だれのものでもない! 私のことは、私が決めるの。あなたでも、他のだれでもないわ」

熊坂さん、私がキスした頬を押さえて、戸惑ったように、私を見つめている。

「それでもよかったら、私のそばにいて」

熊坂さん、小さくつぶやいた。

ウン

その坂の桜並木、散れ残った花びらから、ポタポタと水滴が落ちていく。

その桜色のしずくが私たちの靴先をぬらし、桜の根元に小さな水滴を作って、波紋に揺れる虹を映し出していた。

もう桜の季節は終わりだった。

桜色のしずく 8 (後書き)

作者のモチベーションの向上・維持のため、作品の感想・レビュー・
評価をいただけると、ありがたいです。
どうぞ、お気軽におねがいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9080i/>

さくらヶ丘恋物語 1 桜

2010年10月8日14時49分発行